

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.12 2000年度



The Board of Education in Oita City 2001

大分市 埋蔵文化財調査年報

vol.12 2000年度

The Board of Education in Oita City 2001

序 文

本書は平成12年度に行われた埋蔵文化財調査の概要を収録したものです。

21世紀を迎え、大分市では大分駅周辺総合整備事業をはじめ都市基盤の整備事業が急ピッチで進められており、これに伴って埋蔵文化財調査も数多く実施されています。古代より、大分市には豊後国府のほか大分郡・海部郡の郡役所がおかれ、豊後国の中心地として確固たる地位を築き、中世には大友氏のもと世界に開かれた国際貿易都市funaiとして発展しました。そのような歴史を反映して、大友氏館跡をはじめとする埋蔵文化財が発掘調査によって相次いで発見され、その繁栄の様子が具体的に明らかになりつつあります。

大友氏館跡につきましては、本書にも収録いたしましたように、館比定地の中心部における発掘調査で大型建物の基礎部分と考えられる遺構が検出され、いよいよその姿が明らかになりました。こうした調査の進展を受けて、平成13年8月13日をもちまして、まず約10,000㎡が国の史跡に指定される運びとなりました。今後、比定地全域の公有化を図るとともに、整備・活用に向けての計画を作成して参ります。

大分市教育委員会では、このような業務の広がりに対応するため、昨年4月より、これまでの文化財室と歴史資料館とを統合する機構改革を実施して文化財課を発足させ、体制の強化に努めているところでございます。2002ワールドカップを控え、世界へ向けて情報を発信する機会は、これから益々増大するものと予想されます。今後とも貴重な文化財の調査・保存に一層努めるとともに、国際貿易都市Funaiの後裔としてふさわしい情報の発信と活用にも努めて参りたいと存じます。

最後になりましたが、本市の文化財保護行政に対してご協力いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関・各位には衷心より厚くお礼申し上げます。

平成13年12月25日

大分市教育委員会

教育長 御沓 義則

例 言

1. 本書は大分市域において大分市教育委員会が平成12年4月1日から平成13年3月31日の間に行った埋蔵文化財に関する事業内容についてまとめた年報である。
2. 平成12年度における調査地点は表2および第3図に示している。
3. 本書の執筆は各担当者が分担して行い、文末に執筆者名を記している。
4. 第IV章受贈図書目録は平成12年4月1日から平成13年3月31日の間に大分市教育委員会文化財課に受贈された書籍等を掲載した。
5. 第IV章受贈図書目録の作成は直野仁美、勝間田あや及び井口あけみ（大分市教育委員会 臨時職員）による。
6. 遺構・遺物の実測および図版の作成等においては、次に記す大分市教育委員会臨時職員の協力を得た。

阿部眞知子	伊賀 円香	伊東 みほ	井口あけみ
今村 信子	内田 順子	江藤井津子	大島 紅
太田 牧枝	沖本美和子	小野千恵子	小山田裕子
河野 誠	川野 美和	河野 裕子	木村 藍子
工藤雄実子	久保 幸子	黒田きくみ	幸野 麗
小田原由実	後藤 好美	金剛 剛広	佐藤 志信
佐藤 容子	三宮多美子	実本 知子	首藤 直美
首藤美千代	白坂 直美	新野 晶子	菅 真奈美
杉浦 由香	高木真奈美	高木美智子	武田真知子
長木恵里子	堤 美智代	長畑 陽子	中村由美子
中山麻理子	西村 大	野上 孝徳	橋本 幸子
羽田 裕子	林 裕子	飛高 裕子	姫野 尚之
平田美智子	深町 麻理	藤原佳和子	法華津幸子
本田理恵子	町田ユカリ	松場 泉	三重野京子
南 優子	宮成 美恵	武藤由紀子	森 小百合
森永 美紀	山口しのぶ	結城由利恵	吉岡真由美

7. 本文中に掲載した現場写真は各担当者が撮影したものである。
8. 本文中に掲載した調査地点位置図には、大分市都市計画図（縮尺1万分の1）の該当部分を使用した。
9. 本書の編集・校正は高島および井口が行った。

目 次

第Ⅰ章	大分市教育委員会教育総務部文化財課概要	1
1	沿 革	1
2	組 織	1
3	大分市文化財保護審議会	2
第Ⅱ章	平成12年度事業概要	3
1	開発事前審査事業	3
(1)	平成12(2000)年度の概要	3
2	発掘調査事業	5
3	教育普及活動	11
(1)	大分市文化財だより(2000年度号)の発行	11
(2)	現地説明会	11
(3)	研修参加	11
(4)	新指定文化財	11
4	海部古墳資料館	12
(1)	開館までの歩み	12
(2)	常設展示の構成と主な展示物	12
(3)	特別展	13
(4)	赤米栽培の体験学習	13
第Ⅲ章	発掘調査内容の概要	14
I	下部遺跡群第125次調査 J区 q-8・9 地点	14
II	下部遺跡群第126次調査 F区 l-8~10 地点	19
III	下部遺跡群第127次調査 I区 q-s-13・14 地点	24
IV	下部遺跡群第129次調査 E区 k-14 地点	27
V	下部遺跡群第130次調査 D区 n-o-16・17 地点	29
VI	下部遺跡群第131次調査 G区 n-o-2・3 地点	32
VII	下部遺跡群第132次調査 J区 q-9 地点	34
VIII	横尾遺跡群第79次調査 D-4・6 地点(東中尾遺跡)	36
IX	横尾遺跡群第80次調査 A-20-1・B-1-1 地点(東中尾遺跡)	40
X	横尾遺跡群第81次調査 D-2・4 地点(東中尾遺跡)	44
XI	横尾遺跡群第82次調査 D-35・40 地点(東中尾遺跡)	47
XII	辻古墳群	53
XIII	大友氏館跡第6次調査	58
XIV	大友氏館跡第7次調査	62
XV	大友氏館跡第8次調査	64
XVI	大友氏館跡第9次調査	65
XVII	上野大友館(上原館)跡 第4次調査	66
XVIII	上野大友館(上原館)跡 第5次調査	68
XIX	中世大友府内町跡第6次調査	70
XX	府内城・城下町跡第14次調査	74
XI	中安遺跡第3次調査	76
XII	中安遺跡確認調査	80
XIII	南金池遺跡第2次調査	82
XIV	長迫遺跡	85
XV	城南遺跡群第3次調査(千人塚古墳)	87
XVI	羽屋・園遺跡確認調査	89
第Ⅳ章	受贈図書目録	91
1	調査報告書	91
2	定期刊行物・図録等	105

目次

第1図	地域区分図	3
第2図	地区別事前審査割合	4
第3図	調査遺跡位置図	10
第4図	文化財だより表紙	11
第5図	深山流伊予床五柱神社神楽社	11
第6図	海部古墳資料館	12
第7図	亀塚古墳公園・海部古墳資料館オープン記念講演	12
第8図	海部古墳資料館常設展示室	12
第9図	特別展「埴輪の美―北部九州の埴輪展」	13
第10図	センパによる脱穀	13
下郡遺跡群第125次調査 J区q-8・9地点		
第11図	調査地点位置図	14
第12図	125SD016土層断面実測図 (1/60)	14
第13図	125SD016遺物実測図 (1/4)	15
第14図	遺構平面図 (第2文化面) (1/300)	15
第15図	125SE020平面・断面・土層断面実測図 (1/60)	16
第16図	125SE020水溜部検出状況	17
第17図	125SE102井戸検出状況	17
第18図	125SH075完掘状況	17
第19図	125SD016検出状況 (南方向から)	18
第20図	下郡遺跡群第97・125次調査区位置図	18
下郡遺跡群第126次調査 F区k-8～10地点		
第21図	調査地点位置図	19
第22図	SE057完掘状況	19
第23図	A地点遺構配置図 (1/400)	20
第24図	C地点西側調査区全景 (東方向から)	20
第25図	下郡遺跡群第115・126次調査地点位置図	21
第26図	126CSX019遺物出土状況	22
第27図	遺構 (126CSX019) 平面・断面、南壁土層断面実測図 (1/40)	22
第28図	126CSX019出土遺物実測図 (1/4)	23
下郡遺跡群第127次調査 I区q-s-13・14地点		
第29図	調査地点位置図	24
第30図	調査区全景 (北方向から)	24
第31図	遺構配置図 (1/400)	25
第32図	SE170完掘状況	26
第33図	SE350遺物出土状況 (南方向から)	26
下郡遺跡群第129次調査 E区k-14地点		
第34図	調査地点位置図	27
第35図	遺構配置図 (1/150)	27
第36図	北側SD003～東側～南側SD003までの壁面土層断面図 (1/60)	28
下郡遺跡群第130次調査 D区n-o-16・17地点		
第37図	調査地点位置図	29
第38図	A調査区全景 (北方向から)	29
第39図	B調査区全景 (東方向から)	30
第40図	遺構配置図 (1/300)	30
第41図	130BSE007検出状況 (北方向から)	31
第42図	130BSE007平面・断面実測図 (1/30)	31
下郡遺跡群第131次調査 G区n-o-2・3地点		
第43図	調査地点位置図	32
第44図	調査区全景 (南東部分を東方向から)	32
第45図	遺構配置図 (第1文化面) (1/200)	33
第46図	131SX172遺物出土状況	33
下郡遺跡群第132次調査 J区q-9地点		
第47図	調査地点位置図	34
第48図	調査区全景	34
第49図	ST140検出状況	34
第50図	遺構配置図 (1/400)	35

横尾遺跡群第79次調査 D-4・6地点（東中尾遺跡）

第51図	調査地点位置図	36
第52図	調査区全景（南方向から）	36
第53図	79SX135遺物出土状況（南方向から）	36
第54図	79SX140遺物出土状況（西方向から）	36
第55図	遺構配置図（1/400）	37
第56図	79ST050遺物出土状況（北方向から）	38
第57図	出土遺物実測図（1/3）	38

横尾遺跡群第80次調査 A-20-1・B-1-1地点（東中尾遺跡）

第58図	調査地点位置図	40
第59図	調査区全景（東方向から）	40
第60図	SX040完掘状況（東方向から）	40
第61図	SX040土層断面（北方向から）	40
第62図	遺構配置図（1/400）	41
第63図	SX040平面・断面・土壕断面実測図（1/40）	42

横尾遺跡群第81次調査 D-2・4地点（東中尾遺跡）

第64図	調査地点位置図	44
第65図	調査区全景（南方向から）	44
第66図	81SX022集石出土状況（南方向から）	44
第67図	遺構配置図（1/300）	45
第68図	81SX054平面実測図（1/60）	45

横尾遺跡群第82次調査 D-35・40地点（東中尾遺跡）

第69図	調査地点位置図	47
第70図	遺物出土状況（北方向から）	47
第71図	ドングリ貯蔵穴群完掘状況（東方向から）	47
第72図	遺構配置図（1/800）	48
第73図	ドングリ出土状況（西方向から）	49
第74図	調査区中央断面土層（西方向から）	50
第75図	82SX080出土状況（北方向から）	50
第76図	丸木材に施された切り込み（西方向から）	50
第77図	82SX070出土状況（南方向から）	50
第78図	82SX080実測図（1/60）	51
第79図	建築部材近景（北より）	51

辻古墳群

第80図	調査地点位置図	53
第81図	調査区全景空中写真	53
第82図	1号墳全景（南西方向から）	53
第83図	遺構配置図（1/400）	54
第84図	1号墳周溝断面	54
第85図	1号墳周溝内埴輪出土状況	54
第86図	1号墳周溝出土蓋形埴輪実測図（1/4）	55
第87図	1号墳周溝出土円筒埴輪実測図（1/4）	56
第88図	明治21年地籍図及び調査区位置図（1/1500）	57
第89図	1948年撮影空中写真	57
第90図	1962年撮影空中写真	57
第91図	SD002出土遺物実測図（1/3）	57

大友氏館跡第6次調査

第92図	調査地点位置図	58
第93図	第6次調査区出土土師器基本層序対応表（1/12）	59
第94図	遺構配置図（第2面）（1/250）	60
第95図	A地点サブトレッチ土層図（1/100）	60

大友氏館跡第7次調査

第96図	調査地点位置図	62
第97図	遺構配置図（1/100）	63

大友氏館跡第8次調査

第98図	調査地点位置図	64
第99図	遺構配置図（1/100）	64

大友氏館跡第9次調査

第100図	調査地点位置図	65
-------	---------	----

第101図	出土遺物実測図 (1/3)	65
第102図	調査区西側壁土層図 (1/120)	65
第103図	遺構配置図 (1/100)	65
上野大友館(上原館)跡 第4次調査		
第104図	調査地点位置図	66
第105図	積み土③中より出土した青磁実測図 (1/3)	66
第106図	土塁土層断面図 (1/80)	66
第107図	上野大友館(上原館)跡 全体地形図及び調査地点位置図	67
第108図	土塁土層断面写真 (①②積み土)	67
第109図	土塁土層断面写真 (②③積み土)	67
上野大友館(上原館)跡 第5次調査		
第110図	調査地点位置図	68
第111図	第1調査区北側土塁および古代溝状遺構実測図 (1/50)	69
第112図	第1調査区	69
第113図	第2調査区	69
中世大友府内町跡第6次調査		
第114図	調査地点位置図	70
第115図	調査区全景(北方向から)	70
第116図	井戸跡(SE297)完掘状況	70
第117図	遺構配置図(1/400)	71
第118図	出土瓦拓影(1/3)	72
第119図	瓦出土状況	73
第120図	溝(SD010)完掘状況	73
府内城・城下町跡第14次調査		
第121図	調査地点位置図	74
第122図	遺構配置図第1面(1/200)	74
第123図	第1遺構面完掘状況	75
第124図	最終遺構面完掘状況	75
第125図	SE250土層断面	75
第126図	SK212土層断面	75
第127図	S212出土遺物「竹町米差」	75
第128図	S719出土遺物「安政十二歳 一久 庚申二月下旬」	75
中安遺跡第3次調査		
第129図	調査地点位置図	76
第130図	S510住居跡(南方向から)	78
第131図	S870住居跡(北方向から)	78
第132図	住居跡配置図と全景空中写真	78
第133図	住居跡遺構全景(南西方向から)	79
第134図	S1588住居跡(南方向から)	79
第135図	S1425住居跡(南方向から)	79
第136図	S445住居跡(北西方向から)	79
第137図	S445住居跡 カマド状況(南東方向から)	79
第138図	S990住居跡(南東方向から)	79
第139図	S990住居跡 カマド完掘状況(南東方向から)	79
第140図	S1669・1670住居跡(北東方向から)	79
中安遺跡確認調査		
第141図	調査地点位置図	80
第142図	調査区全景(南方向から)	80
第143図	遺構配置図(1/200)	80
第144図	確認調査後の第Ⅱ期遺構配置図(1/400)	81
第145図	SK001検出状況(北方向から)	81
第146図	SK001遺物出土状況	81
南金池遺跡第2次調査		
第147図	調査地点位置図	82
第148図	南側調査区全景(南方向から)	82
第149図	SE077(東方向から)	82
第150図	遺構配置図(1/400)	83
第151図	SX093土坑検出状況(南方向から)	83
第152図	出土遺物実測図(3は1/2、その他は1/3)	84

長迫遺跡

第153図	調査地点位置図	85
第154図	遺構配置図(1/400)	85
第155図	墳墓(S001)地形図(1/200)	86
第156図	調査区遠景(西方向から)	86
第157図	墳墓(S001)全景(北方向から)	86

城南遺跡群第3次調査(千人塚古墳)

第158図	調査地点位置図	87
第159図	前方部側周溝検出状況	87
第160図	遺構配置図(1/300)	88

羽屋・面遺跡確認調査

第161図	調査地点位置図	89
第162図	調査区全景(南方向から)	89
第163図	遺構配置図(1/200)	89
第164図	SB001検出状況	90
第165図	SB001柱穴遺物出土状況	90

表 目 次

表1	開発事前審査件数一覧	4
表2	大分市平成12年度発掘調査地一覧	6
表3	大分市平成12年度試掘調査地一覧	7



第Ⅰ章 大分市教育委員会教育総務部文化財課概要

1. 沿革

昭和51年4月1日	大分市教育委員会社会教育課内に文化財係を設置
昭和59年6月28日	大分市教育委員会社会教育課文化財係を大分市教育委員会社会教育課文化財室に改組
平成5年4月1日	大分市教育委員会文化振興課文化財室に改組
平成10年4月1日	大分市教育委員会生涯学習課文化財室に改組
平成12年4月1日	大分市教育委員会文化財課に改組
平成13年4月1日	大分市教育委員会教育総務部文化財課に改組

2. 組織

事務局 参事兼課長	秦 政 博 (学校教育部部長)	参事兼館長	木 村 幾多郎
課長補佐	帯 刀 修 一 (課長)	主 査	藤 友 則 (副館長)
主 幹	玉 永 光 洋	指導主事	藤 沢 敏 夫 (主査)
文化財係 係 長	禮 岐 和 夫 (課長補佐兼文化財係長)	主 任	藤 太 武 富 田 弘 通 (平成13年度～)
課長補佐兼管理係長	熊 谷 一 秋 (平成13年度～)	主 任	宮 崎 武 尚 治 (平成13年度～)
主 査	福 田 誠 一	技 師	中 西 連 田 米 一
指導主事	後 藤 典 幸	嘱 託	仲 摩
指導主事	甲 斐 猛		
指導主事	姫 野 公 徳 (管理係)		
主 任	幸 裕 美 (管理係)		
主任技師	塔 鼻 光 司		
主任技師	坪 根 伸 也		
主任技師	池 邊 千太郎		
技 師	高 島 豊		
技 師	河 野 史 郎		
技 師	塩 地 潤 一 (主任)		
事 務 員	永 松 正 大 (主事)		
事 務 員	三 浦 亜 紀 (管理係主事)		
嘱 託	杉 崎 重 臣		
嘱 託	奥 村 義 貴		
嘱 託	荻 幸 二		
嘱 託	田 中 貴		
嘱 託	佐 藤 孝 則		
嘱 託	羽 野 達 郎		
嘱 託	大 野 弘 康		
嘱 託	横 山 步		
嘱 託	早 田 利 宏		
嘱 託	宮 田 剛		
嘱 託	羽 野 裕 之		
嘱 託	上 野 淳 也		
嘱 託	小 住 武 史		
嘱 託	松 尾 聡 (平成13年度～)		
嘱 託	松 竹 智 之 (平成13年度～)		
嘱 託	荻 谷 史 穂 (平成13年度～)		
嘱 託	水 町 裕 子 (平成13年度～)		
嘱 託	梅 田 昭 宏 (平成13年度～)		

※ () 内は平成13年度

大分市教育委員会事務局組織規則（大分市教育委員会規則第5号第8条：抜粋）

文化財課

- (1) 文化財の調査、保存及び整備に関すること。
- (2) 文化財保護思想の普及啓蒙に関すること。
- (3) 文化財保護審議会に関すること。
- (4) 歴史資料館、海部古墳資料館、毛利空桑記念館、池見家住宅その他文化財施設の管理に関すること。

3. 大分市文化財保護審議会

大分市文化財保護審議会委員

	【氏 名】	【勤務先・職名】	【担 当】
委員長	佐 藤 真 一	元荷揚町小学校校長	動 植 物
副委員長	豊 田 寛 三	大分大学・教育福祉学部部長	近 世
	北 野 隆	熊本大学・教授	建 造 物
	橋 昌 信	別府大学・教授	考古・歴史
	橋 本 操 六	大分大学・非常勤講師／前県総務課参事	中 世
	西別府 元 日	広島大学・文学部助教授	古 代
	宗 像 健 一	大分県教委・教育文化係長兼指導主事	美 術
	友 永 尚 子	大分県立芸術会館・主幹学芸員	工 芸
	小 泊 立 矢	大分県立先哲史料館・副館長	民 俗
	吉 田 稔	元王子中学校長	生 物（平成13年度～）

大分市文化財保護審議会条例（平成11年12月15日条例第42号）

（設 置）

第1条 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第106条の第1項の規定に基づき、大分市教育委員会（以下「教育委員会」という。）に大分市文化財保護審議会（以下「審議会」という。）を置く。

（組 織）

第2条 審議会は、委員10人以内をもって組織し、学識経験者のうちから教育委員会が委嘱する。

（任 期）

第3条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は、再任を妨げない。

（会長及び副会長）

第4条 審議会に会長及び副会長1人を置き、委員の互選により選出する。

2 会長は、委員会を代表し、会務を総理する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき、又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。

（会 議）

第5条 審議会の会議（以下「会議」という。）は、会長が招集し、会長がその議長となる。

2 会議は、委員の過半数が出席しなければ、これを開くことができない。

3 会議の議事は、出席委員の過半数でこれを決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

4 会長は、必要があると認められるときは、会議に委員以外の者の出席を求め、説明又は意見を聴くことができる。

（部 会）

第6条 審議会に、教育委員会規則の定めるところにより、部会を置くことができる。

（庶 務）

第7条 審議会の庶務は、教育委員会事務局において処理する。

（委 任）

第8条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、会長で定める。

附 則 抄

（施行期日）

1 この条例は、平成12年4月1日から施行する。

（大分市文化財調査委員会条例の廃止）

2 大分市文化財調査委員会条例（昭和51年大分市条例第4号）は、廃止する。

第Ⅱ章 平成12年度事業概要

1 開発事前審査事業

(1) 平成12(2000)年度の概要

表1は平成12年度における開発申請内容を示したものである。

平成12年度の申請総面積は7,751,310.31㎡、総申請件数110件を数える。

その内訳は、開発計画事前審査申請10件、開発行為事前協議申請56件、開発行為変更事前協議申請2件、宅地造成工事前協議申請22件、都市計画法32条協議申請1件、墓地経営関係5件、土地売買等の届出12件、土地区画整理事業事前協議申請3件、砕石法第33条の6に基づく意見の聴取等4件、鉱業権の出願に関する協議2件、公共施設の設置計画等協議1件である。また、本年度は開発行為事前審査申請、大規模土地取引事前指導申請は申請件数が0件であった。

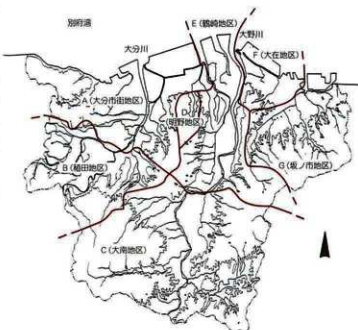
これを平成11年度の申請内容と比較すると、総件数では約12%の増加がみられる。これは各申請ごとに若干の増加と、昨年0件だった砕石法や鉱業権関連の申請が合わせて6件増加したことによるものである。また、審査件数においては、小規模開発(個人開発)が昨年同様若干ではあるが増加傾向にある、といえよう。

次に、数年来減少傾向にあった申請面積は、本年になって激増している。なんと前年比で13倍増ということになる。昨年大型開発があった明野地区は1/6に減少しており、大分地区は、昨年と近似しているが、その他のエリアでは軒並み増加している。特に大分市街地区、植田地区、鶴崎地区は前年の30倍以上の申請となっている。ただしこれは組合施行の区画整理事業や、砕石法や鉱業権関連の申請が行われたためであり、一過性のものと考えられる。

申請エリアに関しては、昨年在明野地区(D)で全体の7割近くを占め、他地区ではほぼ平均化されていたが、本年度は大分市街地区(A)と植田地区(B)に実質的な開発申請である開発事前協議や宅地造成協議が集中しており、大分市全体の約60～70%を占めている。これは、今後の発掘調査件数の増加の要因となると考えられる。

本年の特徴としては、前述のとおり申請面積が激増したことがあげられる。前年比で13倍に増加している。ただし、これは砕石法関連で広大な面積が申請されたためであり、本年度以降増加傾向がこのような伸びをみせるとは考えられない。ただし、その他の開発でも申請面積は増加傾向が認められており、今後の動向に注目したい。

(塔鼻)

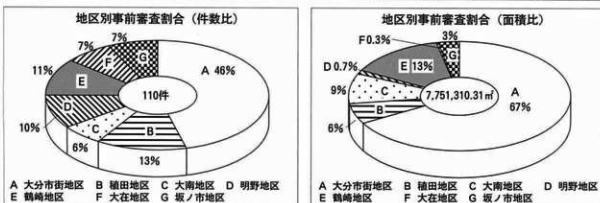


第1図 地域区分図

平成12年度
事業概要

表1 開発事前審査件数一覧

地区名	A-大分市地区	B-植田地区	C-大南地区	D-明野地区	E-鶴崎地区	F-大在地区	G-坂ノ市地区	合 計
【開発計画事前審査申請】								
件数	6	0	3	0	0	1	0	10
面積 (㎡)	251,766.99	0	25,727.40	0	0	5,238.44	0	282,732.83
【開発行為事前審査申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【開発行為事前協議申請】								
件数	27	8	1	4	7	5	4	56
面積 (㎡)	219,310.43	168,213.18	206.75	29,537.30	13,116.14	13,020.73	2,216.20	445,620.73
【開発行為変更事前協議申請】								
件数	1	0	0	0	1	0	0	2
面積 (㎡)	7,312.25	0	0	0	909,304.30	0	0	916,616.55
【大規模土地取引事前指導申請】								
件数	0	0	0	0	0	0	0	0
面積 (㎡)	0	0	0	0	0	0	0	0
【宅地造成工事事前協議申請】								
件数	7	1	0	4	2	0	0	22
面積 (㎡)	13,928.07	998.63	0	6,696.16	2,952.26	0	0	24,575.12
【都市計画法32条協議申請】								
件数	0	1	0	0	0	0	0	1
面積 (㎡)	0	1,406.77	0	0	0	0	0	1,406.77
【土地売買等の届出】								
件数	6	0	0	3	0	2	1	12
面積 (㎡)	37,458.01	0	0	21,590.54	0	10,393.52	3,309.00	72,751.07
【基地経営に関する事前審査】								
件数	1	1	0	0	1	0	2	5
面積 (㎡)	6,504.46	500.04	0	0	2,452.22	0	5,608.66	15,065.38
【土地地区画整理事業事前協議申請】								
件数	1	2	0	0	0	0	0	3
面積 (㎡)	109.07	291,109.07	0	0	0	0	0	291,218.14
【炉石法第33条の6に基づく意見の聴取等】								
件数	0	0	2	0	1	0	1	4
面積 (㎡)	0	0	673,087.26	0	181,127.12	0	191,750	1,045,964.38
【鉱業権の出願に関する協議】								
件数	2	0	0	0	0	0	0	2
面積 (㎡)	4,652,300.00	0	0	0	0	0	0	4,652,300.00
【公共施設の設置計画等協議】								
件数	0	1	0	0	0	0	0	1
面積 (㎡)	0	3,059.34	0	0	0	0	0	3,059.34
【総合計】								
件数	51	14	6	11	12	8	8	110
件数比 (%)	46%	13%	6%	10%	11%	7%	7%	100%
面積 (㎡)	5,188,689.28	465,287.03	699,021.41	57,824.00	1,108,952.04	28,652.69	202,883.86	7,751,310.31
面積比 (%)	67%	6%	9%	0.7%	14%	0.3%	3%	100%



第2図 地区別事前審査割合

2 発掘調査事業

本年度市内で実施された発掘調査件数は130件である。その内訳は試掘確認調査が85件、分布調査11件、立会調査3件、本格調査31件を数える。内訳は表2・3に示している。

このうち試掘確認調査の内容について概観する。

96件の調査件数の中で遺跡の存在が確認されたものは全体の約16%に及び、設計変更等による盛土保存により本格調査に移行しなかったものを除くと、本格調査へ移行したものは総調査件数の約20%である。

以下において本年度（平成12年度）の発掘調査の成果を概観する。

旧石器・縄文

今年度の旧石器の調査は実施されなかったが縄文時代では特に横尾遺跡群において大きな成果を得ることができた。横尾遺跡群第81次調査では、横尾の台地上で初めて検出された縄文早期の集石遺構が確認されたことである。石は、全面被熱を受けており注目される。

横尾遺跡群第82次調査では、縄文時代後期前期に比定されるドングリ貯蔵穴6基と土坑2基が確認された。また、アカホヤ火山灰層ならびに砂層の下位において縄文時代早期にあたる建築部材などを利用した水場の遺構、さらに石器の素材である姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で出土するなど大きな発見となった。今回の調査によって、横尾貝塚周辺での縄文時代の生業関連遺構の存在が明らかとなったといえる。

（池邊）

弥生時代

弥生時代に関しては、下郡遺跡群第125・126A・127・129・131次調査、横尾遺跡群第79次調査において当該期の遺構が検出された。

下郡遺跡群第125次調査では、殆どが方形あるいは隅丸方形プランを呈し、4本の主柱を配置する弥生時代後期の竪穴住居跡が7基検出されている。また、第126次調査では、弥生時代中期から終末期に比定される竪穴住居跡が4基検出されている。さらに、第127次調査では竪穴住居跡と井戸跡が確認され、第129次調査では中期の土坑が確認された。第131次調査では弥生時代中期の貯蔵穴等が検出されている。

横尾遺跡群第79次調査では、近くに多武尾遺跡が所在しているため、関連遺構の発見が期待されたが、弥生時代後期の柱穴が散見される程度であった。

（後藤）

古墳時代

今年度は、4基の古墳が調査され、注目すべき成果が得られた。城南遺跡第3次調査では、平成9年度の確認調査に続いて千人塚古墳の前方部および周溝部が調査された。前方部の墳丘はすでに削平されていたが、前方部の短い前方後円形となる墳形や墳丘規模の確認を行うことができ、大分平野における最終期の前方後円墳としての位置づけが確実となった。また、長迫遺跡では大分平野を見下ろす尾根上に立地する直径約12mの円形を呈する墳丘と周溝の一部が確認された。主体部は盗掘により失われており、出土遺物も僅少であったが、古墳時代前期に遡る可能性が高いと推定される。付近には当該期の大規模な集落遺跡として知られる下郡遺跡群があるが、近隣の尾根上に立地する当該期の墳墓としては初の調査例となった。亀塚古墳の近辺に立地する辻1号墳は墳丘は削平等により失われていたものの大規模な周溝が確認され、形象埴輪を含む豊富な埴輪が出土した。墳丘についても調査所見や空中写真等から大規模な前方後円墳である可能性の高いことが指摘され、亀塚古墳、大在古墳に続く海部の首長墓として位置づけ得ると推定される。さらに、辻2号墳はすでに平成7年度に古墳時代前期の箱式石棺が発掘調査されていたが、今回の調査で石棺を方形に囲う周溝の一部が検出されたことで方形を呈する墳形であったことが確認された。

集落遺跡としては中安遺跡の調査成果が注目される。前年度までに7世紀後半～8世紀後半の宮前遺跡であるこ

表2 大分市平成12年度発掘調査地一覧

調査地点	種別	事業内容	遺跡名	調査地	調査担当	発掘面積 (㎡)	調査期間
00001	公共事業	下郡土地地区画整理事業	下郡道跡群	大分市大字下郡			
			第125次調査	J区q-8・9地点	坪根伸也・永松正大 横山 歩・早田利宏	(560)	000209～000714
	公共事業	小学校建設	第126次調査A	F区f-8～10地点	坪根伸也・萩 幸二 宮田 剛・羽田野裕之	(657)	000421～000810
			第126次調査B		坪根伸也	(129)	000801～000802
			第126次調査C		坪根伸也	(114.5)	000810～000822
			第126次調査D		坪根伸也	(84)	000817～000824
			第126次調査E		坪根伸也	(165)	001127～001129
	公共事業	下郡土地地区画整理事業	第127次調査	I区q-u-13・14地点	永松正大	(840)	001022～010330
			第129次調査	E区k-14地点	坪根伸也・羽田野裕之	(33)	001026～001027
			第130次調査	D区n-o-16・17地点	坪根伸也・羽田野裕之	(212)	001110～001208
			第131次調査	G区n-o-2・3地点	坪根伸也	(442)	001207～010212
			第132次調査	J区q-9地点	永松正大・早田利宏 羽田野裕之・横山 歩	(188)	010122～010330
00002	公共事業	横尾土地地区画整理事業	横尾道跡群	大分市大字横尾			
			第79次調査	D-4・6地点	堀地調査・奥村義貴 田中 貴	1,700	000605～000830
			第80次調査	A-20-1 B-1-1地点	堀地調査・奥村義貴 田中 貴	2,442	000707～001005
			第81次調査	D区2・4地点	堀地調査・奥村義貴 田中 貴	744	000930～001102
			第82次調査	D区-35・40地点	堀地調査・奥村義貴 田中 貴・松尾 聡 小住武史・佐藤孝則	2,140	001010～011030
00003	公共事業	坂ノ市地区土地地区画整理事業	辻古墳群	大分市大字里辻	高畠 登・姫野公徳	2,370	000302～000908
00004	国庫補助事業	国史跡指定に伴う確認調査	大友氏館跡 第6次調査	大分市願徳町	塔鼻光司・上野孝也 小住武史	283	000516～010330
			大友氏館跡 第7次調査	大分市願徳町	塔鼻光司・上野孝也 小住武史	121	000713～010330
			大友氏館跡 第8次調査	大分市願徳町	塔鼻光司・上野孝也 小住武史	60	000829～010330
			大友氏館跡 第9次調査	大分市願徳町	塔鼻光司・上野孝也 小住武史	6.5	010208～010330
00005	住宅建設	個人住宅	上野大友(上郡)跡 第4次調査	大分市大字上野丘西	河野史郎・小住武史 羽田野裕之	20	000417～000425
	公共事業	公共下水道汚水雨水施設工事	上野大友(上郡)跡 第5次調査	大分市大字上野丘西	渡岐和夫・後藤典幸	60.7	001127～001212
00006	民間開発	那覇場建設	中世大友府内町跡 第6次調査	大分市元町	塔鼻光司・坪根伸也	1,600	010119～010430
00007	民間開発	マンション建設	柳川城下町跡 第4次調査	大分市中央町	河野史郎・渡岐和夫 池田千太郎・堀地調査	330	000807～001009
00008	公共事業	街路建設	中安道跡 第3次調査	大分市大字城原	渡岐和夫・田中 貴 奥村義貴・堀野公徳	6,000	000417～000613
	民間開発	確認調査	中安道跡 確認調査	大分市大字城原	王永光洋・羽田野達郎 佐藤孝則	62	010109～010117
00009	公共事業	坂南地区土地地区画整理事業	柳金池道跡 第2次調査	大分市金池	後藤典幸・宮田剛	820	010129～010331
00010	民間開発	宅地造成	長迫道跡	大分市大字牧手民迫	池田千太郎・佐藤孝則	720	000413～000619
00011	民間開発	宅地造成	堀地調査第1次調査 (千人塚古墳)	大分市大字永興	後藤典幸・宮田剛	1,700	000808～001110
00012	民間開発	確認調査	羽根・堀地跡 確認調査	大分市大字羽根	王永光洋・羽田野達郎 佐藤孝則	95.25	001212～001214

表3 大分市平成12年度試掘調査地一覧

番号	種別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
1	確認(民間)	大分市大字玉沢垣添707-1・705-1	44	1,200	2000.04.06	病院建設
2	確認(民間)	大分市大手町2丁目220-1・280-2	22.5	479.9	2000.04.17	共同住宅建設
3	確認(民間)	大分市六坊北町3021-6・3008-6・10	15	479.26	2000.04.20	共同住宅建設
4	確認(民間)	大分市大字羽田字久保1042-1	33	1,099	2000.04.25	共同住宅建設
5	試掘(民間)	大分市錦町2丁目3208-8	13.75	131.48	2000.04.27	個人住宅建設
6	試掘(民間)	大分市中央町3丁目94番	21	591.93	2000.05.02	共同住宅建設
7	確認(民間)	大分市元町4760-3	10	150	2000.05.03	会社改築
8	確認(民間)	大分市錦町3丁目4-42	16	242.96	2000.05.12	個人住宅建設
9	確認(民間)	大分市大字横尾字雲元3748・3749-1、2	166	2,477	2000.05.22	共同住宅建設
10	確認(民間)	大分市大字玉沢字小野田66-6	40	400	2000.05.24	店舗建設
11	確認(民間)	大分市大字木上峠字1-1 他235筆	T49本	110'000	2000.05.08~05.30	区画整理事業
12	確認(民間)	大分市大字玉沢字垣添701-1	65	873	2000.06.01	病院建設
13	確認(民間)	大分市大字玉沢字垣添703-1	87	1,320	2000.06.01	病院建設
14	確認(民間)	大分市大字玉沢字垣添704-1	104	1,815	2000.06.01	病院建設
15	確認(民間)	大分市六坊北町4500-6	14	110	2000.06.02	共同住宅建設
16	確認(民間)	大分市大字玉沢字垣添708-1	196	1,827	2000.06.05	病院建設
17	試掘(民間)	大分市大字猪野21-10	107	2,100	2000.06.07	店舗建設
18	確認(民間)	大分市錦町2丁目3354-1	8.1	251	2000.06.09	住宅兼事務所
19	確認(民間)	大分市大字古国府字山畑94-4・95-2	19	381.5	2000.06.13	住宅兼事務所
20	確認(民間)	大分市府内町1丁目40-1	26	509	2000.06.15	診療所改築
21	確認(民間)	大分市上野丘2丁目12-3	91.8	535	2000.06.22	個人住宅建設
22	確認(民間)	大分市中鶴崎1丁目146・146-2	20	325	2000.06.26	住宅兼郵便局
23	確認(民間)	大分市都町2丁目57	14	178	2000.07.03	倉庫建設
24	確認(公共)	大分市大字下郡字藤ノ内2099-1	11	395	2000.07.11	住宅兼事務所
25	確認(民間)	大分市府内町36-1	20	870	2000.07.12~07.13	共同住宅建設
26	確認(民間)	大分市大字片島字大門32、35	120	2,062	2000.07.14	共同住宅建設
27	確認(民間)	大分市南春日町829 他3筆	32	755	2000.07.18	共同住宅建設
28	確認(民間)	大分市片島字田中962-1	23	364	2000.07.26	共同住宅建設
29	確認(民間)	大分市大字古国府字熊田413-1 一部	46	991	2000.07.28	診療所建設
30	確認(民間)	大分市大字下奈方外屋敷952-1	16	285	2000.08.03	個人住宅建設
31	確認(民間)	大分市大字永興字開台881-1 882-1の一部	90	2,045	2000.08.04	共同住宅建設
32	確認(公共)	大分市大字大分字堀ノ口3996-1	65	118.8	2000.08.08~08.09	ポンプ場建設
33	確認(公共)	大分市大字下郡A-6-ル	10	300	2000.08.25	共同住宅建設
34	確認(民間)	大分市大字奥田字横着739-4	15	960	2000.09.01	共同住宅建設
35	確認(民間)	大分市長浜町1丁目1413・1439-11	44	357	2000.09.07	共同住宅建設
36	確認(公共)	大分市大字下郡A-32	12	1,067	2000.09.18	整地工事
37	確認(公共)	大分市大字下郡C-16-ル	12.6	391	2000.09.18	整地工事

番号	種別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
38	確認(公共)	大分市大字下郡A-30	5	416	2000.09.18	整地工事
39	確認(民間)	大分市大字猪野字木ノ下336	138	1,781	2000.09.27	共同住宅建設
40	確認(公共)	大分市大字下郡字六田813他1	37.36	1,129.5	2000.10.06	整地工事
41	確認(公共)	大分市大字下郡字下屋敷2325-3	24.8	623	2000.10.13	整地工事
42	確認(公共)	大分市大字下郡字城ノ内2747-1	21.4	448	2000.10.13	整地工事
43	確認(民間)	大分市南春日町12-5	55	680.91	2000.10.25	店舗増設
44	確認(民間)	大分市大字葛木字南谷118番外	60	800	2000.11.06	住宅造成工事
45	確認(公共)	大分市大字下郡字庵ノ浦2800-1	86	3,000	2000.11.10	整地工事
46	確認(民間)	大分市顕徳2丁目3042-1	7	300	2000.11.13	共同住宅建設
47	確認(公共)	大分市大字下郡勇シキ807-2 外13	342	4,914	2000.11.15~11.17	整地工事
48	確認(公共)	大分市大字下郡字辻2872-2 外12	25	1,604	2000.11.21	整地工事
49	確認(民間)	大分市大道2丁目2226-3 2222-2	15	264	2000.11.22	共同住宅建設
50	確認(公共)	大分市大字下郡字上サ2118-3	223.26	4,924	2000.12.04~12.06	整地工事
51	確認(民間)	大分市上野丘東188-1、188-2	7	230.43	2000.12.08	共同住宅建設
52	確認(公共)	大分市大字下郡字小中ツル1954-1 外3	42	1,450	2000.12.11~12.12	整地工事
53	確認(公共)	大分市大字下郡字小中ツル1172-1	13.5	730	2000.12.11~12.12	整地工事
54	確認(公共)	大分市大字下郡字下屋敷2327-2 外12	29	547	2000.12.15	整地工事
55	確認(民間)	大分市上野丘西593-2・411-2	37.5	239	2000.12.18	個人住宅建設
56	確認(公共)	大分市大字下郡字寺小路2589-4 外2	35	906	2000.12.19	整地工事
57	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-3	30	314	2000.12.20	整備事業
58	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-15	8	92	2000.12.20	整備事業
59	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-28	8	88	2000.12.20	整備事業
60	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-33	10	122	2000.12.21	整備事業
61	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-20	6	91	2000.12.21	整備事業
62	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-6	22	256	2000.12.21	整備事業
63	試験(公共)	大分市桜ヶ丘1108-22	5.1	126	2000.12.21	整備事業
64	試験(公共)	大分市東大道1丁目2471-7	30	187	2000.12.26	整備事業
65	試験(公共)	大分市東大道1丁目2471-8	25	247	2000.12.26	整備事業
66	試験(公共)	大分市東大道1丁目2480-13	12	130	2000.12.26	整備事業
67	試験(公共)	大分市東大道1丁目2413-119	25	247	2000.12.27	整備事業
68	試験(公共)	大分市東大道1丁目2413-113	20	285	2000.12.27	整備事業
69	試験(公共)	大分市東大道1丁目2445-11	21	253	2000.12.27	整備事業
70	試験(公共)	大分市東大道1丁目2413-114	6	287	2000.12.27	整備事業
71	確認(民間)	大分市大字城原字大原1917	62	102	2001.01.09~01.17	個人住宅建設
72	確認(民間)	大分市古国府字宮の前587-3・4、 588-4	17.5	643	2001.01.23	共同住宅建設
73	確認(民間)	大分市大道町2丁目2234-1・7・9 2232-8	25	1,165	2001.01.29	共同住宅建設
74	確認(民間)	大分市都町3丁目154・138	90	1,259	2001.01.31	共同住宅建設
75	確認(民間)	大分市大字荏限字庄ノ原1637-6	200	3,280	2001.02.08	老人ホーム

番号	種 別	住 所	調査面積 (㎡)	調査対象 面積 (㎡)	調査期間	開発原因
76	確認(民間)	大分市牧1丁目309・310・311	30	1,446	2001.02.13	共同住宅建設
77	確認(民間)	大分市大字城原字大原1942	200	826	2001.02.19～02.23	共同住宅建設
78	確認(民間)	大分市大字下郡2396-4・2394-3	16	788	2001.02.28	共同住宅建設
79	確認(民間)	大分市大字下郡方字君瀬760-1	97	750	2001.03.02	作業場建設
80	確認(公共)	大分市大字下郡字成坊2666-3 外1	20	354	2001.03.07	整地工事
81	確認(民間)	大分市大字森字鴨園1266-1	12	693.26	2001.03.13	共同住宅建設
82	確認(民間)	大分市大字羽屋1066-1	60	2,114	2001.03.14～03.15	共同住宅建設
83	試掘(公共)	大分市東大道1丁目2509	80	2,702.71	2001.03.17	整備事業
84	試掘(民間)	大分市大字羽屋機伐118-1	60	824	2001.03.23	共同住宅建設
計			4,051.17	183,094.64		

とが確認された遺跡であるが、さらにこれに先行する時期の竪穴住居跡が約30基検出され、その多くが6世紀前半から7世紀にかけての古墳時代後期のものであることが確認された。これらの住居跡は7世紀前半までに姿を消しており、その後建設される官衙遺跡との関係が注意される。遺跡が立地する台地は亀塚古墳や辻古墳群が立地する尾根に続いており、古墳時代における海部の政治的中心地の一つであったと推定されている。今後、古墳時代から古代にかけての地域史が、墳墓や集落のみに限定することなく総合的に解明されることが期待される。

(高島)

古代

当該期の遺構は、下郡遺跡群第125・126A・126D・127次調査、横尾遺跡群第79・80次調査、南金池遺跡第2次調査、中世大友府内町跡第6次調査、上野大友館(上原館)跡の、5遺跡9調査地において確認されている。

下郡遺跡群第125次調査では、最下部に井形に組んだ木枠が遺存していた9世紀前半の所産と推定される井戸跡が検出された。長頸甕や完形の土師器杯、木製櫛などが出土している。第126次調査A地点では、多数の土坑の他、9世紀中頃前後と推定される井戸跡1基、また、溝敷条が検出されている。第126次D調査地点でも柱穴・井戸跡が確認されている。

横尾遺跡群第79次調査では、9世紀後半の遺構が展開し、道路状遺構と木棺墓が確認されている。道路状遺構は著しく切り合った柱穴がほぼ平行して2列に構築されたもので、L字状に折れ曲がる。密集する柱穴列の幅は約3mを測り、その空間には当該期の遺構は存在していない。木棺墓については、道路状遺構の廃絶段階に造営されたと考えられる墳墓で、土師器杯2点と刀子1点を供献していた。第80次調査では、平安時代前期の粘土採掘坑3基が検出されている。

南金池遺跡第2次調査では、8世紀末から9世紀前半の所産と推定される多数の土坑や井戸跡1基が検出された。また、製塩土器が多量に出土している。

中世大友府内町跡第6次調査では、井戸跡1基、土壇1基を検出している。ともに8世紀末に比定されるものである。これまでの中世大友府内町跡の調査において、この時期の遺物の出土は知られていたが、遺構は確認されておらず、今回の発見が初例となった。

上野大友館(上原館)跡では、検出された土壇遺構直下のほぼ同じ位置で、東西方向の9世紀後半から10世紀に比定される溝状遺構を確認した。土師器杯・高台付杯・須恵器の大形甕片・緑釉陶器片等が出土している。また、その他の遺構として、狭い調査区の中央付近から南側の方に柱穴群の広がりが認められ、建物跡等が推定される。館の築造以前の上野丘陵上の古代の遺構の広がりを窺い知ることができる資料となった。(後藤)

中世

中世は、大友氏に関連した遺跡の調査が相次いで行われた。大友氏館跡の確認調査を筆頭に、上野大友館（上原館）跡第4・5次調査、万寿寺跡南側と推定される中世大友府内町跡第6次調査、府内から離れた場所での下郡遺跡群や横尾遺跡群の調査である。

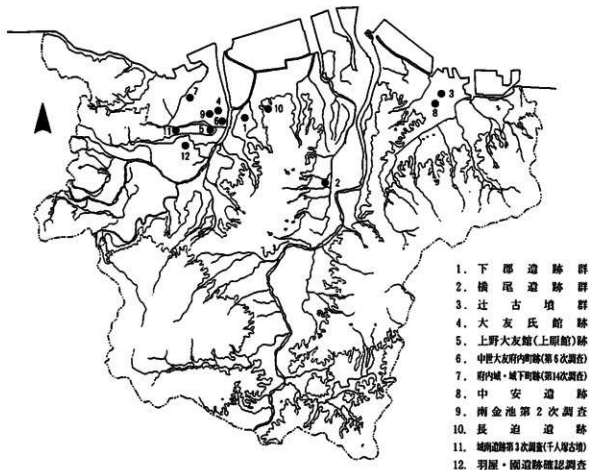
大友氏館跡は、前年度に引き続き、第6～9次調査まで行われた。この中で第6次調査区では、周辺よりも立地が一段高くなっており、中核施設の存在が目されたところである。調査によって露れた土坑が東西軸と南北軸に並んで確認された。遺構には、16世紀中頃に比定される京都系土師器皿が含まれており、大型建物関連遺構として今後の調査が期待される場所である。第7次調査区では、調査地点内からは、東西方向に平行して延びる6条の溝遺構が検出された。館北限の推定線と重なり館の外郭線に相当するものとして注目される。また、上野大友館（上原館）跡の調査では、土塁の基底部が確認でき、複数の積み土単位の存在を記録することができた。

中世大友府内町跡第6次調査では、14世紀代の中世大友府内町跡の状況の一端が判明し、万寿寺の創建時期に近接する東西溝が確認され寺域変遷の一過程を垣間見ることができた。

下郡遺跡群第125次調査及び第132次調査では、13世紀段階から16世紀末まで存在した方形に区画された居宅等に伴う巨大な溝が確認された。また、横尾遺跡群第81次調査では、戦国期に比定される独立建物跡3棟と溝状遺構8条が確認された。南北溝は第79次調査と一連の遺構で、現状で南北50m以上、東西60m以上の規模に区画された半町規模の館の存在が想定される。

このように今年度は戦国時代の館・屋敷等多くの発見・調査が続いたといえる。

（池邨）



第3図 調査遺跡位置図

近世

府内城・城下町跡では城下町西端付近の竹町および笠和町に比定される地域において第14次調査が行われた。調査では、近世の複数の文化面からきわめて多数の遺構が検出されたが、寛保の大火（1743）等に伴う火災処理土坑も多く検出されており注目される。また、府内城建設以前の16世紀後半代の遺構やこれまで検出例の少ない17世紀前半期の遺構も検出されており、府内城・城下町の建設過程を知る上で貴重な成果が得られている。

（高畠）

3 教育普及活動

（1）大分市文化財だより 2000年号の発行

平成3年度から発行を続けている文化財だよりの2000年号（第9号）の作成、配布を行った。

今回の特集は、市内の主な遺跡の場所と概要を掲載し、市民に向けて広く情報の発信を図った。

内 容 ・歴史時代のおおいた（主な遺跡の紹介）

- ・遺跡の取り扱いについて
- ・大分市内の神楽の紹介

配布先 市内全戸



第4図 文化財だより表紙

（2）現地説明会

今年度は、現地説明会を計4回開催し、延べ560人の参加者を得た。

名 称	月 日	参加人数
中世大友府内町跡第6次調査	5/14	150人
辻古墳群	9/9	130人（海部のまつり）
大友館跡第6・7次調査	10/15	150人（県教委と共催）
城南遺跡群（千人塚古墳）第3次調査	10/29	130人

（3）研修参加

奈良国立文化財研究所による報告書作成過程研修に職員1名を派遣した。

平成13年1月10日～1月19日

（4）新指定文化財

明治14年から大分市の竹中地区で伝承されてきた伊与床神楽は、秘伝書など由来を物語る資料が残っていること、地域の伝統芸能を守り伝承しようとする活動の実績等により、市指定無形民俗文化財として指定された。

指 定 無形民俗文化財

名 称 深山流 伊与床五柱神社神楽社

住 所 大分市端登

指 定 平成12年6月12日



第5図 深山流伊与床五柱神社神楽社

平成12年度
事業概要

4 海部古墳資料館

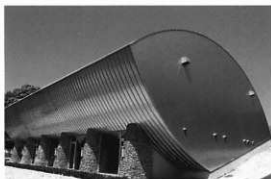
平成8年より進めてきた国指定史跡亀塚古墳の整備が終わり、史跡公園として4月28日にオープンした。同時に、亀塚古墳や海部の古墳を中心に広く古墳文化を紹介する海部古墳資料館も開館した。

(1) 開館までの歩み

- 平成5年 亀塚古墳の発掘調査がはじまる
- 平成6年 前年に引き続き発掘調査が行われる
- 平成8年 亀塚古墳が国史跡に指定され、保存整備がはじまる
- 平成10年 資料館の建築工事がはじまる
- 平成11年 周辺地形模型の製作が行われる
- 平成12年 亀塚古墳公園および海部古墳資料館がオープンする

記念講演 岡本東三氏（千葉大学教授）

「何処へ行く、亀塚古墳の墳輪船 海上他界観をめぐる」



第6図 海部古墳資料館



第7図 亀塚古墳公園・海部古墳資料館
オープン記念講演

(2) 常設展示の構成と主な展示物

・プロローグ

CGによるイメージ映像

（宙をかける舟が日本や世界の大墳丘墓を案内）

・古墳づくりと海部のムラ

地形縮小模型

・古墳時代と世界の動き

大分市の古墳分布（地形模型）

大分市の古墳の墳丘模型

・亀塚古墳の世界

亀塚古墳出土遺物 海部地域の古墳出土遺物

王ノ瀬石棺

・黄泉の国へのいざない

横穴式石室の模型 横穴墓の模型と出土遺物

古宮古墳の石室模型と周辺地形模型

・古墳のムラとまつり

下郡遺跡群出土遺物

・映像・情報検索コーナー

大分市の文化財の紹介 文化財クイズ



第8図 海部古墳資料館常設展示室

(3) 特別展

展示会名 「埴輪の美—北部九州の埴輪展」

会 期 平成12年9月9日(土)～平成12年10月9日(月)

趣 旨 古墳からの出土品の中で、様々な形を持ち、文字のない古墳時代において人々の生活をうかがい知ることのできる埴輪を集め、古墳を飾った埴輪の素朴な美しさを紹介する。

展 示 品 埴輪16点

大形平底甕(日田市天満2号墳)
家形埴輪(那珂川町カクチガ浦古墳)
横瓶形埴輪(那珂川町貝徳寺古墳)
蓋形埴輪(那珂川町貝徳寺古墳)
首飾りをつけ、みずらに結った人物
(八女市立山山8号墳)
馬形埴輪(八女市立山山8号墳)
鞍に乗る貴人(八女市立山山13号墳)
壺を持つ婦人(八女市立山山13号墳)
巫女(鳥栖市岡寺古墳)
武人(鳥栖市岡寺古墳)
馬形埴輪(鳥栖市岡寺古墳)
猪形埴輪(鳥栖市岡寺古墳)
円筒埴輪(鳥栖市岡寺古墳)
朝顔形埴輪(鳥栖市岡寺古墳)
巫女(穂波町小正西古墳)

観覧者数 3,110名



第9図 特別展「埴輪の美—北部九州の埴輪展」

平成12年度
事業概要

(4) 赤米栽培の体験学習

資料館近くの水田を借り上げ、親子による古代米栽培の体験学習活動を、田植え・稲刈り・脱穀の計3回行った。

目 的 古代の米である赤米を手作業で栽培し、古代の生活を体験する。

参加者 10家族 24名

場 所 資料館近くの休耕田約300㎡



第10図 センバによる脱穀

(5) 入館者数

団 体 287団体 11,703名

個 人 24,197名

合 計 35,900名

I 下郡遺跡群第125次調査 J区q-8・9地点

調査面積	550㎡	調査期間	2000.02.09～00.07.14
地域	A	調査担当	坪根伸也・永松正大・横山 歩・早田利宏

今次の調査は公園内の防火水槽設置とこれに隣接する道路建設に伴うものである。調査区は霜凝神社の南西側に位置し、旧字名は城ノ内と称する。調査の結果、二つの文化面を確認した。上位の文化面を第1文化面、下位の文化面を第2文化面と仮称し、主要遺構について若干の説明を加える。

第1文化面

上位に位置する第1文化面は、淡灰褐色土層上面から掘り込まれる遺構群により構成される。この淡灰褐色土層は0.3～0.4mの層厚を有し、硬質である。層状況から人為的な整地層(125SX050)と判断した。

第1文化面には、数基の土坑が認められる他、L字状に屈曲すると推定される溝状遺構(125SD016)を確認することができる。基本的に遺構密度は粗である。また、125SX050は、125SD016の外側、つまり、調査区の西端には分布せず、両者の深い関連性を示唆している。



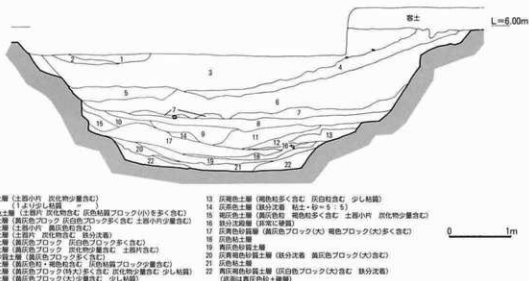
第11図 調査地点位置図

125SX050

客土層下の近代の水田耕作土層を除去した段階で検出される硬質の遺物包含層である。淡灰褐色を呈し、中世の陶磁器、瓦器、土師器等の遺物、および焼土粒、炭化物を多量に内包する緻密な砂質土によって構成される。本土層は、整地の際に後述する125SE020を被覆していることが、土層観察の結果から明らかにされており、このような状況を考慮すると、その所産時期は13世紀初頭頃に求められよう。

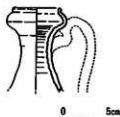
125SD016

125SD016は南北約29m、東西約20mの範囲において確認された調査区南端で東に折れ曲がる溝状遺構である。



第12図 125SD016土層断面実測図 (1/60)

幅約7.3m、深さ約2.2mを測り、断面形態は逆台形を呈している。堆積土層の第8層以下で砂層と粘土層の交互堆積が認められ、複数回の流水・滞水状況を示している。また、上部層にあたる第1層から第8層までは、L字状の区画空間内部から流れ込むような堆積状況を示し、黄灰色ブロック土を多く内包する土層が存在することから、空間内部に土塁状の施設が存在していた可能性も考慮される。



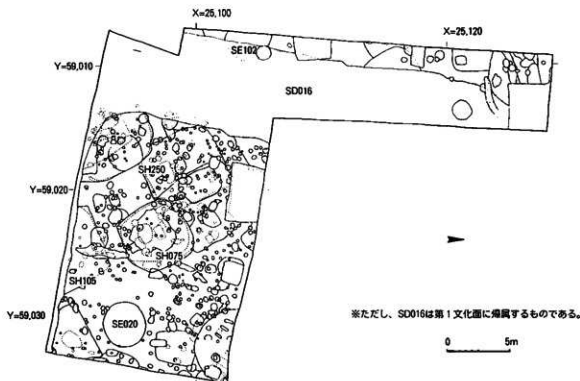
出土遺物には土器片、青磁片、白磁片などが出土しているが、第3層中から胎土目を有する唐津皿片、第8層以下より小野正敏分類の青花E群碗片が出土する他、最下 第13層 125SD016遺物実測図(1/4)層中から華南三彩水注片(第13図)なども出土している。これらの出土遺物の様相から、16世紀末には最終的に機能を停止したものと推定される。

125SX026

125SD016の確認ラインから約1m東に位置する土坑である。南北約0.65m、東西約0.5m、現存深度約0.6mを測り、平面プランは梯円形を呈している。埋土は暗褐色土の単一土層である。出土遺物には常滑産甕片、東播系須恵器甕口縁部、土器片などがある。出土した常滑産甕片は13世紀中葉前後に編年されるものである。

以上の三つの遺構が第1文化面における主要な遺構であるが、各遺構間には毎層年代にヒアタスが存在する。現状で確認できる125SD016の規模が最終段階のものであるとすると、この溝により区画された閉鎖空間が、13世紀段階から存在し、周囲の区画施設が16世紀末において最も規模の大きな形状に掘り直されたと推定される。それが125SD016の機能停止に伴い廃絶したものと考えられよう。これらの区画施設は方形に区画された居宅等に伴う可能性が考えられる。

下部遺構は
第125次調査
区画図-3.9



第14図 遺構平面図(第2文化面)(1/300)

第2文化面

第2文化面は、125SX050直下において確認される。検出遺構には中世段階の土坑、井戸跡、弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される堅穴住居跡などがある。また、調査区西壁際において古代の井戸跡を検出している。当該部分は、125SX050が存在しないため、水田耕作土直下において確認されるが、時期的に第2文化面に帰属するものである。

125SE020

調査区の東側部分で検出された井戸跡である。検出面での直径約3.5m、現存深度約2.8mを測る。水溜部に曲物を埋置する構造を有する。水溜部に設置された曲物は、径約60cm、高さ20cmのものを三段重ねたものであり、丁寧に閉じ合わせている。底板は存在しない。曲物上端部周囲に粘土を貼り、その上に拳大の礫を敷き詰めている。

土層の断面観察の結果から、次のような井戸構造の変遷が想定される。第1段階は、素掘りの井戸であり、井戸埋土中位に認められるエグリは当時の水位線を示している。この段階の水溜構造は明確でないが、第2段階に掘えられる曲物を使用した水溜部の下端と最深底面までの間にレベル差が存在し、この部分が第1段階の水溜部であった可能性が高い。水溜部は上部と同様に素掘りであったと推定される。第2段階は、水溜部に曲物を埋置する段階である。上部には井筒が設置され、周囲には裏込め土が充填される。最終的には、井筒の上部は抜かれ、埋め戻されるため、井筒の上部構造は不明であるが、水溜部と同様の曲物が重ねられていた可能性もある。さらに、井戸の機能停止時には、数回の掘り返しの実施を経て、埋め戻される。また、堆積埋土の最上層は、125SX050と同一の堆積土が充填されており、本遺構の最終埋戻しが125SX050の施行時であることを示している。つまり、第2文化面の中での最新の遺構である可能性が高いといえる。

出土遺物には、土師質土器の他、和泉型瓦器碗、輸入陶磁器などがあり、これらの遺物様相から、12世紀中頃～後半前後の所産時期が想定され、125SX050が施行される13世紀には完全に廃絶したものと推定される。

125SE102

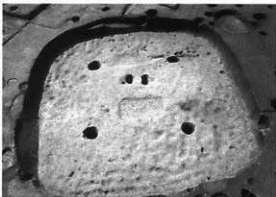
125SE102は125SD016の西側に位置し、125SD016に切られている。平面プランは、円形であったと推定される。推定される遺構直径は約3.5m、深さは約2.4m、最下部に井形に組込んだ木枠が遺存していた。井戸枠は井戸底に直接置かれており、縦約0.3m、横約1.8m、厚さ約0.05mの板材4枚を井形に組み合わせるものである。井戸枠内部には腐食した木片が認められるため、当初井戸枠は2段以上重ねて使用されていたと推定されるが、断面土層の観察から井戸廃絶時に井戸枠の抜き取りが行われたと推定される。井戸底には頸部が折れた長頸甕が中心よりやや東にずれた位置に据



第16図 125SE020水溜部検出状況



第17図 125SE102井戸枠検出状況



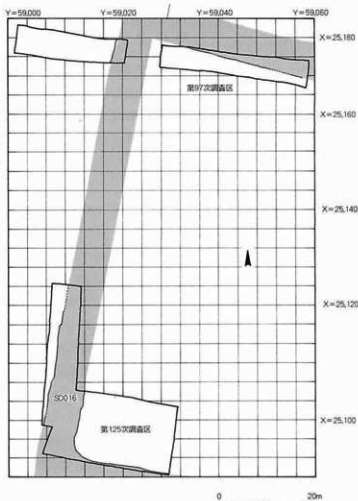
第18図 125SH075完掘状況



第19図 125SD016検出状況（南方向から）

えられた状態で出土した。この長頸壺は出土状況から井戸が造られた際に埋置された可能性も考えられる。さらには、完形の土師器環、木製櫛などが出土している。これらの遺物から125SE102は9世紀前半の所産と推定される。

竪穴住居跡に関しては7+α基を確認している。いずれも弥生時代後期から古墳時代初頭に比定されるものである。125SH050、125SH250のように埋土内に遺物を内包するものも少なからず存在する。検出した住居跡の殆どが方形あるいは隅丸方形プランを呈するものであり、4本の主柱を配置する。住居構造の上で特徴的なのは、住居床面の中央やや南よりに配置されるふたつの柱穴である。両者は、地床炉の南側に位置し、長軸方向を揃えて約40cmの間隔をもって並置される。125SH075、125SH250に顕著な例として確認されているが、いずれも貼床除去後あるいはその途中での確認であるため、これらが確実に貼床上面から構築されていたのかどうかは判断できていない。



第20図 下郡遺跡群第97・125次調査区位置図

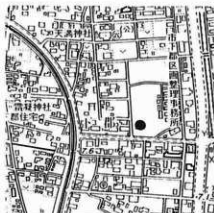
さて、調査区で注目される点のひとつに125SD016がある。125SD016は本調査区でL字状に屈曲し、南北から東方向へ展開することが判明した。最終廃絶時期はおおよそ16世紀末に比定される。第20図は平成9年度に調査を実施した下郡遺跡群第97次調査と第125次調査の位置関係を示したものである。第97次調査区では、125SD016と類似した東西方向の溝状遺構が確認されている。南北方向の様相は、大部分が現道と重なるため、詳細は不明であるが、道路下には、溝状の掘り込みの存在が確認されており、東西溝に接続して、南方向へ屈曲する可能性が高い。これらの点と両調査区との位置関係から、125SD016と接続すると考えられ、そこには幅約7mの溝に囲まれた方形に区画された空間が確認される。その推定規模は、溝内法で約90m、溝外法で104mを測る巨大なものである。文中でも触れたように、防御性を強く感じさせるこの空間は居館関連の空間である可能性が高いといえよう。区画空間内部の遺構状況の把握が今後の大きな課題と言える。

(坪根)

Ⅱ 下郡遺跡群第126次調査 F区 8～10地点

調査面積	1,150㎡	調査期間	2000.04.21～00.11.29
地域	A	調査担当	坪根伸也・荻 幸二・宮田 剛・羽田野裕之

今次の調査は、大分市立下郡小学校建設に伴う事前調査の一環として実施したものである。校舎部分の調査については、すでに下郡遺跡群第115次調査として平成11年度に実施した。グラウンドその他に関しては、盛土により遺構保存が図られることになり、そのため盛土擁壁の設置の必要が生じた。今次の調査は、この擁壁設置部分を中心に、盛土保存が困難な駐車場部分等を対象とした。そのため、工事スケジュールとの調整の結果、下記日程と面積により調査を実施することになった。



第21図 調査地点位置図

A地点	657㎡	00.04.21～00.08.10
B地点	129㎡	00.08.01～00.08.02
C地点	114.5㎡	00.08.10～00.08.22
D地点	84㎡	00.08.17～00.08.24
E地点	165㎡	00.11.27～00.11.29

以下には、各調査地点の概要について記述する。

A地点

調査対象地域の南西部分に位置する調査区である。当該地は、駐車場の建設が予定された地点に相当し、そのため、今次の調査の中で最大規模の調査面積となっている。

調査の結果、表土下の標高約5mの地点において遺構を確認することができた。検出遺構には堅穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝状遺構、柱穴などがあり、遺構の帰属年代としては、弥生時代、古墳時代、古代のものがある。



第22図 126ASE057完掘状況

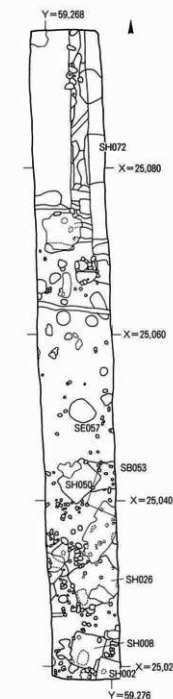
弥生時代のものには、堅穴住居跡4基、土坑4基がある。

126ASH002、126ASH008は弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定される堅穴住居跡である。前者は、コーナー部分のみの検出であり、調査時にはその規模を明らかにすることはできなかった。床面には長方形プランを呈する土坑を有する。126ASH008は一辺が約4mを測る方形プランの堅穴住居跡である。住居の覆土中にかなり広範な分布を示す炭化物、炭化材が認められた。住居床面中央には、土坑が配置され、住居北西部と東部の中央部分には二つのベット状遺構が配置される。前者のベット状遺構は、地山を削り出して造られるが、後者は緑灰褐色の砂質土により形成されている。4基の主柱穴を有している。

126ASH026は一辺が約5mを測る方形の堅穴住居跡である。住居埋没途中の覆土内に土器資料を多量に内包する。中央部に炉と推定される掘り込みが存在し、中央部には貼床の痕跡が部分的に遺存する。

126ASH050は4.5m×3.5mの長方形プランを呈する堅穴遺構である。中央に柱穴が配され、堅穴の内側四隅に

下郡遺跡群
第126次調査



第23図 A地点遺構配置図(1/400)

調査対象地区の東側に旧河道が存在するという自然地形に成因するものであり、調査区東側に認められた人為的な堆積土もこの地形環境の改変を意図したものと考えられる。遺構はこの人為的な堆積土の上下面で確認することができ、明らかに複数の文化面の存在を示唆している。

規模の小さな柱穴が構築される。堅穴内からは、弥生時代中期に比定される資料が出土し、この堅穴の所産時期もこれらの土器資料により示される年代、すなわち弥生時代中期として大過ないであろう。

126ASH072は調査区北側に位置する堅穴住居跡である。調査対象範囲の關係から、一部分の掘り下げを実施したのみであり、詳細は不明であるが、検出部分から推定される規模は、一辺約6m程度の方形プランを呈する堅穴住居跡と考えられる。上部埋土から比較的土器がまとまって出土しており、これらの土器から弥生時代後期後葉前後の所産と推定される。

古墳時代の遺構には、掘立柱建物跡がある。

126ASB053は、2間×1間と推定される掘立柱建物跡である。柱穴には竿大の礫が数個充填されている。

古代の遺構には、多数の土坑の他、井戸跡1基、溝数条がある。

126ASE057は、調査区のはほぼ中央に位置する井戸跡である。検出面での平面プランは、略五角形を呈しており、井戸構築時の足場と推定されるテラスが数段形成され、二段目のテラスよりも下位は一辺約2mの方形プランを呈する。検出面から約1m下位には、水溜部上部の木枠が遺存し、その外側には裏込め土が充填されている。検出面から井戸底までの深さは約2.3mを測る。

水溜部北東角の木枠外側の裏込め土中から土器器坏の完存品が出土した他、水溜部が若干埋められた後に埋置されたと推定される土器器坏2点と黒色土器A類焼1点が出土している。これらの遺物から本井戸の帰属年代は、9世紀中頃前後と推定される。

B地点

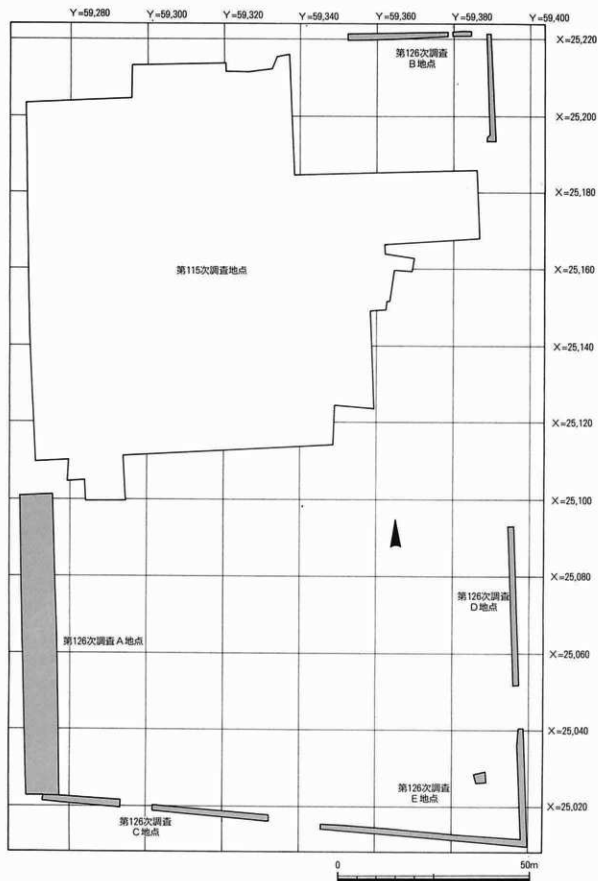
小学校建設予定地の北東角にあたる部分である。

調査の結果、表土を除去すると黄茶褐色を呈する基盤土層が表土下において、あるいは人為的な堆積土（整地土か）を挟んで検出され、この土層上面において少量のビット、溝状遺構などを検出することができる。

最も北側に位置する第1調査区では、ほぼ中央を南北に展開する126SX004を境として東西に段差が存在する。現在は客土により平均化が図られているが、明らかに東側は西側よりも低い。これは調査対象地区の東側に旧河道が存在するという自然地形に成因するものであり、調査区東側に認められた人為的な堆積土もこの地形環境の改変を意図したものと考えられる。遺構はこの人為的な堆積土の上下面で確認することができ、明らかに複数の文化面の存在を示唆している。



第24図 C地点西側調査区全景(東方方向)



第25図 下部遺跡群第115・126次調査地点位置図

C地点

小学校建設予定地の南辺西側に位置する調査区である。

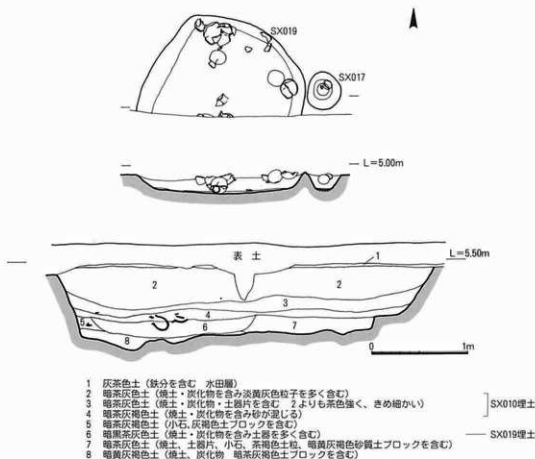
調査の結果、調査対象区のほぼ全域において遺構を確認し、溝状遺構、竪穴遺構、柱穴等を検出した。126CSX010は西側に設定した調査区のほぼ中央で検出した竪穴遺構である。遺構全容の把握は困難であるが、遺存部から推定される形状は略方形になるものと推定される。約20cmの厚さの貼床により床面を形成し、床面には126CSX017、126CSX018、126CSX019が構築される。なかでも126CSX019内には完形復元の可能な土師器資料が遺棄されている。これらの



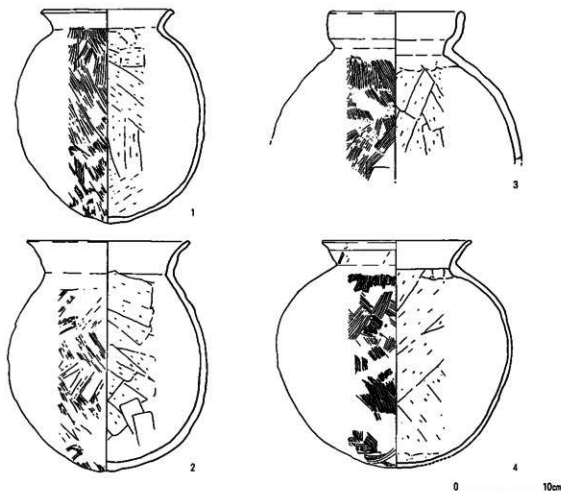
第26図 126CSX019遺物出土状況

資料は、床面近くから出土するものの、周辺部の資料については、若干床面から浮いており、いわゆる凸レンズ状の堆積を示すことから、126CSX019機能時のものではなく、126CSX019あるいは、126CSX010の廃絶直後に一括廃棄されたものと判断される資料群である。出土資料は、古墳時代前期の特徴を示し、当該遺構の帰属年代もほぼこれらの土器資料に示される時期のものであると判断される。

第28図には、126CSX019出土土器の一部を掲載しているが、出土土器には、土師器甕、壺の他、直口壺、ミニチュア土器、高坏などがある。いずれの土器も弥生時代の在地色をほぼ払拭し、器内面のヘラケズリによる成形や、球形化した胴部形状などに新来系の布留式土器の影響を示している。また、126CSX019を付帯施設として持つ126CSX010の埋土内からも、高坏や土師器甕などの破片資料が出土しているが、形態的には126CSX019出土資料と大きな差異はなく、126CSX010の埋没に際しても大きな時間経過を伴っていない点を示唆している。



第27図 遺構（126CSX019）平面・断面、南壁土層断面実測図（1/40）



第28図 126CSX019出土遺物実測図 (1/4)

D地区

調査対象地域の東南部に位置する調査区である。

安定地盤は存在するが、追構の密度は高くない。調査の結果、柱穴、井戸跡等を確認した。井戸跡に関しては、今回の調査区が細長いトレンチ状を呈している点、一定深度以下については、掘削が及ぶことなく、現状で保存が図られる点を考慮し、検出面から約0.8mの地点で掘り下げを中止しており、完掘は行っていない。この段階までの堆積土層を観察すると、裏込め土の存在が確認でき、堆積埋土も人為的な埋め戻しによると推定される状況を示すことから、井戸跡と判断した。上部埋土からは、土師器坏や緑釉陶器片などが出土し、およそ9世紀中頃には埋没したことが知られる。

E地区

C地区の東側に位置する調査区である。擁壁設置部分とその内側に調査区を設定し、調査を実施した。調査の結果、いずれの部分においても、表土下には泥炭土層が存在し、安定地盤は存在しない。既往の周辺調査において確認されている調査対象地の東側に展開する泥沼地が当該地点まで延びていることを今回の調査結果は示している。(坪根)

Ⅲ 下郡遺跡群第127次調査 I 区q～s-13・14地点

調査面積	840㎡	調査期間	2000.10.22～01.03.30
地域	A	調査担当	永松正大・坪根伸也・早田利宏・羽田野裕之・横山 歩

今次の調査は、下郡土地区画整理事業の街路建設に伴うものである。調査は、街路をはさみ、第127調査区（東）と第127-W調査区（西）に分けて実施した。

調査の結果、近世以降の水田層直下から、弥生、古墳、古代、中世の各時代の遺構が確認された。

堅穴住居跡は、切り合いが著しいものを含め17基が検出された。その内時期が判明する住居跡は、6基（SH100・140・240・260・290・350・380）で、すべて隅丸方形の遺構プランを持つ。SH260は二本柱、SH380は四本柱の主柱穴をもつと考えられ、ともに弥生中期末～後期前葉の甕が出土し、炉跡、灰溜土坑は確認できなかった。

SH140は、長方形プラン（約4m×2.6m）で、主柱穴は二本である。貼床面で灰溜土坑と不明土坑を検出し、灰溜土坑内には焼土の堆積が見られた。出土遺物は弥生後期後葉に比定される。

SH350は平面5.6×4.8mの規模を持ち、貼床直上で弥生時代後期終末～古墳時代初頭に比定される複合口縁壺、壺、高坏、甕、ミニチュア土器が破損し、廃棄された状況で出土しており、住居廃絶段階の廃棄行為と思われる。埋土中には、炭化物や焼土の堆積も見られるなど、焼失住居の様相も窺える。貼床面には住居内のやや東より灰溜土坑が確認できた。貼床除去後、地山を掘り込む不定形土坑が検出され、貼床と同じ埋土をもつ土坑で、下郡遺跡群の堅穴住居跡でみられる特徴である。

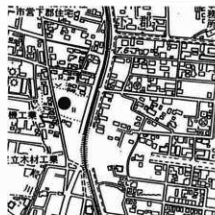
SH100は井戸跡（SE030）に切れ、4世紀末段階の小型丸底壺が出土している。SH240・290は、住居北壁にカマドが付くもので、廃絶時の祭祀行為に伴う遺物等は確認出来なかった。両遺構とも、主柱穴は四本である。SH290から、6世紀中頃以降に比定される甕片が出土している。

井戸跡は、5基（SE030・040・170・220・310）検出された。

SE030は、埋土中から企救型甕片（8世紀中頃～）や暗文を施した都城系土師器（8世紀前半）が出土している。SE040は、土層観察から井筒をもつものと想定された。埋土中からは龍泉窯系青磁（I-5b類）、糸切り土師器坏（14世紀前半）、瓦器碗が出土し、14世紀前半以降と考えられる。上面で土壌墓（ST060）が検出されたが、遺物の出土がなく時期は不明。SE170は、調査区北で検出され、SH260を切っている。掘り方は素掘りで、旧水位点と思われる部分が挟られており、水の浸食作用による崩落と思われる。土層観察でも崩落土と思われる層がみられる。更に、崩落した後掘り返しを最低1回はしているとみられ、二度目の崩落後、自然堆積の中で遺物等の廃棄がなされていたと想起される。遺物は、弥生後期終末～古墳初頭の複合口縁壺や壺、甕が出土し、当該期に機能していた井戸と想定できる。

掘立柱建物跡は、3棟（SB015・090・120）を検出した。

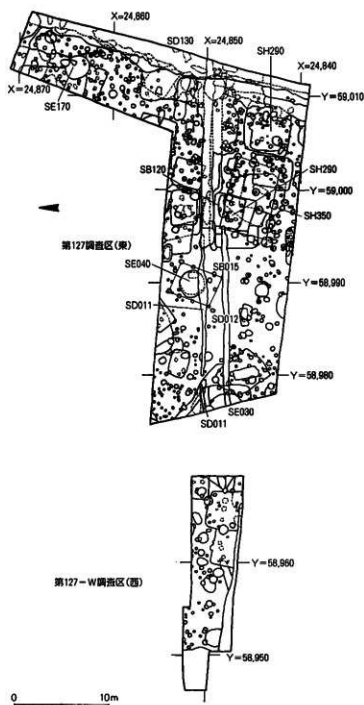
SB015・090は、主軸方向が類似しており、同時期と考えられる。SB015は4間×4間（3.8m×4.2m）で、またSB090



第29図 調査地点位置図



第30図 調査区全景（北方向から）



第31図 遺構配置図 (1/400)

は1間×4間 (3.3m×5.2m) でSE040を覆うように柱穴が配置していることから、SE040の覆屋の可能性も考えられる。

SB120は、3間×4間 (柱間5.1m×8.2m) で、掘り方は0.5~1.0mと大きい。出土遺物が破片資料で、僅少であり時期比定はできていない。

溝状遺構SD011・012が東西方向に平行して延びており、空間地に遺構が少ないことから道路状遺構が想定されるが、確定には至らない。備前焼播鉢 (16世紀代)、糸切り底土師器环、須恵器环身 (小田編年IV期) が出土しており、中世の範疇に収まるものと思われる。



第32図 SE170完掘状況



第33図 SE350遺物出土状況（南方向から）

SD130は、調査区東に位置し、北に対し西に振る形で南北方向に延びる溝状遺構である。堆積は自然堆積を呈し、検出面からの深さは約1mであり、逆台形状の断面形が考えられる。遺物は糸切り土師器杯、中国産青磁碗、瓦器碗が出土しており、14～15世紀代と想定される。

土坑SX105は、調査区ほぼ中央に位置し、SB120を切っている。平面長方形プランで、長軸1.4m、短軸1.0mで、検出面から床面までの深さは約0.8mである。検出時において、地山ブロック土の混入がみられ、土層観察においても不整合が確認できることから、遺構内施設をもつものと思われる。土墳墓との認識に基づいて調査を行ったが、確証を得るには至らず、土壌サンプルの分析結果をまちたい。

以上が、下郡遺跡群第127次調査の主要遺構についての概要である。

今回の調査では、調査方法の不統一による調査不足の面は否めない。全体のデータにおいて記録保存は出来ており、今後の報告書作成において、検討し修正していくものである。第127次調査では、弥生、古墳時代の竪穴住居跡を多数検出し、集落の展開の上で新知見を得ることが出来た。また、第127-W調査区西側では、西に向かって傾斜が始まるとともに、竪穴住居跡も手前で終息し、更なる西への展開はみられない。調査地の周囲は、微高地となっていることから、第127-W調査区は集落の西限と考えられる。第127次調査区北側で確認された弥生時代終末～古墳時初頭の井戸跡は、類例が少なく重要な発見といえる。旧水位点も把握でき、古環境の解明も可能になると思われる。中世においては、SD130やSB015・090、SE040など関連すると思われる遺構群を確認できた。下郡遺跡群第125次調査において中世城館の堀が確認されるなど、今後下郡遺跡群においても中世遺跡の解明は、大友氏関連遺跡と共に重要性を持つと考えられる。

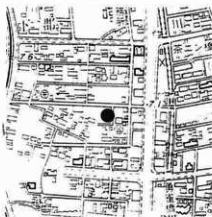
（永松）

IV 下郡遺跡群第129次調査 E区k-14地点

調査面積 約33㎡
地域 A

調査期間 2000.10.26～00.10.27
調査担当 坪根伸也・羽田野裕之

今次の調査地点は下郡遺跡群E区k-14地点に相当する。南下郡公園のトイレ浄化槽設置に伴う事前調査として実施した。表土から約1mの厚さで堆積する客土を除去すると暗黄茶褐色土の基盤土層を確認することができる。検出遺構はすべてこの暗黄茶褐色土層上面で確認される。確認標高は約4.4mであり、隣接する調査区（第71・76次）での確認標高約5.0mとは大きな差異がある。これは暗黄茶褐色土上部が大きく後世の削平を受けているためと考えられ、さらに、調査区北西側の約半分についても大きく攪乱を受けており、検出遺構の遺存状態は総じて良好ではない。



第34図 調査地点位置図

129SX001

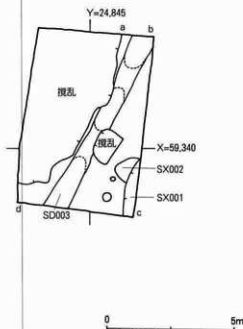
129SX001は調査区南東壁側側で検出された土坑状の遺構である。東側が調査区外に存するため、全体の規模や形状は不明である。検出面での規模は $2.0 + \alpha \text{ m} \times 0.5 + \alpha \text{ m}$ 、深さ0.4mを測る。遺構内堆積土は2層からなる。いずれもレンズ状に堆積しており堆積埋土は自然堆積によるものと思われる。出土遺物は、概して少なく、陶磁器、その他土器片等が出土している。出土した陶磁器には唐津焼と思われる皿の口縁部や陶胎染付の碗等がある。このような出土遺物からこの遺構は18世紀前半頃の所産と考えられる。

129SX002

129SX002は調査区東側に位置し129SX001に切られているため全体の規模や形状は不明だが、遺存する部分から推定される形状は楕円形の長土坑になるものと想定される。検出面での規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。堆積埋土は、暗茶褐色土の単一層である。出土遺物には、甕の底部や口縁部、高杯の破片等がある。甕の口縁部は直立した口縁部の外面下位に二条の刻目突帯をもつものであり、いわゆる下城式甕形土器の特徴を具備している。これらの遺物からこの遺構は、弥生時代前期末から中期中頃のものと考えられる。

129SD003

129SD003は調査区中央に位置し、主軸をN-27°-Eにとる溝状遺構である。溝の上部が削平されているため全体の規模や形状は不明である。遺構下部で土坑が三基連なる状態で確認できる。それらの土坑は検出面での幅0.3mを測り、現状での深さは、土坑の最も深い部分で0.4mを測る。遺構内堆積土は3層からなる。すべてレンズ状に堆積しており堆積埋土は自然堆積と考えられる。出土遺物は、土師器破片や陶磁器口縁部、その他土器片等が出土している。出土した陶磁器の口縁部は、中国



第35図 遺構配置図 (1/200)

下郡遺跡群
第129次調査
E区k-14

青花の皿になるものと思われるが細片のため詳細は不明である。以上の出土遺物の状況から厳密な時期比定は行えないが、戦国期前後の所産である可能性が考えられる。

その他、ビットが2基調査区南東側に検出されたが、今回の調査区内ではこれらのビットと周りの遺構との関連を明らかにすることはできなかった。ビットから遺物は出土していない。

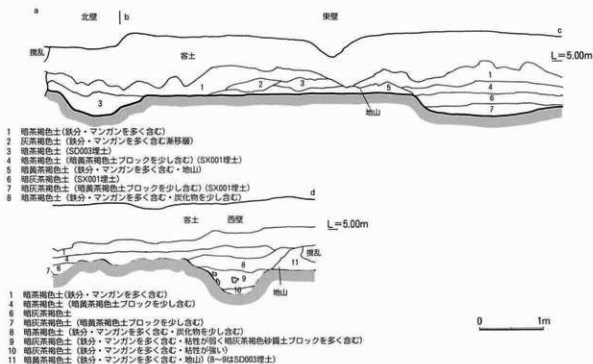
今回の調査では弥生時代、戦国期(?)・近世と時代幅のある遺構が検出されたが、隣接する調査区所見(第71・76・100次)との関連から時代別に次のようなことが考えられる。

弥生時代では、隣接する調査区(第71・76・100次)において中期の貯蔵穴(第71・76次)が多く検出されており、それらは調査区内で円状に分布している。第129次調査区で確認されたSX002は、これらの貯蔵穴と時間的に近接するものであることから、深い関連性が示唆される。

戦国期では、隣接する調査区(第71・76・100次)において16世紀代前後の時期と考えられる土師器埋納坑、16世紀後半の可能性のある土壇墓(第71次)、井戸跡、溝状遺構等が確認されている。第129次調査区で確認された溝状遺構は、これらの遺構と時間的に近接するものであり関連が注目される。

以上のように第129次調査で確認された遺構は、隣接する調査区(第71・76・100次)の遺構と所産時期の上で深い関連性を有することが考えられるが、今後近辺の調査によって遺跡間のより詳細な関連性が明らかになることを期待したい。

(羽田野)



第36図 北側SD003~東側~南側SD003までの壁面土層断面図(1/60)

V 下郡遺跡群第130次調査 D区n・o-16・17地点

調査面積 212㎡
地域 A

調査期間 2000.11.10～00.12.08
調査担当 坪根伸也・羽田野裕之

今次の調査は下郡地区土地区画整理事業に伴う区画街路築造の事前調査として実施した。

調査対象地域は、L字状を呈するが、屈曲部を中心とする部分は、現在の水道管、下水管をはじめとする多くの埋設管の付設に伴う大規模な掘乱穴が存在しており、調査対象範囲から除外した。そのため、調査区は第40図に示すような二つの調査区に分かれることになり、北側に位置する調査区をA調査区、西側に位置するものをB調査区として調査を行った。

以下に各調査区の主要な調査成果について記述する。

A調査区

南北に長い調査区である。大規模な掘乱穴が認められる南側を除く部分において、土坑、溝状遺構、道路状遺構などを検出した。いずれも近世以降に比定されるものである。

131ASX001は調査区の北端において検出した土坑である。長軸1.61m、短軸0.9mの楕円形プランを呈し、現存深度は0.4mを測る。土坑内には馬と考えられる動物骨が一体分埋葬されていた。出土遺物が少なく、厳密な所産時期は不明であるが、切り合い関係を有する周辺遺構との関連から、18世紀後半以降のものであることは明らかである。

溝状遺構には130ASX015、130ASX019、130ASX027、130ASX036などがある。いずれも調査区を南西方向から北東方向へ斜走する溝状遺構であり、その方向は当地に以前存在した旧道方向に一致する。さらに、これらの溝の南方向には遺構が希薄な空間があり、これらの溝状遺構が道路側溝であった可能性を示唆している。これらの事象に呼応するように調査区の南西壁面には版築状の土層堆積が確認される。しかし、各溝に確実に対応するような状況では検出されておらず、土層の堆積状況から130ASX015埋没後に構築されたものであると判断される。いずれにしても、この部分が長期間にわたり、道路として踏襲されてきた可能性は高く、これらの溝状遺構が、道路に伴うものである可能性は高いと推定される。詳細については、今後の周辺、特に旧道路の延長線上の調査成果に期するところが大きいといえよう。

ちなみに、調査区北側のほぼ中央、130ASX005の上部付近を東西方向に分布する版築状の遺構の存在が確認されている（130ASX050）。南北両側ともに掘乱穴により欠失するため、規模や正確な方向は不明であるが、これについても道路状遺構の可能性を考慮しておく必要がある。

B調査区

本調査区では近世に比定される遺構が主要を占めた。以下、個々の遺構に関してその概略を記す。



第37図 調査地点位置図

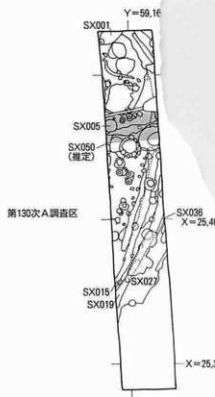


第38図 A調査区全景(北方向から)

下郡遺跡群
第130次調査
D区n・o-16・17



第39図 B調査区全景(東方向から)



第40図 遺構配置図 (1/300)

井戸跡(130BSE007)は調査区中央で確認された。検出面での径約2.0m、深さ約1.7mを測る。断面形状は、下部に向かうほど緩やかに窄まる様相が見受けられるが、壁面の崩落などの状況が想定されたため、底面までの掘り下げを断念した。

土層観察の結果から、裏込め土の存在が認められ、中位層以下からは井筒を確認した。平面プランは約0.7mの方形を呈し、四隅に径約0.1mの加工された竹柱を配置し、それよりやや小規模の同一素材柱で側面を構成する。

井戸跡からの出土遺物には陶磁器、瓦、櫛等があり、出土陶磁器には陶胎染付碗破片などの出土が認められ、この遺構の帰属時期を概ね18世紀中頃～後半と推定することができる。

調査区東側に於いて墓墳2基(130BSX019・020)を確認した。両遺構は掘乱穴の底面において検出され、その上部は既に削平を受けており遺存状態は良好ではない。130BSX019は径約1m、深さ0.45mを測る。土層観察

の結果から、遺構両壁面には裏込めの状況が看取され、さらに、東側底面に於いて、早桶の底材、及び側材が認められた。部分的ではあるが、人骨の出土も確認されており、本遺構が墓墳であることを示している。なお、土師器小片が出土しているものの小片のため時期決定には至っていない。

130BSX020は019に先行する墓墳である。遺構の南側が調査区外に存しているためその全容を明確にすることは出来なかった。現状での直径約1mで、推定で平面円形を呈すると思われる。深さ約0.45mで、130BSX019と同様に裏込め土が認められた。また、同様に早桶と推定される部材や人骨片も確認されている。この点から、130BSX019と020は若干の先後関係は認められるものの、その性格や所産時期に大差ないものと推定される。

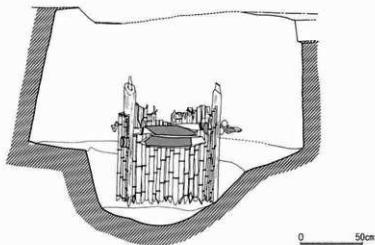
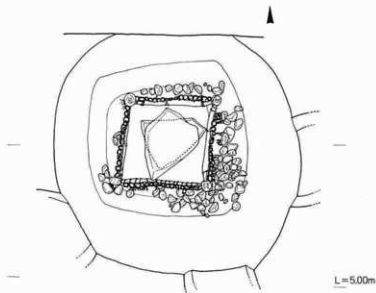
130BSD027は調査区東端で検出し、遺構の大半が調査区外に展開する。現状での幅約2m、深さ約0.6m、主軸方位はN-68°-Wを測る。土層観察の結果から、下層に於いて粘質土が認められ、滞水していた状況が推定される。

今回の調査では調査区が狭小であり、遺構の全容を判明するには至らなかったが、下郡遺跡群の近世集落状況の一端を窺う成果を示すことができたといえよう。なかでも、特筆すべき点としては130BSE007の発見であろう。これは、本遺跡群のこれまでの近世集落調査事例の中でも検出事例のない構造をもつものであり、このような井戸跡を有する屋敷構造の解明などが今後の課題となる。

(坪根・羽田野)



第41図 130BSE007検出状況（北方向から）



第42図 130BSE007平面・断面実測図 (1/30)

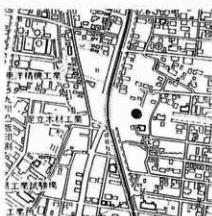
VI 下郡遺跡群第131次調査 G区n・o-2・3地点

調査面積 442㎡
地域 A

調査期間 2000.12.07～00.02.12
調査担当 坪根伸也

調査は下郡地区土地区画整理整地工事業に伴い実施した。調査対象は442㎡であるが、本調査地点は第70次調査と第119次調査地点と一部重複しており、そのため、実質的な調査対象部分はL字形の島状に遺存する部分がその調査対象となった。また、調査対象区の全域には近現代の掘乱穴が無数に存在する。

調査の結果、調査対象範囲の西側には、焼土、淡黄色土粒を含む暗黄茶色土により構成される整地層（131SX250）が存在し、この土層によりふたつの文化面が形成されていることが明らかとなった。東側部分については、調査区の東縁に沿って旧道が存在し、これにレベルを揃えるようにすでに地下げが実施されており、調査区東壁から西へ約6mの地点から131SX250は存在しない。



第43図 調査地点位置図

第1文化面

131SX250上面で確認される遺構群、および調査区東側の遺構群により構成されるものである。

131SX250は、現存する層厚は良好な部分で0.24mを測り、埋土中に染付片や描鉢片などを含む。出土する染付片等の特徴から19世紀初頭以降の整地層であると判断される。

131SX250の上面からは、近現代の掘乱穴とともに、無数の柱穴、土坑、井戸跡などが検出されるが、いずれも時期的に19世紀初頭を遡るものではなく、131SX250の帰属年代を示唆している。検出される柱穴に建物配置を想定させるような規則的な配列は確認されていない。

さて、この第1文化面に帰属すると考えられる遺構で特徴的なのが、131SX250の東側、つまり、旧道面に沿った位置に展開する遺構群である。

131SX250は、131SX207付近を境に存在せず、その東側に低位面を形成するが、この部分に131SX200が存在する。131SX200は溝状の遺構（131SX192）に囲まれた空間に土を充填し、土間状に仕上げたもので、充填土は約0.3mの層厚を有する。これを囲む131SX192は断面U字形を呈し、最大幅は0.85mを測る。染付片、火鉢片などが出土しており、19世紀半ば以降の所産と考えられる。

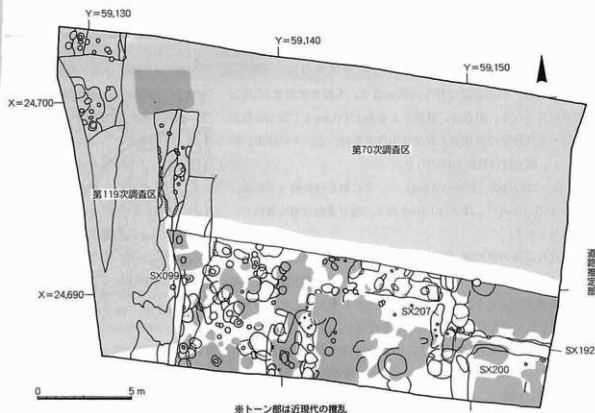
調査区の東側に南北方向に存在した旧道が、いかなる時期まで遡りえるかについての考古学的な物証は現状ではない。しかしながら、他地点（第76次調査等）の道路調査初見では、少なくとも18世紀段階までは遡り得るといった状況が看取され、また、明治期の下郡地区の集落分布と、本道路が当該期の北下郡地区と南下郡地区を結ぶ主要道路のひとつであったという伝承等からも本地点の道路が同様な時期所産となる可能性は高いと考えられる。

このような状況を踏まえるならば、今回検出した第1文化面の遺構群は、道路に面した開口に存在する土間状の空間とその奥に展開する生活空間を示しているものと推定されよう。

推定される奥行き空間は、131SX099までの約20mが想定される。



第44図 調査区全景(南東部分を東方向から)



第45図 遺構配置図 (第1文化面) (1/200)

第2文化面

131SX250直下に存在する遺構群により構成される。

調査区の東側に関しては、地下げによりすでに遺構は欠失し、都合西側でのみの確認となっている。

検出遺構には、大きく近世と弥生時代中期の2時期のものがある。

近世の遺構には、井戸跡、土坑、溝状遺構などがあり、131SE150に付随する遺構であると推定される。

弥生時代の遺構には円形の土坑群 (131SX172、131SX177、131SX182) がある。

131SX172は、西側の一部を131SE150により切られている。約1.5m前後の規模の楕円形プランを呈し、現存深度約0.52mを測る。底面には焼土が認められ、被熱痕跡も認められることから、使用時に火が焚かれたことが判る。その後底面中央には暗灰茶色土により貼床がなされ、周囲には幅約0.2mの溝が巡るような構造となる。溝内には焼土塊が堆積し、貼床上面には下城式甕形土器、脚付鉢破片などが比較的まとまって出土した。暗灰茶色土が埋土となるが、焼土、炭化物、黄灰土ブロックなどを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。弥生時代中期中葉前後の所産となるものである。貯蔵穴として機能していたと考えられる。(坪根)



第46図 131SX172遺物出土状況

Ⅶ 下郡遺跡群第132次調査 J区q-9 地点

調査面積	188㎡	調査期間	2001.01.22～01.03.30
地域	A	調査担当	永松正大・早田利宏・羽田野裕之・横山 歩

今回の調査は、街路建設に伴う確認調査で、下郡遺跡群第125次調査区の南東にあたる。調査は、重機による表土下0.4mまで盛土を除去し、近世～近代段階の整地層上面で検出作業を行った。その結果、多数のピット、掘立柱建物跡を確認した。

SB010は、1間×2間(2.0m×3.8m)で、北に対し西に振っている。柱穴の径は0.7mであり、深さは0.3mを測る。出土物は破片資料で、時期は不明である。

近世～近代段階の整地層(SX020)除去後に溝状遺構SD025上層まで掘り下げた。SD025は、東西に延びる堀であり、遺構中央付近に約1.0m幅の南北ベルトを設定し、東側と西側に分割した形で、埋土の状況を確認しながら人力による掘り下げを行った。SD025は、検出長は東西約23m、検出幅は南北約7mを計り、遺構北側のプランは調査区外に延びるものと思われ、南側は擾乱により掘削を受け、遺構プランは更に南に広がっていたと考えられる。中央付近の南北ベルト、調査区東壁及び西壁の土層観察を行い、埋没過程の所見を得ることが出来た。SD025は、地山を逆台形状に掘り込み、断面形状は箱堀形を呈す。地山の砂礫の、水性作用による堆積状況と、グライ化層も見られることから、滞水・流水に伴う自然堆積土の掘り返しが認められる。最下層部の暗黒灰褐色茶色泥質土中にはほぼ一体分の人骨を良好な状態で検出したが、埋葬遺構は検出できていない。最下層部では、備前焼黒鉢片(乗岡編年Ⅳ期)、京都系土師器(16世紀後葉～)、糸切り土師器が出土し、掘削時期も当該期に比定できると思われる。床面から0.4m程埋没した後、上層ではラミナ堆積(鉄分の沈着)や、また水平堆積が見られ、その水平堆積が数回にわたってなされていることなど、極めて不整合な状況が確認でき、堀、溝以外の機能も考えられる。その水平堆積後、北側からの暗茶褐色土と地山の黄灰色シルト質ブロックの混入土が、大量に流れ込んでいる状況が認められる。下郡遺跡群第125次調査においても、地山ブロック混入の土層が確認されており、内部施設(土塁?)の想定がなされている。混入土層の上部では、南側の堆積では、垂直状に立ち上がる土層が見られ、積土状堆積も観察でき、人為的な堆積が行われたものと思われる。混入土の上層では、近世磁器(コンニャク印判)、京焼風陶器、土師質土器等の近世段階(18世紀後半以降)の遺物が出土している。それ以外に、弥生時代後期末の複合口縁壺や甕、古瀬戸壺(12～13世紀代)、青白磁合子、中国産青磁碗(Ⅰ-1b類)、中国産白磁碗(上田分類F群)、鉄胎陶器、鉄滓、フィゴの羽口が出土している。



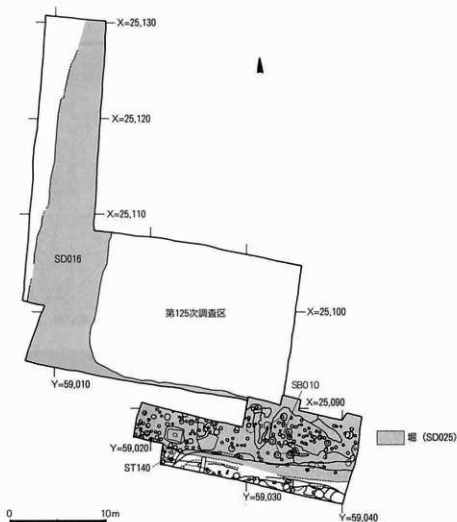
第47図 調査地点位置図



第48図 調査区全景



第49図 ST140検出状況



第50図 遺構配置図 (1/400)

SD025に切られる形で、墓坑(ST140)が検出された。長軸を南北に向け、約1m×0.7～0.9mの長方形プランを有している。人骨は溶解しているものの、埋葬形態は判別でき屈臥葬と思われる。また、土師質土器碗、糸切り土師器杯が各一個体、ほぼ完形品で確認できた。土師質土器碗は、口径5.6cm、底径4.0cm、器高3.6cmで、底部は貼付高台で、高台が退化している。外面はケズリ調整、内面は斜め方向のナデ上げ調整がなされている。糸切り土師器は、口径が12.2cm、底径6.1cm、器高2.4cm、器厚2mmで非常に薄手に作られており、また「皿化」が顕著にみられる資料である。また、碗と皿のセット関係を持つなど、中世の様相が明確に認められる。土師質土器碗、糸切り土師器の年代観、SD025に切られる点から16世紀中頃～後半の遺構と思われる。

今回の調査では、中世期の堀を確認し、方向性や埋没過程に新所見が得られた。第125次調査において、堀の南西隅と考えられ部分を想定しており、今回の調査により堀が東に延びることが確認でき、堀の南西隅が確定できた。また、埋没過程では、第125次調査とは異なる様相が認められ、埋没後の利用において差違があるものと考えられる。また、ST140出土の土師質土器碗、糸切り土師器は、その特徴において注目される資料といえる。

(永松)

Ⅷ 横尾遺跡群第79次調査 D-4・6地点（東中尾遺跡）

調査面積 約1,700㎡
地域 E

調査期間 2000.06.05～00.08.30
調査担当 塩地潤一・奥村義貴・田中 貴

調査地は大野川の支流・乙津川左岸に広がる鶴崎丘陵上の標高約31m地点に位置し、乙津川に向けて開口する開析谷の南側に隣接する。調査の結果、弥生土器片を含む黒褐色土層を基盤面として弥生時代～近代にかけての遺構群を検出した。

以下に各時代の様相についてまとめる。

弥生時代

開析谷を挟んだ北側には当該期の環濠集落である多武尾遺跡が所在しているため、関連遺構の発見が期待されたが、弥生時代後期前葉頃の柱穴が散見される程度で顕著な遺構は展開していない。



第51図 調査地点位置図

古代

9世紀後半の遺構が展開する。当該期の遺構としては道路状遺構と木棺墓が確認されている。

道路状遺構（79SF185）については斜しく切り合った柱穴がほぼ平行して2列に構築されたもので、現状でL字状に折れ曲がる。

密集する柱穴列の幅は約3mを測り、その空間には当該期の遺構は存在していない。

L字状に折れ曲がる地点の南北両側の柱穴（79SX135・140）には柱抜き取り後に土師器の坏が埋納されている。（第53・54図）

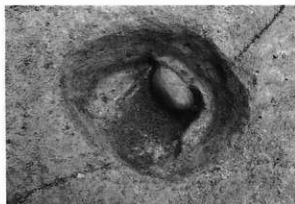
このような現象については古代官道をはじめとした道路状遺構の交差点や三差路の路面中央部に認められる土器埋納行為との関連が注目される。



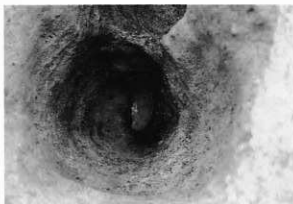
第52図 調査区全景（南方向から）

また、重複した柱穴群には一定量斜め方向に差し込まれたものが認められ、屈曲部外側における柱穴の密集度が他地点に比べ顕著であることも看過できない現象である。

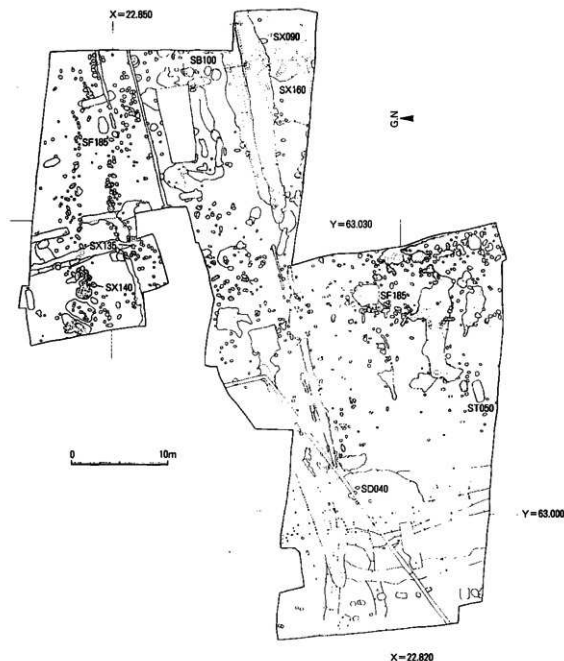
出土した土師器の法量については前者（第57図4）が口径13.0cm、器高3.4cmを測る。底部は丸底気味で、底



第53図 79SX135遺物出土状況（南方向から）



第54図 79SX140遺物出土状況（西方向から）



第55図 遺構配置図 (1/400)

部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。

後者(第57図5)は口径12.9cm、器高4.7cm、底径8.2cmを測る。底部は平底を呈し、口縁部まで外傾しながら直線的に立ち上がる。

このような道路状遺構については福岡県小郡市上岩田遺跡や佐賀県神埼町塚原遺跡などで類例が認められるものである。

本調査地点の西側一帯には良質な粘土層が分布しており、これまでの調査によって9世紀代を中心として粘土採掘が行われていたことが判明している。

また、本調査地の北側や南東部には乙津川に向けて開口する開析谷が存在しており、物資の運搬をはじめとした水上交通との関連も想定しておきたい。

今回発見された木棺墓（79ST050）は土師器環2点と刀子1点を供献し、円礫を棺台として使用したと考えられるものである。

供献された土師器については棺蓋の朽廃に伴って落下したものと判断されるため、本来は棺上に置かれていたと推測される。

出土した土師器の法量については第57図2が口径12.9cm、器高3.8cm、底径7.7cm、同図3が口径12.8cm、器高4.8cm、底径6.9cmを測る。

この木棺墓については先述した道路状遺構の廃絶段階に造営されたと考えられる墳墓であり（第57図2・3）、大宰府周辺の墳墓においても同様な事象が指摘されている。

このような現象については墳墓の立地を規制した「喪葬令」皇都条にある「凡皇都及道路側近。並不得葬埋。」の条文との関連が示唆されており、注目される見解である。

この見解は当該遺構の位置付けを行うことは勿論のこと、当時の景観を復元する上で貴重な手がかりとなるものと考えられるため、今後は当該地区が「喪葬令」の影響下にあったかどうか、さらには当該遺構が条文にある道路の規定に該当するか否かという問題を併慮しながら、周辺調査を実施していく必要があろう。



第56図 79ST050遺物出土状況（北方向から）

中世

16世紀代の遺構が展開する。当該期の遺構としては掘り込み地業、掘立柱建物跡、溝状遺構などが確認されている。

掘り込み地業（79SX090・160）については調査区南東部に隣接する第64次調査において検出された大形の掘り込み（64SX015）と同一のものであり、遺構の性格については断定できていないものの、今回の調査によって16世紀前半～中頃にかけて埋め戻されたことが判明した。

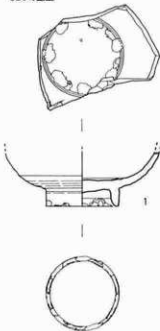
この掘り込み地業を基盤面として掘立柱建物跡（79SB100）が構築されている。

2×4間の南北棟であり、16世紀後半に比定される。

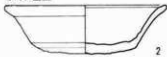
溝状遺構については掘立柱建物跡の西側において検出された南北溝（79SD040）が相当し、建物跡の主軸方向とほぼ一致する。

複数回の掘り返しが認められ、

SD040出土



ST050出土

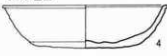


2



3

SX135出土



4

SX140出土



5

0 10cm

第57図 出土遺物実測図（1/3）

最終的には16世紀末頃に埋没したと判断される。

出土遺物には京都系土師器皿をはじめ、朝鮮王朝産白磁碗（第57図1）や中国磁灶窯産三彩鉢小片などが認められる。

朝鮮王朝産白磁碗については、高台径5.8cmを測る。内面見込み部分には砂目跡が7箇所残存する。また、器付けにも砂目跡が認められるが、ほぼ全面に砂が付着しているため、目跡の数は確定できない。

一方、中国磁灶窯産三彩鉢については二次被焼による変色が認められる。鎌倉時代に比定される遺物と判断され、混入遺物の可能性は否定できないものの、現状では威信財として伝世した遺物の可能性も残しておきたい。

この溝状遺構は第81次調査の報告で詳述するが、方形館の西側外郭施設と考えられるもので、第81次調査で検出された東西溝と一連の遺構と判断されることから、当地一帯に半町規模の方形館跡の存在が想定される。

横尾遺跡が所在する鶴崎丘陵上には猪野・中原遺跡や猪野新土井遺跡をはじめとする半町規模の方形館跡が連立して存在し、共通する現象として朝鮮王朝産陶磁器の出土が指摘されている。

また、愛媛県松山市に所在する伊予国守護河野氏の居城・湯築城跡の調査では家臣の階層に応じて出土陶磁器の様相が異なることが判明しており、朝鮮王朝産陶磁器が出土する地区がほぼ上級武士居住区に相当するという極めて重要な所見が提示されている。

この鶴崎丘陵一帯は中世高田庄に比定されている地域であり、南北朝時代には大友氏の所領となった荘園にあたることから、今回確認された16世紀代の遺構群については大友家臣団によって構築された可能性が示唆される。方形館跡の全貌説明をはじめ、今後の調査が大いに期待される。

（塩地）

参考文献

- 狭川真一 1990「古代都市・大宰府の検討 ―墳墓からのアプローチ―」『古文化談叢』第23集
九州古文化研究会
- 神埼町教育委員会 1995『塚原遺跡』
- 小郡市教育委員会 2000『上岩田遺跡調査概報』
- 西海道古代官衙研究会 2000『第3回西海道古代官衙研究会発表資料集』
- 柴田圭子 2000「15・16世紀の貿易陶磁 伊予（東予・中予）の様相 ―湯築城跡・見近島城跡を中心に―」
『城館出土の貿易陶磁器 ―織豊前後の西国大名と貿易―』 日本貿易陶磁研究会
- 塩地潤一 2000「豊後府内出土の貿易陶磁器」『城館出土の貿易陶磁器 ―織豊前後の西国大名と貿易―』
日本貿易陶磁研究会

IX 横尾遺跡群第80次調査 A-20-1・B-1-1地点（東中尾遺跡）

調査面積 約2,442㎡
地域 E

調査期間 2000.07.07～00.10.05
調査担当 塩地潤一・奥村義貴・田中 貴

調査地点は大野川の支流、乙津川の左岸に沿って南北方向に延びる鶴崎丘陵の標高32m～34m地点にあたり、丘陵の東側へ開口する開折谷につながる、緩やかな傾斜面に位置している。

今回の調査は大部分市横尾土地区画整理事業による街路及び宅地造成に伴う事前調査として実施されたものである。

これまでの周辺調査における調査結果により、この一帯には良質な粘土層が広がっていることが判明しており、その粘土を採掘したと考えられる平安時代の土坑群が密集して検出されている。

また、時期は若干異なるものの須恵器窯や土器焼成坑が分布している地区にあたる。

調査の結果、粘土採掘坑をはじめ、地層横転遺構や中世の溝状遺構及び土器埋納遺構、さらに、近世の井戸跡や溝状遺構などが検出された。

地層横転遺構はこの調査区で3基確認された。SX052には弥生土器小片が含まれていることから弥生時代以降に比定されるものである。

SX038は遺物が含まれてはいないものの、SX052の堆積状況と類似しているため同時期のものであると考えられる。

また、SX017はアカホヤの堆積が確認できないことから、縄文前期以前の地層横転遺構である可能性が想定される。

さらに、今回粘土採掘坑とした土坑を3基検出した。

これらは調査区の南側に分布しており、北側では確認されていない。周辺調査においてもこの調査区に近づくにつれ、次第に減少している事が確認されており、この地点が土坑の北限と推定される。

以下にその概要をまとめる。

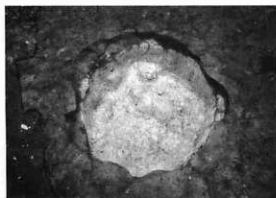
SX040は平面形状については不定円形、断面形状については床面中央部を作業面として、周辺を掘り窪めたような形状を呈し、直径1.7m、深さ0.7mを測る。土層は大きく3層に分けることができる。



第58図 調査地点位置図



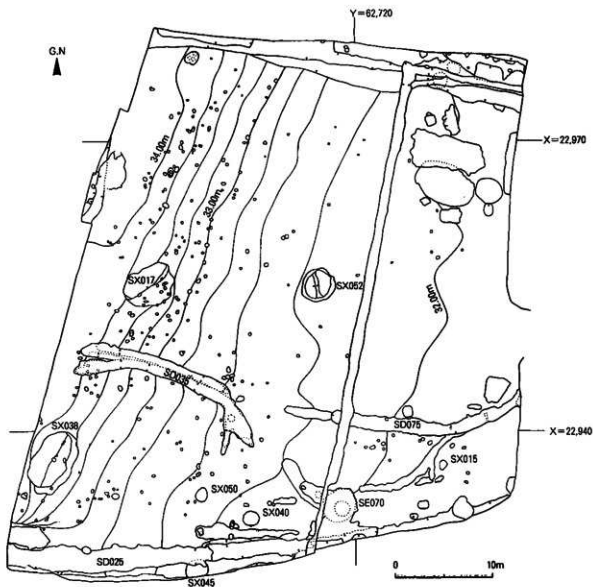
第59図 調査区全景（東方向から）



第60図 SX040完掘状況（東方向から）



第61図 SX040土層断面（北方向から）



第62図 遺構配置図 (1/400)

上層は黒色土、中層はブロック土混じりの細かいレンス状堆積土、下層は大きめの黄白・灰白粘質ブロック土を多く含む褐色粘質土層に分けられる。

土層観察からは、まず良質な粘土を採掘後に廃土による埋め戻しが行われ、さらにその周辺に残されたと考えられる廃土が流れ込む。そして、最終的には長期的な自然堆積によって黒色土が形成されたと推定される。SX 045・050についても同様である。

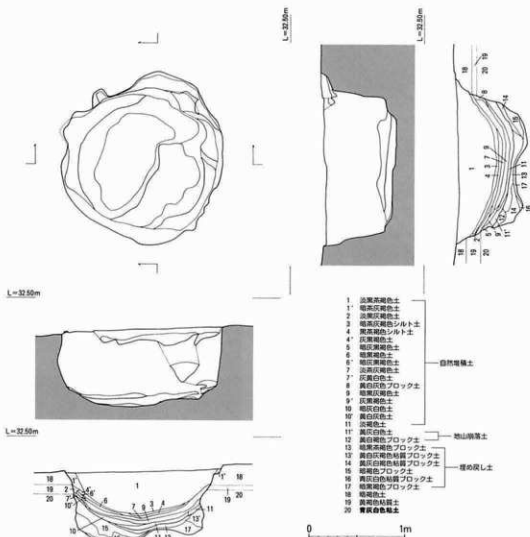
今回検出された粘土採掘坑からの出土物は皆無であり、時期比定は不可能であるが、周辺調査では先述のブロック土上面において9世紀前半代～10世紀前半代に比定される完形の黒色土器碗や土師器環が置かれる場合があり、当該遺構の年代についてもその範囲に収まると考えられる。

また、この状況と符合するように、遺構には単独のもの、2つ以上の遺構が重複しているもの、切り合いが確認されていないものが存在する。

2つ以上重複しているものは、ある程度時間をおいて掘り返されたものであり、切り合いが確認されていないものについては期間を置かず隣接地を掘り下げた後に埋まったものと考えられる。

さらに、これまでの研究成果により、「このような土坑群の検出される遺構が土師器、須恵器、瓦陶兼業など

現中絶絶
地層遺跡
調査図



第63図 SX040平面・断面・土層断面実測図 (1/40)

の盛んな地域にあり、そこでの生産活動の盛衰が土壌群の時期に反映されている。」(註1) ことが指摘されており、当該地区の状況とも適合する。

以上のことから、これらの土坑については平安前期の粘土採掘坑とする蓋然性は極めて高いと判断される。一説では、これらの土坑を分布や遺物の出土状況から土壌墓と位置づける場合があるが、少なからず当該遺跡出土の土坑群については、その形状ならびに遺物出土状況により墓と比定することは困難と考える。

土器埋納遺構 (SX015) は平面隅丸長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ5cmを測る土坑の北側に土師器環が埋納されたものである。出土遺物の帰属年代より16世紀前半に比定される。

中世溝状遺構 (SD035) は幅1.1m、深さ0.2mを測り、東西に湾曲しながら延びる溝である。

水路利用の痕跡はなく、区画溝であると考えられる。

遺物は瓦質の甕片、壺片が出土しており、14世紀代に比定される。

また、SD055・065はこの溝に重複している(新旧関係については古い方から SD055・065→SD035)が時期は不明である。

近世溝状遺構 (SD025) は幅2.4m、深さ0.4mを測り、調査区の南端を東西に横断する。

土層観察より、一回の掘り返しを確認できる。遺物としては肥前磁器丸碗、佐佐見蛇の目釉割皿、備前焼播

鉢などが出土しており、18世紀後半に比定される。

調査区のすぐ南側には同じ湾曲を描いた旧道が今も通っており、少なくとも18世紀後半からの地割が現在も踏襲されていることが分かる。

SD075は幅1.2m、深さ0.1mを測る溝である。水路利用の痕跡は見られず、区画溝と考えられる。

近世井戸跡（SE070）は直径3.3mを測り、平面円形を呈する。

作業の安全性を確保しながら、深さ3.4m地点まで掘り下げを行った。土層観察から素掘りの井戸跡と考えられ、最低一回の掘り返しが考えられる。

出土した波佐見蛇の目軸刺ぎ皿などの燐属年代から最終埋没時は溝と同時期の18世紀後半に比定される。

また、井戸中段テラスに柱穴が約1.5m間隔で四隅に配置されている。柱穴はすべて内傾して掘られており、水汲み施設の存在が想定される。

今回の調査における成果としては、粘土採掘坑の北限が推定できたということである。

ただし、調査区の北側においても粘土層が確認され、粘土層自体はまだ北側に広がっている可能性が高い。

今後は地質学的調査を含め、粘土層の広がりや粘土採掘坑との関係を考える必要がある。

（田中・塩地）

参考文献

- 註1 京嶋 覚 1995「群集土壌の再評価－集団墓説への批判－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』
財団法人大阪府埋蔵文化財協会

X 横尾遺跡群第81次調査 D-2・4地点（東中尾遺跡）

調査面積 約744㎡
地域 E

調査期間 2000.09.30～00.11.02
調査担当 塩地潤一・奥村義貴・田中 貴

調査地は大野川下流左岸に広がる鶴崎丘陵の一角、標高約31mの舌状台地に位置し、北側の谷に向かって緩やかに傾斜している。これまでに周辺では多くの調査が行われている。

調査の結果、集石遺構、土器埋納遺構、掘立柱建物跡、溝状遺構、地層横転遺構などが確認された。

今回の調査では7基の地層横転遺構を検出したが、埋土にアカハヤを含むものと、含まないものの2種類が存在する。SX033・034・041・042の最終埋土は集石包含層と同一のものであり、その下層にはアカハヤの堆積が見られない。SX009にはアカハヤの堆積が認められ、その下層が集石包含層と同一である。また、SX032には両者の堆積が確認できない。これはアカハヤ降下後に削平され、その後形成されたものと考えている。事実、調査区の土層観察においてもアカハヤの堆積は認められず、削平が確認される。さらに、SX049は調査区外に広がるため最終埋土は不明である。

以上の事からSX033・034・041・042がアカハヤ降下以前に出来たもの、SX009・032はそれ以降のものであり、その中でもSX032が一番新しい地層横転遺構であると考えられる。さらに、アカハヤを含むものには前述の第80次調査で確認された地層横転遺構(SX052)のように遺物（弥生土器片）が出土する場合がある。

調査区西側で確認された集石遺構(SX022)は黒茶褐色ブロック土層内（集石包含層）にすべて含まれている。この集石包含層は調査区西側の緩やかな傾斜地の一部にしか認められず、集石遺構以外の遺構が確認された層の下層にあたる。この集石包含層はSX032を除くアカハヤを含まない地層横転遺構の最終埋土と同じであり、アカハヤ降下以前の埋土であると考えられる。

また、谷を挟む北側で実施された第75次調査ではこの土層から押型文土器が出土しており、今回確認された集石遺構(SX022)は縄文早期のものと比定される。

さらに、今回確認されたすべての石がかなりの被熱を受けているため、当初、炉跡ではないかと考えられたが、石が全面被熱を受けており、その中には下面の方が強い被熱を受けているものがある事や集石の置かれていた面が被熱を受けていない事などから、これらは他の場所で使用された可能性が高いと考えられる。

また、今回確認された集石は平面長方形プランをなしており、この集石は廃棄されたものとは考えがたい。

さらに、集石の中には、はじけているものや割れているものも多く、その割れ口がかなりの被熱を受けている



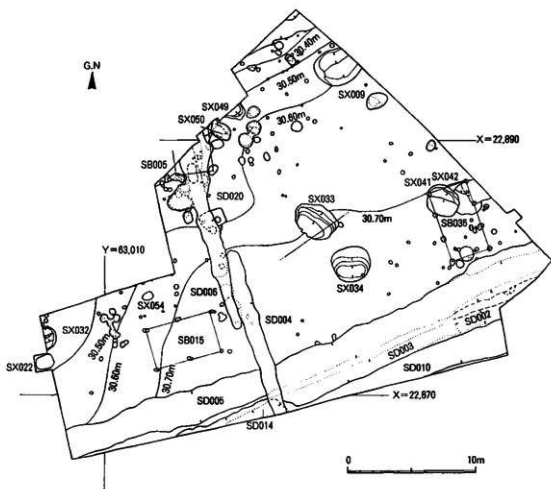
第64図 調査地点位置図



第65図 調査区全景（南方向から）



第66図 81SX022集石出土状況（南方向から）



第67図 遺構配置図 (1/300)

ことから、少なくとも2回以上使用された事が分かる。

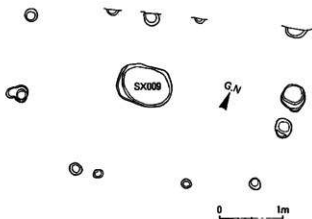
以上のことから、これらの石は使い捨てではなく、何度も繰り返し使用されていたと判断され、次回使用するために置かれたものと想定される。

SX050は土師器環を埋納した遺構であり、墳墓の可能性が高い。その土師器は大野郡野津町八里台遺跡の一石五輪塔下から出土した土師器に類似しており、その五輪塔の年代(弘安八年(1285))から13世紀後半に比定されるものである。

掘立柱建物跡は3棟確認した。SB015は1間×2間の東西棟で柱の抜き取り痕が認められた。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。SB055は調査区外に広がるため規模は不明であるが、体部から一定の器厚で口縁部まで立ち上がる土師器口縁部片が1点出土しているため、14世紀～16世紀までに比定されるものである。

SB035は1間×3間の南北棟で一部に柱痕も認められ、半数の柱穴の掘り方が平面四角形を成し



第68図 81SX054平面実測図 (1/80)

ている。遺物は中国染付碗Ⅱ群と柱痕から土甕が出土しており、16世紀中頃の建物跡であると考えられる。

さらに、建物ではないが、土坑（SX054）を中心として周りにピットが集中している場所が存在する。

土坑とピットとの関係は不明であるが、全体が隅丸長方形をなして分布しており、何らかの施設であると考えられる。現段階での用途は不明である。遺物は土坑から土師器蓋の小破片が出土しており、古代に比定される可能性がある。

溝状遺構は8条確認した。SD004・006・020は南北に、SD002・003・005・010・014は東西方向に延びており、周辺調査で確認された溝状遺構と平行あるいは直行するものである。これらは16世紀末～幕末までのもので重複して存在する。その中でも東西溝のSD005からは乗岡分類（乗岡2000）による近世1～b期（註1）の備前焼鉢、京都系土師器皿、中国染付皿C群、朝鮮王朝産雜軸陶器が出土していることから、16世紀末に比定される遺構と考えられる。

これは本調査区南での第79次調査で確認された南北溝と時期ならびに、出土遺物の様相も一致しており、一連の溝であると判断できる。現状で南北50m以上、東西60m以上を測ると想定される。

これら溝で区画された空間には戦国期に比定される竪立柱建物跡が認められ（註2）、区画の規模や、出土遺物の様相から半町規模の館跡の存在が想定される。（註3）

今回確認された集石遺構は、横尾の台地上で初めて検出されたの縄文時代の遺構であり、それを含む包含層（黒茶褐色ブロック土）が谷の周辺に広がっているものと考えられる。

今後の調査によって、縄文時代の遺構が確認される可能性が高く、大変注目される。また、今回想定できた館跡の全容も明らかにする必要がある。

（奥村・塩地）

参考文献

註1 乗岡 実 2000「備前焼摺鉢の編年について」

『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

註2 平成12年度に実施した横尾遺跡群第79次調査において検出されたものである。

註3 小柳和宏 1994「鎮西における居館の出現と展開－豊後大友氏一族を中心として－」

『城と館を掘る・読む－古代から中世へ－』山川出版社

塩地潤一 2000「豊後府内出土の貿易陶磁器」

『城館出土の貿易陶磁器－織豊前後西国大名と貿易－』日本貿易陶磁研究会

XI 横尾遺跡群第82次調査 D-35・40地点（東中尾遺跡）

調査面積	約2,140㎡	調査期間	2000.10.10～01.10.30
地域	E	調査担当	塩地・奥村・佐藤・松尾・小住・田中

調査地は大分市大字横尾字江又に位置し、大野川下流左岸に沿って南北方向に延びる鶴崎丘陵東端の尾根先端部にあたる標高約8～13mの緩やかな傾斜地に所在する。本調査区の東側には全国的にも著名な横尾貝塚が存在し、これまでの調査によって縄文時代前期と中期の貝層が形成され、前者ではヤマトシジミ、後者ではハマグリが主体となることが解明されている。

また、貝層中ならびにその下位において埋葬遺構も存在し、さらにその下層には押型文土器が出土する縄文時代早期の包含層が確認されている。

調査は、大分市横尾土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査として平成12年10月10日から実施してきたものである。

生活道路確保のため調査区を3ヶ所に分けて行った今回の調査では、縄文時代早期～中世にかけての遺構群が検出された。

その中でも北側のA区については大野川支流、乙津川に向けて開口する開析谷の一角に位置し、調査の結果、3面もの文化面が確認された。

翌13年9月12日から国庫補助による市内遺跡確認調査（第82-2次調査）として継続することとなり、同年10月30日まで実施した。

B・C区については貝塚に近い位置に存在するため遺跡の広がりが期待されたが、後世の造成により地形がかなり改変されており、縄文時代の遺構としては、前期の土坑2基と、後期の包含層を確認したに留まった。

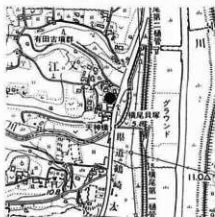
以下に各時代の様相についてまとめる。

【1】第1面（14世紀後半以降）～14世紀後半に比定される堆積土を基盤面とする遺構群。

14世紀後半に比定される堆積土から掘り込まれた溝状遺構を確認した。溝幅約2m、深さ約1mを測り、調査区の中央部を南北に縦断している。

溝状遺構の性格については現状では判断できないものの、区画溝の可能性が想定される。

この溝状遺構の基盤面となる堆積土層には古代・中世の遺物と共に大量の縄文土器や石器が含まれており、一



第69図 調査地点位置図

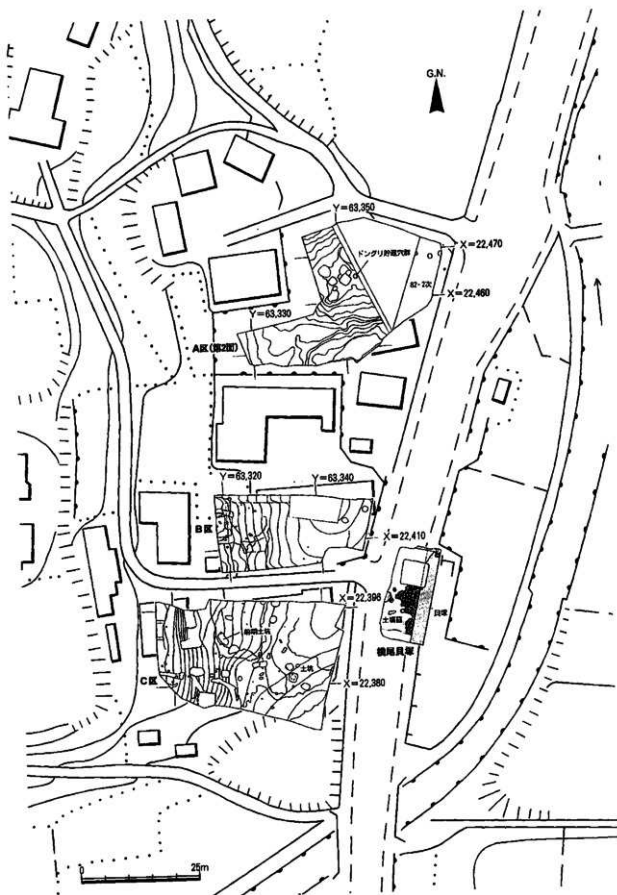
東中尾遺跡
横尾遺跡群
第82次調査



第70図 遺物出土状況（北方向から）



第71図 ドングリ貯蔵穴群完掘状況（東方向から）



第72図 遺構配置図 (1/800)

部に不整合な堆積状況が認められることから、この段階において大規模な掘り返しや造成が行われたものと考えられる。

【2】第2面（縄文時代後期前葉）～グライ土層を基盤面とする遺構群。

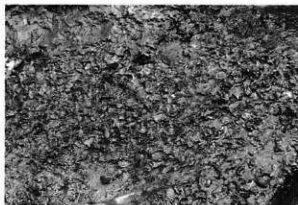
縄文時代後期前葉に比定される第2面からはドングリ貯蔵穴6基と土坑2基が確認された。

貯蔵穴は、平面不正円形を呈しているものが多く、規模は直径約1～3mまで様々である。土層観察の結果から、ドングリが出土した6基のうち4基は機能停止後に埋没したものと考えられる。

出土したドングリは取り残しと判断されるもので、埋土は砂質土とシルト質土が細かなレンズ状堆積を呈す。残り2基についてはドングリを貯蔵した状態で廃棄もしくは忘れ去られ、そのまま埋没したものと考えられる。

今回検出された貯蔵穴群は低湿地の湧水を利用した堅果類貯蔵穴である。

これらの保存方法については貯蔵穴にドングリを直接もしくは編み物に入れ、その上部を木の葉や木材で覆い、礫で押さえるという西日本各地のドングリ貯蔵穴との共通点を見出すことができる。掘り返しの痕跡も認められ、複数回の使用が窺える。



第73図 ドングリ出土状況（西方向から）

出土したドングリはこれまでのところ全てアク抜きを必要としないイチイガシであり、本遺跡でのドングリ貯蔵穴群は、短期間の生貯蔵を目的としたものと考えられる。

なお、2基の土坑に関しては貯蔵穴群が機能している段階で存在していたものであるが、湧水ならびに滞水層まで掘削が及んでおらず、堅果類の出土は認められていない。

埋土はシルト質土と砂質土を基調とする事から貯蔵穴としては機能していなかったと判断されるが、その性格については現状では理解できていない。

さらにA区調査区内の東側に位置する（第82-2次）調査では、ドングリ貯蔵穴群が検出されたグライ土層を基盤面として土坑3基を確認した。堅果類の出土は認められなかったが、当該期に比定される遺構群の広がりが見られる。

【3】第3面（縄文時代早期）～アカホヤならびに砂層の下位にあたる泥炭層中において検出された遺構群。

ドングリ貯蔵穴群を検出したグライ土層を掘り進めた結果、アカホヤ火山灰層が確認された。アカホヤは南九州の鬼界カルデラの噴火によって約6300年前に降下したことが判明している広域火山灰である。

本調査区において確認されたアカホヤ火山灰層は淡黄灰色シルト質土を呈す。部分的なグライ化により分層しているが、不純物が少ないことや酸化が認められないことから降下後まもなく沼底に沈んで堆積したものと考えられる。アカホヤが一般的に見受けられる赤黄色を呈していないのは、本調査地点が谷部にあたることから、沼地に沈殿し、空気から遮断されて酸化しなかったものと考えられる。現状で0.4～0.6mの堆積が認められる。

また、調査区中央土層一帯において砂層の不整合な堆積が確認された。これは一部にアカホヤ火山灰を包み込んでいることから、アカホヤ降下後の液状化現象による噴砂の痕跡と考えられる。これは調査区中央土層においてのみ確認されるものであり、他の地点では認められない。

さらに、アカホヤ火山灰層に潜り込む砂層の上面レベルがほぼ一定であることも特筆すべき点である。

この現象は、アカホヤ降下後一時期の沼底がこの面であることを示唆している可能性が考えられる。その上層



第74図 調査区中央断面土層（西方向から）



第75図 82SX080出土状況（北方向から）



第76図 丸木材に施された切り込み（西方向から）



第77図 82SX070出土状況（南方向から）

に沈殿したアカホヤが堆積していることから、今回確認された液状化現象についてはアカホヤ降下後あまり時間をおかない段階で起きた地震によるものである可能性が高いと考えられる。

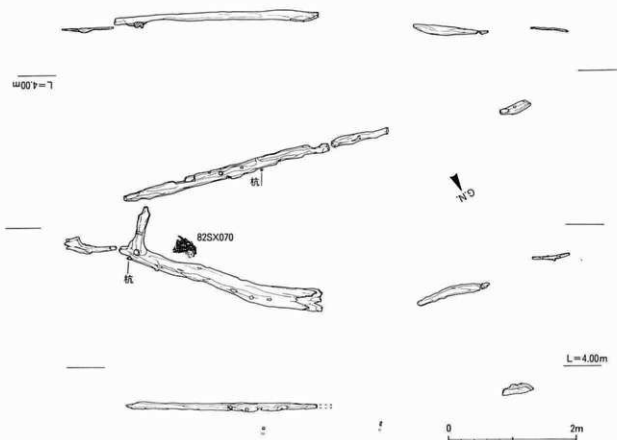
アカホヤ火山灰層からの出土遺物は皆無であるが、下層の砂層からは縄文時代早期末～前期初頭に比定されている条痕文土器深鉢片（高橋分類の轟1・もしくは2式）が出土している。

また、アカホヤ火山灰層ならびに砂層の下位において泥炭層を確認した。この層からは建築部材などを含む加工部材を利用して形成された水場の遺構（82SX080）が検出され、水場の遺構内部と考えられる地点から石器の素材である姫島産黒曜石がカゴに収納された状態で出土した。（82SX070）

水場の遺構を形成する主要な部材については2本確認でき、それらが北西側に向かって、コの字状に開く形で配置されている。これら2本の部材は調査区南側で検出された角材風の部材と、調査区東側で確認された丸木材によって構成され、部材を固定していたと考えられる杭を周辺で3本確認している。泥炭層からは、カシ・センダン等の有機遺物が出土し、縄文時代早期末～前期初頭に比定されている条痕文土器片が2点確認されている。

この水場の遺構については現状で水さらし場としての可能性と作業場もしくは足場としての可能性を想定している。前者については丸木材の股木部分に人為的な切り込みが認められ、取水もしくは排水に使用された可能性が示唆される。しかしながら、ここで問題となる現象として水場の遺構を形成する部材間に、貯水の機能を果たす事が困難と考えられる程のレベル差が存在する事が指摘される。先述した液状化現象にみられる後世の変動による影響とも考えられ、今後検討を要する。後者については丸木材下半部に伐採後の二次的な負荷によるものと考えられる平坦面が確認されていることを根拠とするものであり、当地点においてカゴに収納された状態で出土した黒曜石との関連が注目される。

これら2つの可能性については、縄文人の積極的な低湿地への働きかけを示唆するものであると考えられ、今後の調査が期待される。

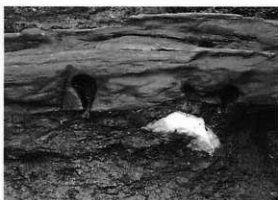


第78図 82SX080実測図 (1/60)

(a) 建築部材

水場の遺構を構成する部材において、南側の部材については建築部材の二次利用と考えられる。部材は長さ約3.4m、一辺約18cmであり、部材の東側は角材風の加工が施されている。その西側には直径3～5cmを計る円形の穴が、現状で6ヶ所確認できる。これらには段彫りが施されているものも確認できるが、人為的に掘り込むには困難な個所にも円形の穴が存在することから、全ての穴が人工的なものであるのかは再検討を要する。

今回発見された建築部材は、堅穴住居の建材の可能性が指摘されているものであり、縄文時代早期における高度な加工技術の存在を明確に示唆すると共に、建物構造を解き明かす極めて重要な資料と考えられるものである。



第79図 建築部材近景 (北方向から)

(b) カゴに収納された黒曜石 (82SX070)

この水場の遺構内部からは黒曜石が密集した状態で出土した。

出土した黒曜石は大部分姫島産のものであり、現状で観察できる限り、剥片と石核によって構成されている。これら黒曜石の周囲には編まれた蔓もしくは樹皮が確認できることから、カゴに収納された状態で埋没したと判

断されるものである。出土状況については意図的な埋置か、偶発的なものかは判断できていないが、泥炭層中において掘り方については確認されなかった。

また、現段階で確認できるカゴの編み方は「1本超え1本潜り1本送り」による網代編みである。

今回の発見は、石器素材の保管方法を明確に示すものであり、長野県下諏訪町一の釜遺跡において指摘された所見を実証する資料として高く評価できるものであることは勿論のこと、産地からの運搬状況を推定される貴重な資料である。

まとめ

今回の調査によって横尾貝塚周辺に縄文時代の生業関連遺構の存在が明らかとなった。

また、住居空間についても谷部に廃棄された大量の縄文土器や石器の出土状況から、貝塚に隣接した谷部南側斜面地に想定され、貝塚周辺に縄文集落が展開している可能性は極めて高いと考えられる。

さらに、アカホヤ火山灰層の下層から発見された縄文時代早期に比定される遺構群については縄文人の生活スタイルの確立という重大な問題を解き明かす鍵となり得るものであり、横尾貝塚一帯は縄文集落の解明をはじめ、劇的な環境の変化に適応した生業の分化や定住化の実態を検証・復元し得る極めて重要なモデルゾーンと判断される。これらの残存状態は極めて良好であり、今後の調査の進展が大いに期待される。

(塩地・奥村・小住)

参考文献

- 町田 洋 1977『火山灰は語る』 蒼樹書房
- 高橋信武 吉留秀敏 1982『横尾貝塚発掘調査概報』 大分県教育委員会
- 金山喜昭 1993「縄文時代前期における黒曜石交易の出現」『法政考古学』第20集記念論文集 法政考古学会
- 成尾英仁 1995「大隈半島中部に見られる鬼界アカホヤテフラ噴火時の液状化跡」
『第四紀露頭集－日本のテフラ』日本第四紀学会40周年特別企画 日本第四紀学会
- 金山喜昭 1996「海進海退現象」『考古学による日本歴史16自然環境と文化』 雄山閣出版
- 西谷 正 1996「考古学から見た自然と人間」『考古学による日本歴史16自然環境と文化』 雄山閣出版
- 波辺 誠 1998「黒崎貝塚出土の植物遺体」『黒崎貝塚』 熊本県教育委員会
- 吉田 寛 1999『龍頭遺跡』 大分県教育委員会
- 塩地潤一 奥村義貴 小住武史 佐藤孝則 松尾 聡
2001「横尾貝塚周辺の発掘調査」『考古学ジャーナル』No482 ニュー・サイエンス社

XII 辻古墳群

調査面積 2,370㎡
地域 G

調査期間 2000.03.02～00.09.08
調査担当 経野公徳・高田 豊

辻古墳群は、国指定史跡亀塚古墳の前方部付近から丹生川河口部に
向かって北東方向に延びる尾根の先端部に立地している。

従来、箱式石棺を主体とする古墳等が周知されていたが、平成7年
度に坂ノ市土地区画整理事業に伴って実施された試掘・確認調査により
新たに埴輪を伴う大規模な周溝が検出され、大型の古墳も存在する
ことが明らかになった。

今回の調査は、試掘・確認調査と同じく区画整理事業に伴う道路建
設等に伴って実施したもので、すでに検出されていた2基の古墳に関
わる遺構を完掘したほか、新たに、近世の溝や柱穴群等を確認した。
また、発掘調査結果と、地籍図および過去に撮影された空中写真をあ
わせて検討し、古墳の墳形の推定も行うことができた。

以下、遺構別に記述する。

辻1号墳

墳丘の盛土は完全に削平されており、さらに墳丘の北
半分は道路およびJR日豊本線や道路等によって削られ
ていた。また、主体部の痕跡を示す墓壇あるいは石棺の
破片等は検出できなかった。このため、今回の発掘調査
では、半円形に巡る周溝の残存部分を全て調査したの
みにとどまった。周溝は、幅4.5～7.0m、深さ1.0m～1.5
mで断面は台形状を呈し、墳丘部分の復元直径(内径)は
約26mと推定された。

周溝の埋土中からは人頭大の円礫が多量に出土して
おり、墳丘から転落した葺石と推定される。これらの円礫
を石材別に見ると、結晶片岩(緑泥片岩)と石英がほと
んどを占めている。礫の大きさ以外については亀塚古墳
の葺石と共通しており、基本的には在地で採取されたも
のと推定される。

また、周溝からは蓋形埴輪・家形埴輪等の形象埴輪、
円筒埴輪、朝顔形埴輪等、埴輪が多量に出土した。

このうち蓋形埴輪(第86図)は立ち飾り部(1～4)お
よび笠部・台部(5・6)ともに多数出土しており、少なくとも10個体以上はあるものと考えられる。立ち飾り
部の文様は二本の沈線により脚状の弧線を多数描くものであり、軸受け部や笠部には突帯が認められないなど、
蓋形埴輪としてはかなり退化した型式に属するものである。円筒埴輪(第87図)は外面に典型的なB種ヨコハケ
が認められるものを主体とするが、8のように突帯がかなり低く退化しているものも認められる。また、口縁端
部に突帯がつくもの(9)も少量ながら認められた。



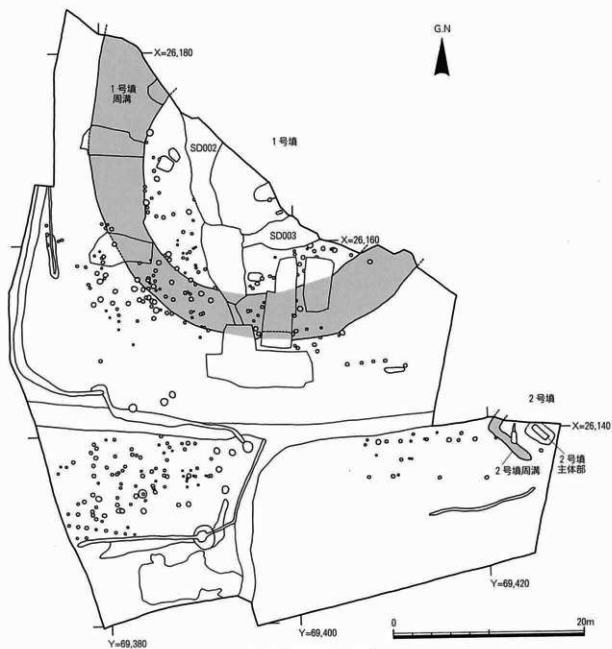
第80図 調査地点位置図



第81図 調査区全景空中写真



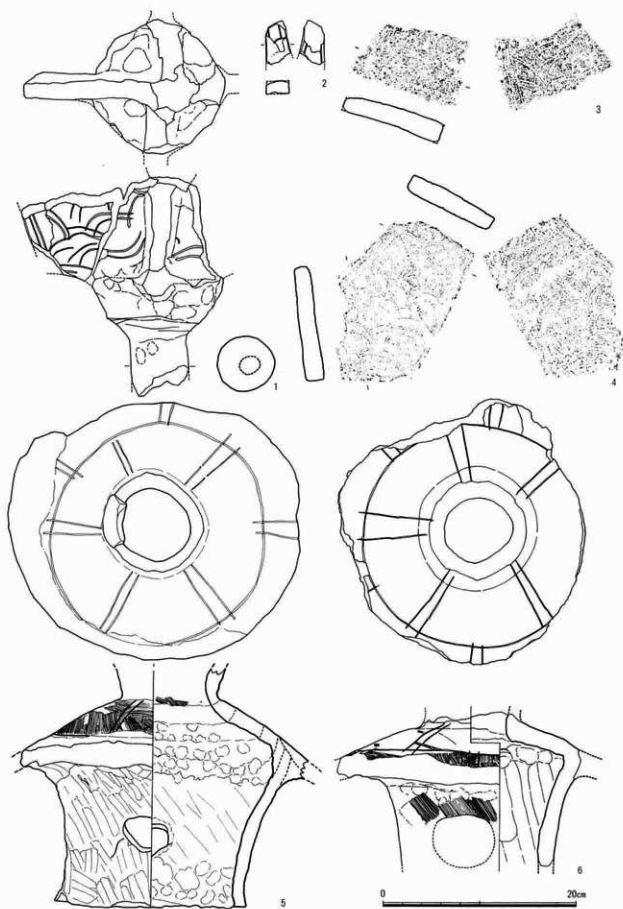
第82図 1号墳全景(南西方向から)



第84図 1号墳周溝断面



第85図 1号墳周溝内埴輪出土状況

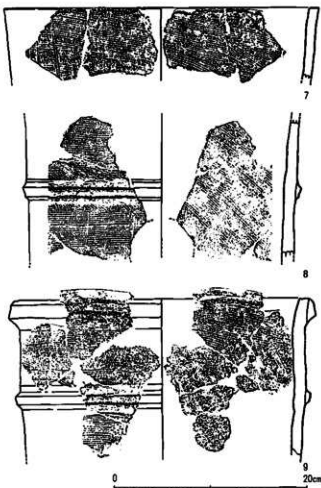


第86図 1号墳周溝出土藍形埴輪実測図 (1/4)

これらの埴輪には黒斑が認められず、明らかに還元炎焼成と認められるものを含んでいることから、密火焼成によるものと判断できる。さらに、円筒埴輪および蓋形埴輪の型式学的な特徴から判断すると5世紀後半～末にかけての時期に位置づけることができよう。

周溝埋土の土層を観察すると厚さ10cmほどの黒色土層が認められるが(第84図)、この土層中には古代～中世にかけての遺物も包含されており、この層および直下に多量の円礫(葦石)が包含されている。従って、1号墳は中世以前に墳丘封土がかなり崩落するとともに葦石が転落し、その後、徐々に周溝が埋積しながら土壌の黒色化が進んだものと推定される。後述するが、周溝が完全に埋め立てられるのは、近世以降であった可能性が高い。

検出された周溝の平面プランに注意すると、周溝の内側のラインは円形を描くのに対し、外側は調査区北西端付近で直線的に北に延びており、この古墳の墳形が通常の円墳ではないことが示唆された。そこで、調査地点付近の区画整理以前の地籍図と空中写真を合わせて検討した結果、興味深い事実が判明した。明治21(1888年)年作成の地



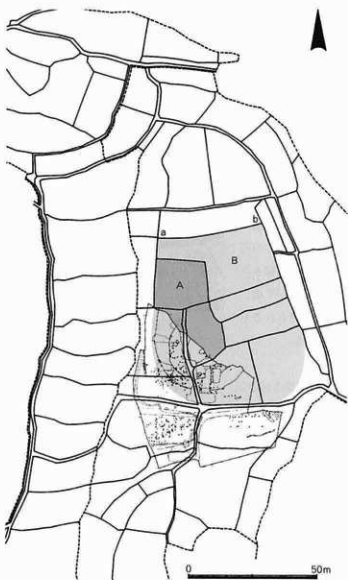
第87図 1号墳周溝出土土円筒埴輪実測図(1/4)

籍図と今回の遺構配置図の厳密な位置比定までには至っていないが、概ね第88図のような位置関係になるものと思われる。この地籍図をみると、今回周溝が検出された地点付近は、明治21年当時山林もしくは畑であったが、ここから北側に向かう方形の地割が延びており、全体として前方後円状の地割になっていたことがわかる。(網掛部A)しかし、この地割は、その一部(方形部分)が今回検出された周溝の外側ラインに対応しており、墳丘部分には対応していないように思われる。一方、1948年の空中写真および1962年の空中写真でも前方後円形の地割が確認できるが、地籍図に見られるよりも大きな地割として確認できる。これは、第88図におけるBの部分に対応しているものと推定される。但し、今回検出された周溝のプランからみて、網掛部Bは、1号墳の墳丘+周溝の範囲よりもやや東側に広いと考えられる。このようなことから、今のところ第88図中のa-bを結ぶライン付近を前方部の前庭部もしくは前方部前側の周溝外端部とするような前方後円墳であった可能性を考えておきたい。この場合、周溝幅を含めた全長は50m以上に及ぶものと推定される。

いずれにせよ、辻1号墳は前方部を北に向けた前方後円墳であった可能性が高いといえる。本地域においては、亀塚古墳、大在古墳に後続する首長墓であった可能性が考えられよう。

辻2号墳

平成7年度の確認調査の際、箱式石棺からなる主体部の発掘調査が行われている。今回の発掘調査では新たに主体部の西側から南側にかけて、周溝と考えられる溝状遺構が検出された。この遺構は確認調査の際に「祭祀土坑」とされたものと同じと考えられるが、今回の発掘調査により、L字形に屈曲していることが判明し、石棺の



第88図 明治21年地籍図及び調査区位置図 (1/1500)

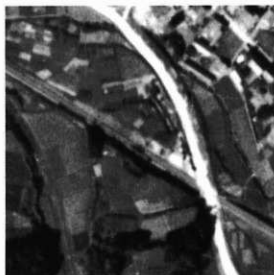
周囲を囲繞する周溝の一部であると判断された。周溝の東端部は収束しており、これより東側は後世に削平されたものと思われる。墳丘は検出できなかったが、周溝から推定すると一辺 8 m～10 m の方墳もしくは方形墳と推定される。周溝からは多量の土器が出土しており、土器の型式学的な特徴から、2 号墳の築造は 4 世紀代と推定される。

近世の遺構

1 号墳の周辺や墳丘跡、周溝埋土上、ならびに調査区南側の 2 段の平坦地では、多数の溝状遺構・柱穴が検出され、井戸跡も 1 基検出されている。これらのうち、溝についてはいずれも 18 世紀以降のものであることが判明しており、柱穴についても遺物は僅少なが、その多くは近世以降のものである可能性が高い。墳丘跡に掘削された溝状遺構 SD002 および SD003 は 19 世紀前半に埋没したものであることが確認されており、この時期までには 1 号墳墳丘の削平がかなり進んでいたものと推定される。

なお、SD002 からは焼継文字を有する磁器碗が出土している (第 91 図)。高台内に「里 嘉増」と判読できる文字が朱書きされており、この付近の近世村名 (里村) および、所有者の人名と推定される。

(高畠)



第89図 1948年撮影空中写真



第90図 1962年撮影空中写真



第91図
SD002出土遺物実測図(1/3)

XIII 大友氏館跡第6次調査

調査面積 283㎡
地域 A

調査期間
調査担当

2000.05.16～01.03.30
塔鼻光司・上野淳也・小住武史

当調査は、2地点に分けて行った（第94図参照）。調査地点の名称は、南側をA地点、北側をB地点と設定した。調査地点の面積は、それぞれA地点約205㎡、B地点約78㎡で合計約283㎡を測る。

調査区は、推定大友氏館跡のほぼ中央部分に位置する。現状で、標高が周辺地形より50cm程高い状況にある。大分市史に掲載された「戦国期の府内復原想定図」は、「府内古図」と明治初頭の地籍図を組み合わせて想定されたものであるが、この地籍図を参照すると、この高まりの部分が、周囲にコの字状の地割を巡らせていたことが把握される。実際、発掘調査における層位学的成果では、高まり部分が宅地、周囲のコの字状地割が江戸初期～昭和30年代の使用期間が見られる水田であったことが判明し、土地利用方法に差異が認められる。



第92図 調査地点位置図

A地点

A地点は、東西サブトレンチを設定し、土層観察A-A'（第3図参照）により複数の整地層を確認した。整地層群は、1m程の厚みを持ち、土層観察において、盛土整地の存在した段階が確認された。層序を概念的に整理すると、柱状図（第93図）のようになる。表土層は、攪乱層（①層）と昭和30年代の整地層（②層）により構成される。次の暗褐色砂質土層は、ソフト層（③層）とハード層（④層）に分層が可能である。ハード層は、京都系土師器皿を含む16世紀後半以降の整地層であると考えられる。茶灰色粘質土層（⑤層）は、上面で京都系土師器を出土する遺構が検出される15世紀末～16世紀前半の整地地業層（SX009）で、灰褐色砂質土層（SX038・⑥層）に関しては、茶灰色粘質土層に付随する盛土整地地業のための基盤改良地業である可能性が考えられる整地層である。茶灰色粘質土層においては、レベル上の鯉鱗（第95図 34層と45層）も確認され、盛土地業が行われていることが判明した。玉砂利を含む灰色砂層（⑦層）と灰色粘質土層（⑧層）は、整地層と、その上面に敷かれた施設と考えられ、出土土師器や青磁、備前焼燗鉢から、14世紀後半～15世紀の時期に比定される。灰色粘質土層（⑧層）に関しては、掘り込整地による地業層である可能性が考えられ、層下（標高4.4～4.2m）において検出される礫敷きの長土坑（SX015）をはじめとする遺構群（遺構内含土・⑨層）からは14世紀後半～15世紀中頃に比定される土師器群が出土している。従って、掘り込地業の上限に関しては、15世紀前半～中頃の可能性を考えられる。なお、地山面は、最も高い所で標高4.4mを測る。

A地点において、検出された遺構としては、盛土地業の下段と推定される地点において、16世紀中頃～後半の溝状遺構（SX018）と、それに切られる16世紀前半～中頃の長土坑（SX030）が確認された。これらの遺構は、区画性を示唆するものと考えられる。従って、この区画性を示す遺構の重複状況は、この盛土が16世紀中頃～後半までは確実に踏襲して使用されていることを示す。また、土層断面観察により、最古と思われる水田層直下に若干の近世遺物を含むものの胎土目段階の唐津系陶器や瀬戸美濃産陶器皿などの16世紀末葉の遺物を含む層（5・6層）が確認できるため、16世紀末葉の土層が存在していた可能性も考えられる。

B地点

B地点も、南北サブトレンチを設定し土層観察により、A地区とレベル・土質共に互換性のある整地状況が確認されている。

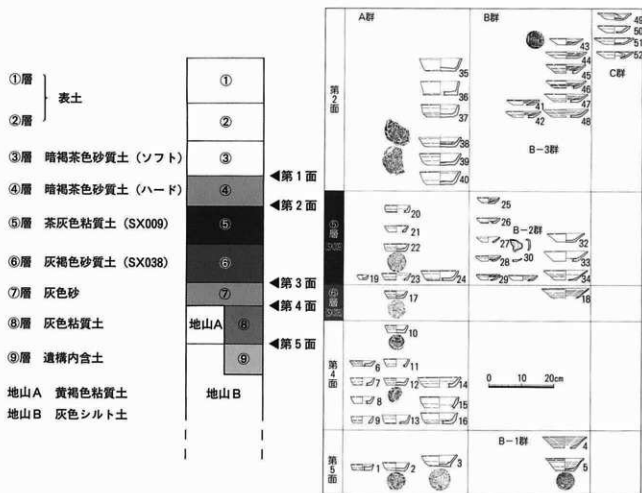
注目されるのは、B地点で確認された礫の詰った土坑群である。この遺構群は、東西を軸に3基が、南北を軸に2基とそれぞれが東西軸・南北軸に並ぶ。東西3基には、直径10cm程の楕円礫が、南北2基には長軸20～30cmの角礫・楕円礫・石臼片が詰まっていた。また、東西3基には、いずれも廃絶期に属属すると考えられる16世紀中頃に比定される京都系土師器皿の碎片が上面に薄く堆積している状況で大量に検出された。

大友氏館跡内出土土師器について

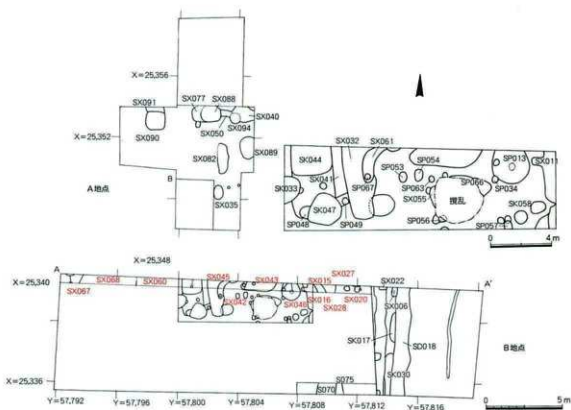
大友氏館跡第6次調査区からは、多数の土師器が出土した。その土師器群の属属する層位や文化面を層位学的に検証することによって、今後の中世土器研究に有効な指標となると思われた。勿論、整地層という遺構の性格から、特に一括性の問題に関しては留意が必要である。よって、大まかな土師器の類型化と、属属する遺構検出面の上下を明らかにすることによって、層位的関係から、年代的な相違、そして、おおまかな土器組成の変遷を明らかにすることを試みた。なお、今回の提示資料に関しては、破片資料が多く、反転復元が可能なのをできる限り提示したものである。よって、厳密な法量の計測には適さない資料が大半を占めるのが現状である。

第6次調査区における整地層遺構を、文化面との関連の中で柱状図を参照しながら整理すると、「(新) 第1面→④層→第2面→⑤層・⑥層→第3面→⑦層→第4面→⑧層・⑨層→第5面 (旧)」の順に新旧関係が把握される。

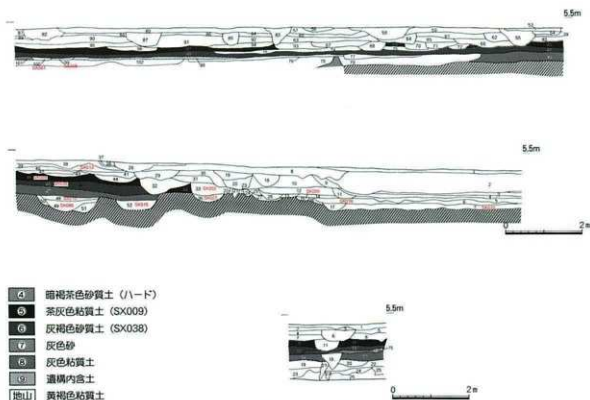
時期的には、層位関係から大きく2つの様相に区分される。Ⅰ様相は、盛土整地以後の時期に属属する出土土師器群の資料である。層位的に、SX009 (19～34)・SX038 (17・18)・SX070 (38～40)・SX075 (35～37) の資料群に分けられる。Ⅱ様相は、盛土整地以前の時期に属属する出土土師器資料である。層位的に、SX045 (10・



第93図 第6次調査区出土土師器基本層序対応表(1/12)



第94図 遺構配置図（第2面）（1/250）



第95図 A地点サブトレンチ土層図（1/100）

11・14～16)・SX060(6～9・13)・SX065とSX020(1・2)・SX015(3)・SX016(4)・SX046(5)の資料群に分けられる。SX016資料には、14世紀後半に比定される備前焼播鉢資料を伴う。これらの資料に、層位的検討を加えると、盛土整地以後に京都系土師器が出現することが確認される。以上のように、各層および文化面に帰属する土師器を層序に基づき整理することにより、ある程度の土器組成の変遷傾向を読み取ることが可能であると考へた。以下、各整地層と各文化面に帰属関係を検証する。

まず、各層位・文化面に帰属する土師器を形状に基づき整理すると、以下のように大別できる。

A群 ロクロ(回転台)成形で、在地系のものと考えられ、比較的厚手で口径：底径の比率差が開かないもの

B群 ロクロ成形で、従来の在地系のものとは異なり、比較的薄手で口径：底径の比率差が開くもの

C群 いわゆる京都系土師器を指し、手捏ねという製作技術の点において、全く異系列に列するもの

A群に関しては、鎌倉から室町時代へと連なる在地の系譜にのる土師器群であると考えられ、第4面において、やや内湾気味であった体部が、第3面前後から外反気味に開き体部下半を丸く収めるようになる。⑤層・⑥層以後は、体部下半にケズリ風ロクロ回転ナゲ調整を施すようになる。

B群に関しては、SX046→SX016→SX038→SX009→SX040・SX050と確実に器高を減ずる傾向が窺われる。B群は、器壁が薄く、その成形には熟練した工人の存在と共に回転速度の速いロクロの使用が窺われ、基本的に粘土柱から挽き出す成形法であると考えられる。なお、右回転ロクロによる成形品しか確認されないA群に対して、B群には一定量の左回転ロクロによる成形品が確認される。更に注目すべきなのは、⑤層出土B群土師器(25～34)である。技術的に同分類に属するものと考えられるが、その組成中に耳皿を持ち、複数の法量に分化していたことが窺われる。また、3面を境に、器高が減ずる傾向が見られ、⑤・⑥層以降は、器種上「皿化」を為している点が注目される。便宜上、この「皿化」を成し遂げたグループをB-2群とする。一方、A群土師器にも、器高が減じたものが少量含まれる。A群土師器が、B群土師器を意識したものと解釈することもできる。しかし、B群も内面に溝状の調整痕が確認される段階(41～48)になると、器面調整や形状に京都系土師器の影響を受けるようになる。このグループをB-3群とする。

C群土師器は、いわゆる京都系土師器を指す。京都系土師器は、儀礼に伴った、或はそれを背景とした導入が考えられ、器種上は「皿」で、法量も分化した状態で導入されたものと考えられる。しかし、5層ではB群内において、既に「皿化」、法量分化をある程度達成しつつある状況が把握できるため、或は儀礼の導入が先ずる可能性も考えられる。

以上、土器形状に基づき3群に大別した。各群単位は、今後、製作技術の系列ごとに更に細分が可能である。

年代的には、2面上層の④層からは、染付碗E群・皿E群が確実に出土するという事実から、今回の提示資料は、14世紀後半～16世紀末葉という年代幅の中で、相対的な時期決定をおこなうことができる。この年代幅の中で、大友氏館跡として機能していた期間の限定が急務である。盛土整地以後は、土師器の大量廃棄状況が確認されるため、館跡として機能していたことは確実であると考えられる。現状では、盛土整地時期を15世紀末葉～16世紀初頭の年代幅をもって考えている。問題は、それ以下の層位、第4面・第5面の機能・時期判定が肝要である。

貿易陶磁では、中国産染付碗E群が最も多く出土し、次いで染付皿E群、同B1群、白磁E1群という順序である。注目される貿易陶磁としては、小破片のみではあるが、華南三彩水注をはじめ紫三彩袋物、赤絵大皿・碗、青白磁梅瓶、青白磁合子、青白磁水注など威信財的要素の強い容器類の出土が注目される。他にも、龍泉窯系青磁碗B1・B4群、白磁E2群、中国産染付碗B・C群、中国産染付皿B2群、粉青沙器、絵唐津、折縁ソギ皿、瓦質土器等が出土している。

(上野)

XIV 大友氏館跡第7次調査

調査面積 121㎡
地域 A

調査期間
調査担当

2000.07.13～01.03.30
塔鼻光司・上野淳也・小住武史

第7次調査区は、推定大友氏館跡北限の北西部分に位置する。調査面積は、121㎡を測る。現地表面（およそ標高5.0m）より約2mの間は、旧建物の基礎の掘り上げ時等の攪乱層がみられた。遺物包含層自体は、水田の最下面（マンガン層）が標高3.8mで確認されるため、本来はこの標高で遺構の検出ができるものと考えられる。なお、地山検出レベルは、およそ標高3.0mである。

調査地点内からは、東西方向に平行して延びる6条の溝遺構が検出された（第97図）。北側から順に、SD041・SD040・SD035・SD006・SD033・SD050と遺構番号を付している。調査区西側に位置する・SD035・SD006間のSX018も溝遺構である可能性がある。

北側のSD041・SD040・SD035の3条の溝は、その切り合い状況により、南側から順次北側へ移築される状況が把握される。すなわち、(旧) SD035→SD040→SD041（新）という新旧関係が認められる。SD035は、断面V字形状を呈する。南側に地山直上に灰色土を版築状の工法で積み上げた積土遺構が付随していたようで、溝内には南側から灰色シルト質土の流れ込みが確認された。SD035は、機能停止時期に人為的に埋め立てられると同時に整地地盤が行われたようで、整地面直上でSD040に付随する積土遺構が築かれる。SD035からの出土遺物は、僅少で細片が多いため時期特定には至っていない。なお、SD006はSX018に切られることが分かっている。SD040は遺存状態が良好ではなかったが、断面はV字形状を呈する。南側に砂質土と粘質土を交互に積み重ねた積土遺構が確認されている。溝内には、積土遺構の存在する南側から砂質土の流れ込みが確認された。また、溝底には排水機能の痕跡と思われる青灰色砂が確認される。遺物は、16世紀の所産と考えられる少量の土師器が確認されている。SD041は、断面V字形状を呈し、多くの遺物と多量の礫が詰った状態で検出された。出土遺物から、最終埋没時期は16世紀後半に比定される。

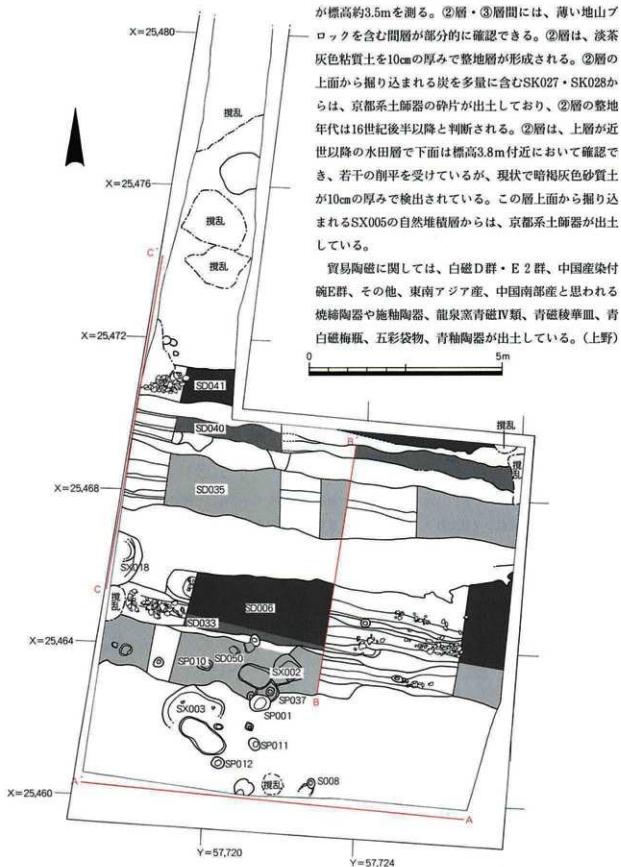
また、南側のSD006・SD033・SD050の3条の溝遺構も同様に(旧) SD050→SD033→SD006（新）の順に切り合い関係が認められる。SD050は、断面V字形状を呈する。溝内には、灰色シルト質土の堆積が確認された。機能停止時期に、人為的に埋め立てられたようである。なお、SD050は、出土遺物が僅少で、時期特定には至っていない。SD033は、上面プランの大半がSD006と重複する為、遺物が少量で埋没時期が不明瞭ではあるが、出土土師器から16世紀には存在していたものと考えられている。溝断面は、V字形状を呈する。SD006は、調査区西側で、溝が途切れる状況が確認された。溝の断面は、V字形状を呈する。埋没状況は、その上層部を砂・地山ブロックを大量に含む褐茶色土によって人為的に埋められており、下層部には自然堆積層が確認されている。溝底付近には、16世紀後半の遺物群が確認されている。

土層において連続面としては確認されていないが、北側のSD041・SD040・SD035と南側のSD006・SD033・SD050は、それぞれSD041とSD006、SD040とSD033、SD050とSD035が、断面形状や堆積状況、遺物出土状況などで共通する部分が多く、切り合いによる変遷過程においても一致する為、本来、二条で一对として機能していたことが推察される。すなわち、SD041・SD006→SD040・SD033→SD050・SD035といった対関係で変遷過程が想定される。

調査区南壁の東西セクションにおいては、3層の整地層が確認された。上層から順に、水田層、①層、②層、③層として解説を続ける。各層の検出レベルは、最上層（①層）上面が削平を受けているため暫定で標高約3.8



第96図 調査地点位置図



第97図 遺構配置図 (1/100)

XV 大友氏館跡第8次調査

調査面積 60㎡
地域 A

調査期間
調査担当

2000.08.29～01.03.30
塔鼻光司・上野淳也・小住武史

第8次調査区は、推定大友氏館跡の中央からやや西側の地点に設定した。大友氏館跡第2・5次調査地点に近接することから、井戸等の居住空間を示す遺構が検出されることが期待された。調査面積は、約60㎡である。

調査においては、造成土とそれ以前の標高約4.2m付近で検出される昭和30年代以前の水田耕作層を除いた直後に、16世紀後半～17世紀初頭の遺物を含む遺構検出面が確認された。しかし、この面においては、不定形プランのグライ層状溜り状遺構の確認ができたのみである。この所見に関しては、第2次調査の調査所見との整合性が確認できた。しかし、この面における不定形の溜り状遺構の掘り下げ時に16世紀代の土師器や中国産染付・胎土目唐津や瀬戸・美濃陶器とともに江戸時代の遺物も出土する。したがって、これらの遺物が、遺構の形成時なのか、水田開墾・耕作時の混入品であるのかを判断することはできなかった。大友氏除国後、早い段階で水田化していたことも予測されるが、この面における不定形の溜り状遺構の形成が水田開墾の影響によるものなのか、それとも水田開墾以前のものであるのかを明瞭にしてゆくことで16世紀末葉における整地地業の存在を究明出来ると考えられる。可能性としては、織豊期の整地地業層の存在が考えられる。

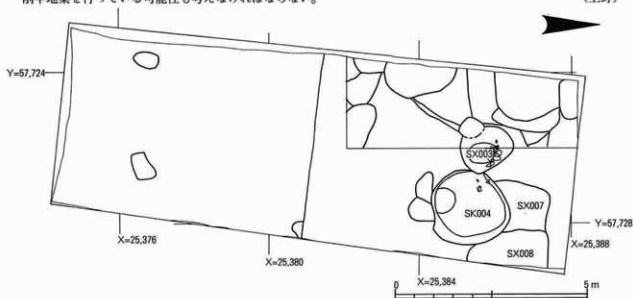
平面プランにおいてSK004を切るSK003からは、16世紀後半代に比定される京都系土師器が出土する。SK003以西は、遺構密度が高く、明瞭な整地層は確認できなかった。SK004からは、16世紀前半代に比定される京都系土師器が出土している。

今回の調査所見においては、16世紀前半と後半の遺構が同一検出面において確認されたわけであるが、この所見は、第2・5次調査の成果である、東へ行くほど整地が薄くなるという所見を支持する現象である可能性も考えられる。或は、第2・5次調査区の所見と同様に16世紀後半の整地地業を行うに当たって、基盤地業としての削平地業を行っている可能性も考えなければならない。

(上野)



第98図 調査地点位置図



第99図 遺構配置図 (1/100)

XVI 大友氏館跡第9次調査

調査面積 6.5㎡
地域 A

調査期間
調査担当

2000.02.08～00.03.30
塔鼻光司・上野淳也・小住武史

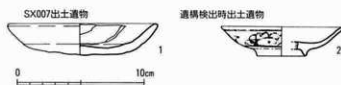
第9次調査地点は、推定大友館の北東地点に設定した。北側外郭線に近接することから、区画性を示す遺構の検出が期待された。調査としては、時間的な制限から、1本のトレンチを設定した。調査面積は、約6.5㎡である（第103図参照）。

遺構としては、調査区北側において、掘り込みを伴う砂混土層による硬化面SX004を検出した（第102図・13層）。この硬化面は、溝埋め立て時の地業痕跡である可能性が考えられる。また、硬化面に切りこむ16世紀末葉に比定される埋納遺構SX007が確認されている。SX007は、人頭大の礫の下に、京都系土師器を伏せた状態で埋納したものである。平面プラン上の切り合い関係で最古となるのは、南北に走る溝状遺構SX003である。

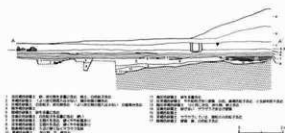
第101図1は、SX007出土の京都系土師器で、完形品である。口径は12.2cmを測る。2は、遺構検出時に検出した中国産染付である。16世紀後半代の製品と考えられる。（塔鼻・上野）



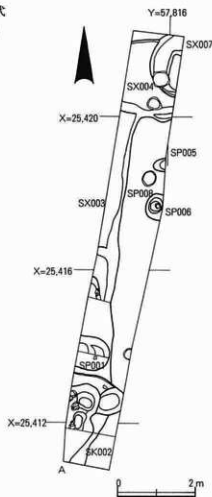
第100図 調査地点位置図



第101図 出土遺物実測図 (1/3)



第102図 調査区西側壁土層図(1/120)



第103図 遺構配置図 (1/100)

大友氏館跡
第9次調査

XVII 上野大友館(上原館)跡 第4次調査

調査面積 20㎡
地域 A

調査期間 2000.04.17～00.04.25
調査担当 河野史郎・小住武史・羽田野裕之

上野大友館(上原館)跡は、上野丘陵の東北部に位置する四方に土塁を巡らす南北156m、東西112～130mを測る方形館で、北西隅に30mほどの枳形状の虎口を有する堅固な構造が知られている。

調査は、館西面の土塁上における個人住宅の建設に伴い行われた。当該地区は、宅地造成に伴って既に土塁が消失していたことから、トレンチによる断面調査を行い、造成時の削平の影響を受けなかったであろう土塁基底部の土層断面図の記録を目的とした。

調査の結果、土塁の基底部は、想像以上に良好に残存しており、複数の積み土の単位の存在や、土塁下層からは、古代の遺物群を伴う包含層が確認された。

以下、特に土塁の積み土に関する所見を中心に調査の概要を記す。

土塁の積み土の単位は、①黄灰色粘土系の土による斜め方向の積み土で、拳大から人頭大まで大小の礫が混入する一見に他の2つの積み土との区別が可能なもの。②黒色土と黄灰色粘土による版築状の並行積み土。③同じく黒色土と黄灰色粘土による斜め方向の積み土。大きく3種存在する。この中で積土②・③については、共に堅く締まった積み方や、上面に黄灰色粘土(地山土)下面に黒色土(耕作土)が配される状況等共通の積み土が観られることからほぼ同時期の土塁の積み土の違いとみることができる。一方、最上面に観られる①については、比較的荒く、積土②・③を覆うかたちで存在することから時期を遡った土塁の改修痕跡と考えたい。

土塁積土中より出土した遺物については、概して少なく時期を決定づけるような遺物は無かった。唯一、積み土③中より青磁碗が出土している。この青磁は、上田分類のB-IV類にあたるもので、やや幅広の線描蓮弁文に、蓮弁剣頭が蓮弁としての単位を意識しないで施される。

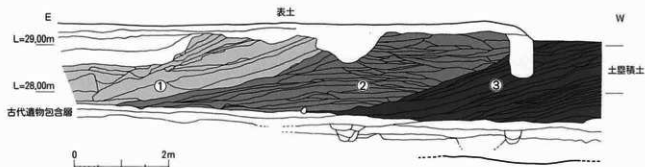
以上、今回検出された土塁の積み土の時期については、積み土①については、平成11年度に行われた調査所見から16世紀後半に、積み土②・③については、青磁碗の年代観から15世紀後半～16世紀前半代と考えたい。(河野)



第104図 調査地点位置図



第105図 積み土③中より出土した青磁実測図 (1/3)



第106図 土塁土層断面図 (1/80)



第107図 上野大友館(上原館)跡 全体地形図及び調査地点位置図

上野大友館
(上原館)跡
第4次調査



第108図 土壁土層断面写真 (①②積み土)



第109図 土壁土層断面写真 (②③積み土)

XVI 上野大友館(上原館)跡 第5次調査

調査面積 地域 A	60.70㎡	調査期間 調査担当	2000.11.27～00.12.12 讃岐和夫・後藤典幸
--------------	--------	--------------	----------------------------------

昨年度に引き続き、平成12年度公共下水道中央処理区上野丘西2637号線汚雨水雨施設工事に伴う発掘調査である。

この館跡は、上野台地上の北端部に南北156m、東西112～130mの四方を土塁で囲まれ、北西隅に櫓形状の虎口をもつ構造のもので、その外側には空堀が備わっていたことが周知されている。

しかし、調査歴が無いまま、平成4年度に、初めて南西隅の土塁を公園化するための調査を実施した。

調査については、土層断面精査の調査であったが、土塁の幅17mで高さは構築面から現状2.5mの規模を確認した。

土層の観察によれば軟質黒色から土塁の丁寧な版築がみられ版築内に礫を混入する層もあった。

昨年度の調査では、3ヶ所の調査区を調査した。まず、東西土塁地区の調査は掘部であるが土塁の痕跡を示す斜堆積が確認された。つぎに、南北土塁地区は土塁の土層断面が確認され、土塁の構築方法は掘り込んでから盛土を行う形状をとっていたことが確認できた。また、館内部地区の調査では、まとまった柱穴群が確認されており、柱穴内に扁平な石を礎盤として使用しているものなどがあり、建物跡の性格を考える上で興味深いものになった。5世紀初頭～前葉にかかわる古墳時代の遺構（溝状遺構又は住居跡）も確認されている。また、西側土塁上に2軒の個人住宅を建築するため調査を実施した。

以上のように過去4回の調査で土塁構築方法や館内部の様子を知る上で貴重な資料を得ることが出来た。

今回の調査は、館内北側の調査で南北道路北側（幅95cm・長さ46m）部分を第1調査区、東西里道東側幅（85cm・長さ20m）部分を第2調査区とした。特に狭い調査区であったが、調査面積は約61㎡程を発掘調査した。

第1調査区では、水道管やガス管等の埋設掘削溝のため、大きく改変されており、遺構の遺存状況は非常に悪かったが柱穴群と北側隅に土塁の基礎と思われる内郭部の遺構を確認した。

土塁遺構は、既に上部は削平されており、コンクリート舗装道路面から約0.3m～0.4m直下で遺構を確認された。台地北端部より約18mほど南側へ標高27.90mの位置に40cm前後の大形自然礫を使用した、石垣状に前面を整え野面積みに積み上げており、土塁内部の土層堆積は多量の自然礫を混入した黄褐色系と黒褐色系の粘質土を交互に10層ほど版築状に積み上げられていた。この基底面は標高27.60mの平坦面を示しており、前回調査の掘り込み地業を行い土塁を造る方法とは異なる様相を示している。

遺物については、小破片のため時期の確定は出来なかったが、幸うじて青磁片が1点出土しており、この遺物から15世紀～16世紀に比定される時期と思われる。

また、この土塁遺構直下のほぼ同じ位置で、掘り方が東西方向である、古代の溝と思われる遺構が確認されたので、一部遺構の掘り下げを実施した。

この遺構の掘り方の状況は、北側に向かって掘られており、黒褐色土層が堆積しており、この中より土師器の杯・高台付杯・須恵器の大形甕片・緑釉陶器片（京都系）等が出土した。遺物からみて時期の設定は、9世紀後半～10世紀に比定されるものであった。

その他の遺構としては、狭い調査区の中央付近から南側の方に柱穴群が広がっており、建物跡等が窺える。

第2調査区では、東側の方に自然地形が傾斜しており、建物跡の存在が窺える柱穴群については調査区の西側

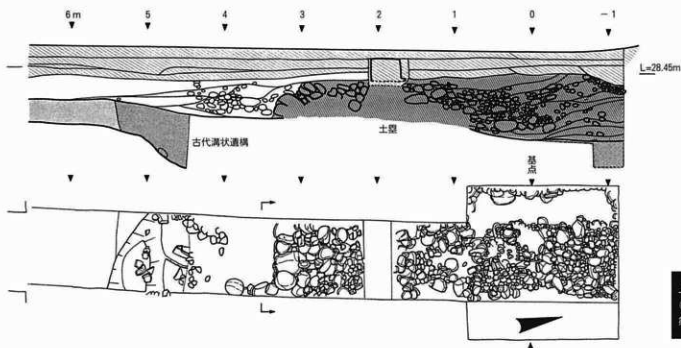


第110図 調査地点位置図

に集中していた。また、調査区の中央付近では、平面形が楕円形を呈する土坑が確認できた。土坑の規模は、狭い調査区のため全容は不明であるが、短軸（東西）の幅1m・深さ約0.2mを測る。この遺構からは、古代の土師器片が1点出土した。

以上のように、館の構築以前の古代の遺構が存在しており、また、上野丘陵上の竜王細遺跡（旧あけぼの学園跡地）で豊後国府と関連づける遺構・建物跡が確認されており、古代の遺構の広がりを知ることが出来る。

（讃岐）



第111図 第1調査区北側土塁および古代溝状遺構実測図 (1/50)



第112図 第1調査区



第113図 第2調査区

上野大友館
（上原館）跡
第5次調査

XIX 中世大友府内町跡第6次調査

調査面積 1,600㎡
地域 A

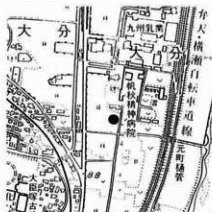
調査期間 2001.01.19～01.04.30
調査担当 塔鼻光司・坪根伸也

今回の調査は、葬祭場建設に伴う事前調査として実施した。昭和62年に作成された「戦国時代府内復興想定図」によれば、今回の調査対象地域は徳治元（1306）年建立された推定万寿寺跡の南面地域に位置している。

調査の結果、奈良時代から中世末期さらには近世におよぶ遺構・遺物が確認され、現状で5段階におよぶ遺構の変遷を想定することができる。以下には各段階の概要について略述する。

第Ⅰ期 8世紀から9世紀

井戸跡1基、土壇1基を確認した。井戸跡（SE297）は上部に簡便な石組みを行い、水溜部に曲物と思われる筒状の木製品を埋置する構造をもつ。井戸跡、土壇とも8世紀後葉から末葉に比定されるものであるが、出土遺物の中には、中世遺構埋土に混在する状況で、越州窯青磁碗底部破片、9世紀に位置づけられる土師器環などが一定量出土しており、近隣に当該期の遺構が存在する可能性は高い。これまでの中世大友城下町跡の調査においてもこれらの時期の遺物の出土は知られてが、遺構は確認されておらず、今回の発見が初例となった。



第114図 調査地点位置図

第Ⅱ期 14世紀

一辺約30mの方形区画が形成される。この区画の北辺に位置する溝状遺構（SD043）は現深度2.0m、幅3.0mの規模を有し、断面V字形を呈する巨大なものである。このSD043は基盤土層が砂質土であることもあり、その恒常的維持は困難であったと考えられ、埋没するたびに掘り返されている。そのうち溝様態としての改修は行われないようになり、連続した長土坑（SX023・SX035等）を配置する形状に変化する。

この段階の特徴的なものとして、SX270をはじめとする区画内南東部分の大規模な掘り込み跡がある。これは、同一地点を数十回掘り返し、埋め戻すというもので、その具体的な性格については現状では不明であるがランダムな掘り戻し、土取りを目的とした掘り込み跡である可能性を想起させる。この段階の出土遺物が最も多く、土師器環・小皿・土師器鍋・瓦片（鬼瓦含む）・古瀬戸（おろし皿・瓶）・輸入陶磁器（青白磁梅瓶・龍泉窯青磁碗1～5類・枢府系白磁碗）・滑石加工品・畿内産土師器・常滑焼など多彩な内容を有している。特に広域流通品が多い点が注意される段階である。



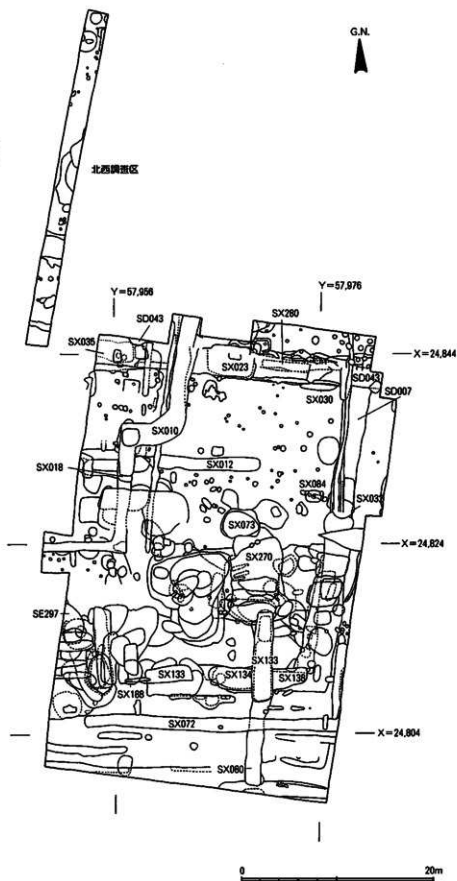
第115図 調査区全景（北方向から）



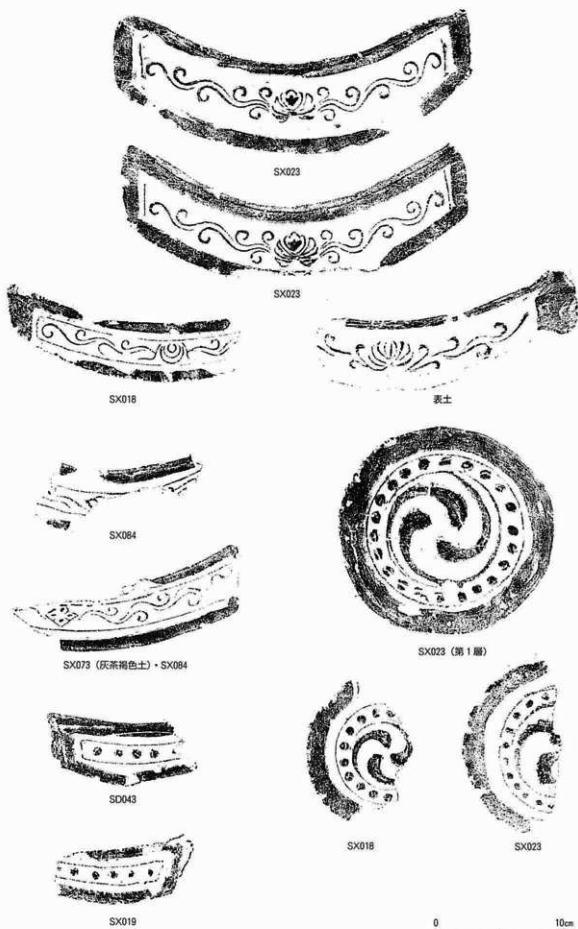
第116図 井戸跡（SE297）完掘状況

第Ⅲ期 15世紀から16世紀中葉

SX012・072・133・134・138などが相当する。



第117圖 遺構配置圖 (1/400)



第118圖 出土瓦拓影 (1/3)



第119図 瓦出土状況



第120図 溝(SD010)完掘状況

基本的な地割プランは前代のものを踏襲する。調査区内には、東西幅約20mの区画が設けられ、これを南北方向に区切る小区画が設けられる。この区画も東西方向の区画プランについてはⅡ期で認められたものを踏襲する。第Ⅱ期に機能していたSD043は完全に埋没している。

第Ⅳ期 16世紀後葉から末葉

遺構埋土に京都系土師器皿を内包するようになり、これまでの区画を大きく改変する段階である。深さが2m近くあるような深い区画溝を掘削する。溝の配置から想定すると幅約12mの空間が、北上するに従い段階的に幅を狭めていくような状況を取捨することができる。この段階の遺構埋土はほぼ共通した特徴をもち、暗茶褐色土を基調として、小礫を多数含むものによって構成される。埋土観察から、最終段階には瞬時に埋め戻された状況が想定されるが、当該遺構も砂質性の強い基盤土に掘り込まれていることから、遺構の恒常的な維持には困難が伴う状況にあったことが想定される。堆積埋土の状況からは流水、あるいは滞水した痕跡は認められず、溝底レベル、遺構の非連続性などから水路等の用途は想定し難く、また、溝の断面形状が葉研状の屈跡を想起させる点は、その機能に高い防制性を想定させるものである。所産時期に関しては堆積埋土内出土遺物から16世紀末葉と推定され、溝の推定機能とともに、この溝掘削経緯に天正14（1586）年の豊薩戦争との関連が留意される。

出土遺物には、京都系土師器皿・中国青花片・ベトナム陶器蓋・朝鮮陶磁・備前焼薬研・備前焼播鉢・不明青銅製品・朱書き文字入り天目碗（「大□□」と判読）・茶入れ片・石臼片などがある。

第Ⅴ期 18世紀中葉から後葉以降

第Ⅳ期に連続すると考えられる遺構・遺物は認められず基本的に江戸時代中期まで空白期間が続く。江戸時代中期以降は水田化が進んだとみられ、数枚の水田層から当該期の遺物の出土が認められる。

以上が今回の調査における主要な成果であるが、各期の時間変遷の中で注目されるのは、戦国末に認められる都市プランの大枠が、少なくとも、今回の調査対象地点でみ限り、遅くとも14世紀段階には成立していた可能性を指摘できた点をあげることができよう。ただし、「府内復原想定図」で推定されている万寿寺の南限は今回の調査地点の北方に位置しており、創建時期に近接する東西溝（SD046）が今回の調査地点で確認されている点を考慮すると、基本的な地割を踏襲しながらも寺域の縮小あるいは移動があったと推定されよう。

出土遺物に関しては、その大半を瓦が占め、今回の調査地点が推定万寿寺隣接地であるという位置的な位相をよく示している。瓦の多くには被熱痕を認めるものも多く、火災等による被災に伴い廃棄されたものと推定される。調査地から瓦とともに出土する多くの土製磚もまた、出土瓦の帰属する建物跡に付随するものであると考えられる。

（坪根）

XX 府内城・城下町跡第14次調査

調査面積	330㎡	調査期間	2000.08.07～00.10.09
地域	A	調査担当	讃岐和夫・池邊千太郎・塩地潤一・河野史郎

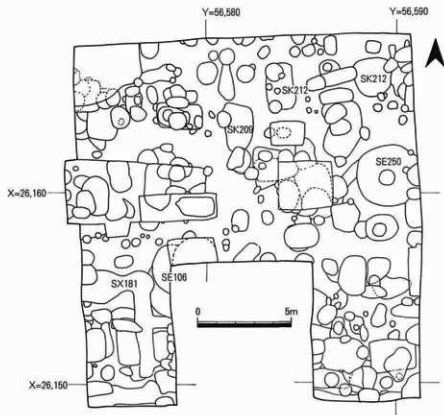
調査の結果、近・現代の旅路跡に関わる建物礎石から、近世府内城下町の「竹町」及び「笠和町」の関連遺構、更に城下町形成以前となる16世紀後半の溝又は自然地形の落ちと考えられる遺構までの複数の文化面が確認された。

特に、近世府内城下町の「竹町」及び「笠和町」の関連遺構については、江戸初期～幕末に至る複数時期のものが確認されており、各文化面からは、建物遺構・井戸跡・埋掘遺構・集石遺構・火災処理遺構等が検出された。中でも特に火災処理土坑については、寛保3年の大火に比定される火災処理土坑をはじめとする複数回に亘る火災の痕跡が認められている。今後、出土遺物等の検討により、これらの火災処理遺構と文献上の火災記録との整合作業が必要となる。更に、近世府内城下町形成段階の状況を示す、17世紀初頭段階の遺構も検出されている。このことは、大分市史に記載されている「竹町」は、当初公共用地の保留地となっていたとの記述に対して、ある程度の遺構が形成されていた事実を示すものであり、注目される成果である。

近世城下町以前となる16世紀後半の遺構については、溝又は自然地形の落ちと考えられる遺構が確認されているが、中世段階の府内の中心部である現在の元町・錦町・顕徳町一帯の状況が近年の発掘調査の成果で明らかになっている中で、当時の笠和郷となる中世府内町の周辺部一帯の状況を知る上で貴重な成果となっている。



第121図 調査地点位置図



第122図 遺構配置図第1面 (1/200)



第123図 第1遺構面完掘状況



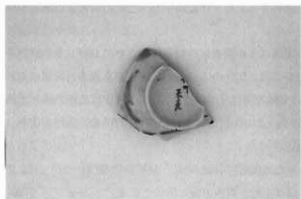
第124図 最終遺構面完掘状況



第125図 SE250土層断面



第126図 SK212土層断面



第127図 S212出土遺物
「竹町米差」



第128図 S719出土遺物
「安政十二歳 一久 庚申二月下旬」

出土遺物に関しては、「竹町米差」との焼継文字が確認される肥前磁器の他大量の近世陶磁器類、16世紀後半～末段階の京都系土師器等がある。特に前者については、「竹町」の比定作業は勿論、焼き継ぎ職人の動向を知る上で貴重な資料となった。後者については、中世末～近世へと変遷する京都系土師器の形態を知る上で貴重な資料となった。この他中世末段階の輸入陶磁器類、近世初頭の国産陶磁器類等今後の遺物整理の成果が期待されるところである。

(河野)

XI 中安遺跡第3次調査

調査面積	6000㎡	調査期間	2000.04.17～2000.06.13
地域	F	調査担当	讃岐和夫・姫野公徳・宮田 剛・奥村義貴・田中 貴

当遺跡は、大分市の東部大在地区にあたる、標高40mほどの城原丘陵上に所在している。調査は、都市計画道路の横塚～久土線建設に伴うもので、平成10年11月から途中、一時中断しながら平成12年6月で調査を完了した。調査区は道路路線のため、東西に長く約6,000㎡について調査を実施した。その結果については、弥生時代から近世までの複合遺跡であることが、遺構・遺物等から確認された。

当遺跡で代表的な遺構としては、古代の評価から郡衙に移行する時期の7世紀後半から8世紀後半にかけての大型掘立柱建物跡群である。これらの建物跡は大きく3時期の変遷が認められた。

ここで特筆される遺構としては、第2期である8世紀初頭の大型掘立柱建物跡群の並びと大型の井戸跡である。遺構は西側に四脚門を持ち南北40m以上、東西30m以上でロの字形に囲まれた官衙的な遺構配置を持つもので、海部郡衙の様相を示していることは重要な所見である。

これら古代の遺構については、すでに前年度の年報で概要報告をしているところであるため、今回の報告については、掘り下げを実施した古墳時代の竪穴住居跡の年報概要報告である。

竪穴住居跡は完掘していないものと、6基の不明なものも含めて約30基ほどが調査区の西側と一部東側に集中して所在していることが確認された。竪穴住居跡の遺存状況は後世の削平や古代の整地等で良好ではなかった。

竪穴住居跡群の時期変遷については切り合い関係や出土遺物等により6世紀前半～7世紀以降の4段階について判断できた。

最初に6世紀前半の竪穴住居跡群の所在数については、7基ほどが調査区西側で確認されており、その住居跡群の一部を把握してみると、まずS1588住居跡の規模については、5.4m×5.6m(30.24㎡)を測る。形状は方形を呈している。住居跡内は4本柱で壁溝を廻らしている。主軸方向はN-24°-Wである。遺物は須恵器環・土師器甕・小形丸底壺・紡錘車等が散乱した状況で出土している。この住居跡は6世紀中頃のS510住居跡と切り合い関係がある。前半の住居跡の中では大型の規模であった。

小型の住居跡については、8世紀前半の大型井戸で切られたS630住居跡がある。住居跡の規模については、3.8m×4m(15.2㎡)を測り、形状は方形を呈している。ほぼ主軸を東西方向に向いている。

以上のことから、6世紀前半の住居跡群について、まとめてみると住居跡の一辺については平均で5m以下の大きさを測る。住居跡内部については炉跡を施している。遺物については住居跡内に廃棄した状況で出土している。また、前半の住居跡群の配置状況には特徴があり、直径40.0mの大きさで中央部に空間地を持ち弧を描く様に住居跡が配置されている様子がみられた。

次に6世紀中頃の竪穴住居跡の所在数については6基ほどが確認されている。S1245住居跡の規模については、5m×5m(25㎡)を測る。形状は隅丸方形を呈している。住居跡内には4本柱で壁溝を廻らしている。主軸方向はN-5°-Wである。遺物は土師器甕・環等が廃棄された状況で出土している。この住居跡の規模とはほぼ内容が同じS262住居跡も存在している。

また住居跡の規模が小型化するS443住居跡では、4.2m×4.1m(17.22㎡)の規模を測る。形状は隅丸方形を呈している。住居跡内は4本柱で壁溝を廻らしており、主軸方向はN-43°-Wである。南西側の柱間には長方形(1.6m×0.6m)の灰濁土坑跡と思われる遺構が掘られていた。これとはほぼ同じ規模をもつ住居跡としては、S5



第129図 調査地点位置図

10住居跡がある。この住居跡はS1588住居跡と切り合い関係にある。切り合いのある床面一部を貼り床にして平坦面を保っていた。また2基分だけが調査区東側の離れた場所に所在しており、完掘したS870住居跡の規模については、 $4.1\text{m} \times 3.7\text{m}$ (15.17m^2)を測る。形状は方形を呈している。主軸はN-50°-Eである。住居跡内は4本柱で壁溝を廻らしていた。

6世紀中頃の住居跡の特徴をまとめてみると、一部を除き6世紀前半の住居跡配置を踏襲する形で弧を描きながら配置している。住居跡の形状は大方のものが隅丸方形を呈している。住居跡内は4本柱で壁溝を廻らしており、灰溜土坑が施されている。遺物については廃棄された状況で出土していた。

6世紀後半の竪穴住居跡については、調査区西側の標高の高い場所で弧を描きながら等間隔で4基ほどが所在している。まづ最初に大型の住居跡であるS445住居跡については、 $6.2\text{m} \times 6.4\text{m}$ (39.68m^2)を測る規模である。形状は方形を呈している。主軸方向はN-60°-Wである。住居跡内は4本柱で壁溝を廻らしており、北側部分には間仕切り跡の溝が掘られていた。

また北西壁面側の中央部付近で備え付けのカマドが設置されており、カマドの規模については、焚口部の入口には幅10cm~15cmの角柱を立て両側の袖部として使用している。焚口の幅は約50cmを測る。カマド内部は支脚を施した痕跡がある。焚口部分の床面は非常に硬く焼締っており、常時使用されていることが窺える。

またS155住居跡では建て替えを行っており、住居跡の規模が $6.4\text{m} \times 6.6\text{m}$ (42.24m^2)の大きさから $6\text{m} \times 6.4\text{m}$ (38.4m^2)と南西壁面をそのままにして北東側を縮小していることが窺える。北西壁面側には備え付けのカマドが設置している。間仕切り跡の溝も掘られていた。次にS990住居跡については、調査区の制限により南側部分が完掘出来なかったため、住居跡の残り部分についての遺存状況を確認すると、住居跡の南西壁面をそのままにして北東壁面部分を 4.7m から 5.5m へと拡張していることが窺えた。この住居跡の形状は方形を呈していると思われる。主軸方向はN-37°-Wである。住居跡内は壁溝を廻らしており、4本柱と思われる。壁溝内部には小杭を打ち込んだ小さい穴の痕跡が残っており、壁等を立てるための杭と思われる。住居跡の北西壁面部に備え付けのカマドを設置している。カマドについては、焚口の入口部には緑泥片岩を両側に袖石として使用しており、カマド内部の支脚部分には土師器の丸底蓋を転用していた。カマドの周りに土師器の甕形土器が集中していた。

この住居跡とほぼ同じ規模と思われるS444住居跡については、 $4.6\text{m} \times 5.6\text{m}$ (25.76m^2)の規模を測る。形状は方形を呈している。主軸方向はN-12°-Wである。住居跡内には4本柱で壁溝を廻らしており、東壁面部分が一部 0.8m ほどが拡張されていた。

以上のように、6世紀後半の竪穴住居跡の特徴については、西側と北西側の壁面部分に備え付けカマドが施設されている。住居跡の規模については、大型化しており、この時期に集中して住居跡の建て替えが行われている。遺物も多く廃棄された状況で出土していた。

7世紀以降の住居跡群については、6世紀代の住居跡群の様に弧を描きながらの配置状況とは全く異なる様相がみられた。住居跡の配置状況は調査区の西側に2基、中央よりに2基、東側に6基が散らばるように所在していた。

住居跡の規模については、平均的に一辺が $3\text{m} \sim 4\text{m}$ 前後 ($10.89\text{m}^2 \sim 13.69\text{m}^2$)の形状は小型の方形を呈している。また主柱については2本柱であった。

7世紀以降の住居跡は小型化しており、主柱は4本から2本へと変化している。

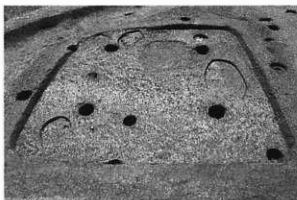
以上の様に4時期の竪穴住居跡は7世紀前半で姿を消しており、その後は掘立柱建物跡群へと移り変わっており、規格制のある並びを持つ評面・郡面へと変遷していくことが窺えた。

その他の遺構については、土墳墓3基（古代1・中世2）、中世の掘立柱建物跡14基、近世以降の溝状遺構等がみられた。

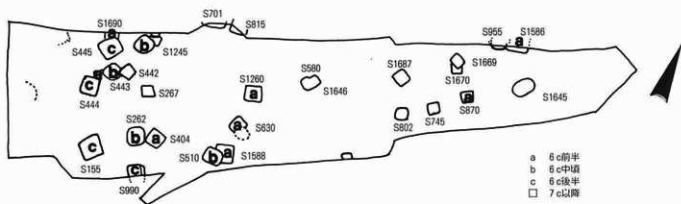
（遺域）



第130図 S510住居跡（南方向から）



第131図 S870住居跡（北方向から）



第132図 住居跡配置図と全景空中写真



第133図 住居跡遺構全景（南西方向から）



第134図 S1588住居跡（南方向から）



第135図 S1425住居跡（南方向から）



第136図 S445住居跡（北西方向から）



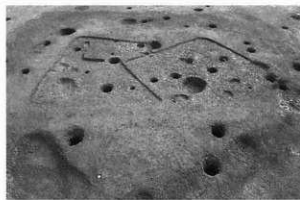
第137図 S445住居跡 カマド状況（南東方向から）



第138図 S990住居跡（南東方向から）



第139図 S990住居跡 カマド完掘状況（南東方向から）



第140図 S1669・1670住居跡（北東方向から）

XII 中安遺跡確認調査

調査面積 約62㎡
地域 G

調査期間 01.01.09～01.01.17

調査担当 玉永光洋・羽田野達郎・佐藤孝則

調査地は、大野川右岸に広がる標高約42mの丹生台地域原面にあたり、海部郡衙政庁跡に比定される中安遺跡に位置する。今回は、平成12年度に実施した調査で確認した真南北方向にL字状に配置され建物跡群の南北建物跡群の並びに接続する北側隣接地点にあたる。

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認調査を平成13年1月9日～17日に行った。表土から39cm下の茶黄褐色土（地山）で遺構面を確認し、土坑、建物跡の柱穴、近世の溝状遺構、柱穴群を検出している。8世紀後半の遺構群、整地層は確認出来ていない。

以下に主要遺構の概略についてまとめる。

・建物跡の柱穴

一基だけ完結していなかった建物プランを埋める柱穴で、柱掘り方は直径1mを測り、柱根は20cmを測る。また、前回の調査では真南北方向の櫓列を挟む、3棟の大型建物跡が確認されていたがこの建物跡に続く、櫓列・大型柱穴群は確認されていない。このため大型建物跡の一連の並びは、当調査地点で終わることが考えられる。

・土坑（SK001）

長軸の長さが1.9mの方形プランである。埋土は、1層が茶色ブロック土を含む褐色土層で、2層は、茶色土層であった。深さは、20cm程で、非常に浅い遺構であった。遺物は、1層から8世紀前半に比定される須恵器の蓋、土師器片が出土している。また、この遺構は、時期が前回調査で確認されたL字状配置の建物跡群の東面・南側コーナー部分内側で見つかった土坑（SX550）と一致し、両遺構とも方位が同じ軸線上であることが認められる。

調査の結果、東面の南北建物群の並びが続かないことが確認出来た。そのため、郡庁規模が40m前後であったことが推測される。また、興味深い所見として、当調査地から西側方向に建物が展開することを前提とすれば、両土坑がコーナー部分に作られ、相似関係をとることが考えられる。しかし、コの字状配置かもしくはコの字状配置になるのかは、西側の調査区外に関係する事項になるため、現調査では特定出来ない。今後の周辺調査の進展が待たれる。

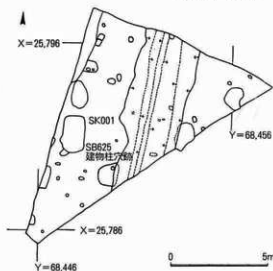
（羽田野・佐藤）



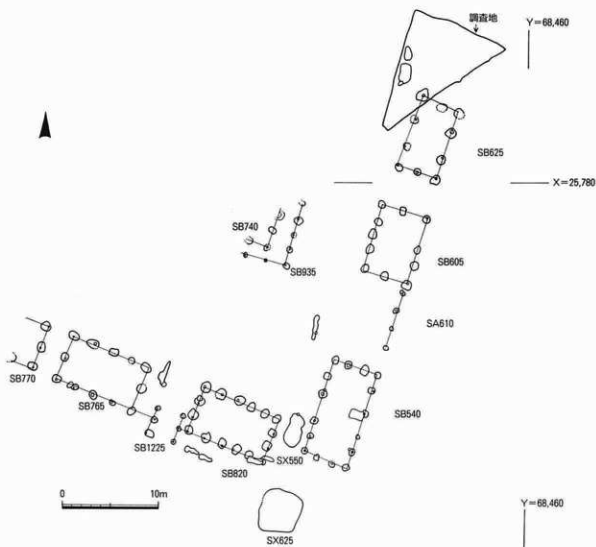
第141図 調査地点位置図



第142 調査区全景（南方方向から）



第143図 遺構配置図（1/200）



中安遺跡
確認調査

第144図 確認調査後の第Ⅱ期遺構配置図 (1/400)



第145図 SK001検出状況(北方向から)



第146図 SK001遺物出土状況

ⅩⅧ 南金池遺跡第2次調査

調査面積	約820㎡	調査期間	01.01.29～01.03.31
地域	A	調査担当	姫野公徳・高島 豊・宮田 剛

今回の調査は、大分駅周辺総合整備事業の土地区画整理事業に伴い実施したものである。調査地は、上野台地の北側に広がる沖積地の東西約100m、南北70mほどの微高地上に存在する。この微高地は周囲を旧河川跡などの沖積低地に囲まれた島状の部分で、東側には谷を挟んで大友氏館跡のある微高地が存在する。

南金池遺跡第1次調査は、今回調査区の約100m南側にあり、平成11年度に調査されている。

南金池遺跡の東側にはデウス堂跡や大友氏館を含む中世大友府内町跡、南側台地上には上野遺跡群、東南約1.8kmには弥生時代中期を中心とする若宮八幡宮遺跡などが存在する。

調査は、対象地区を廃土置き場の関係から便宜的に北側と南側にほぼ二分し、南側を先に掘り上げた後に埋め戻し、北側の調査を行った。南側・北側共に重機により水田床土層まで除去した後に遺構検出を行い、以下は手掘りで上層の遺構を掘り下げた後、下層遺構の検出・掘り下げを行った。

調査地内は東側が低く、近世以降水田として利用されていたものと考えられる。土層観察では3枚の水田層があり、最下層の水田床土及び水田耕作に伴う溝状遺構（SD004・015）の下層からは18世紀後半以降のものと思われる陶胎染付片や寛永通寶（新寛永）などが出土した。溝状遺構は数回の掘り返しが観察されるが、大部分はおおむね2層に分層でき、下層は3枚目の水田層、上層は2枚目の水田層にそれぞれ対比できそうである。

3枚目の水田床土層を除去した後にその下層から、調査区東側を中心に南北を基調とする平行する溝状耕作痕が検出された。明確に遺構に伴う遺物がほとんどないが、中世期に遡るとされる糸切り土師質土器破片や瓦質土器片などが少量出土した。水田化される以前の畑耕作痕と思われる。なお、その南北方向は水田化されても基本的に踏襲されている。

3枚目水田床土層の下位には、調査区西側の標高がやや高い部分を中心に古代の包含層が認められ、その下位には砂質の安定地盤が存在する。古代の主要遺構には、焼土・炭混じり土のある土坑（SX066）とそれに隣接する土坑（SX067）、井戸跡（SE077）、須恵器灰蓋や土師器環などが集中して出土した土坑（SX093）、刀子が出土した土坑（SX134）などがある。

焼土・炭混じり土のある土坑（SX066）は南側調査区の中央付近に位置し、北側を掘削し切られているが、長軸1.0m以上、短軸1.0m、深さ0.1mほどの平面略楕円形を呈すと思われる。上部はやや削平されていて、埋土は炭化物粒や灰を多く含む黒～黒褐色土である。土坑底部には被熱痕跡は認められなかったため、焼土・炭化物粒・灰混じり土はこの場に廃棄された可能性がある。SX066埋土中や隣接



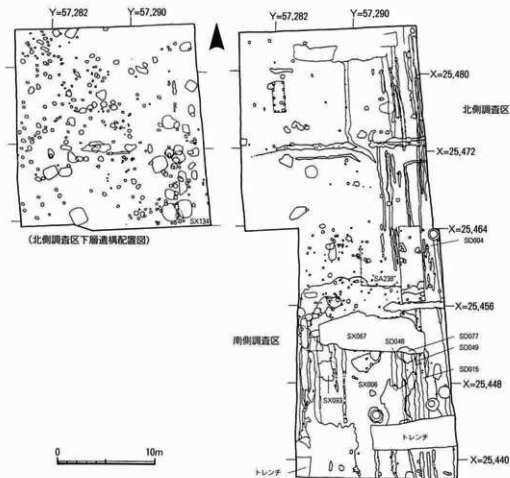
第147図 調査地点位置図



第148図 南側調査区全景（南方向から）



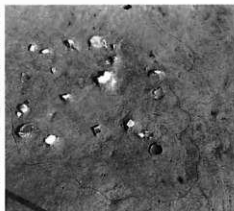
第149図 SE077（東方方向から）



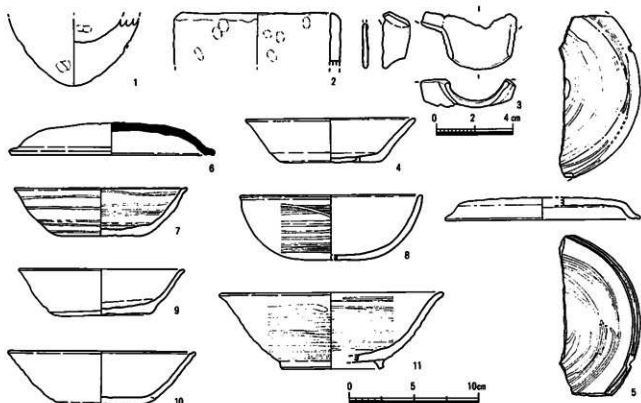
第150図 遺構配置図 (1/400)

するSX067埋土中とその周辺からは、総重量約2kgほどの製塩(焼塩)土器破片が出土した。多くは円筒形を呈し、口縁を外傾させ、底部はやや尖る丸底の器形で、二次被熱痕跡が見られるものも多く、小破片化している(第152図1・2)。内面には布痕が見られるものもあるが、明瞭に観察されない個体の方が多い。製塩土器の他には企救型甕や土師器環や環蓋破片などが出土し、共伴した環などから8世紀末～9世紀前半頃と比定できる。またSX066とSX067の上部包含層からは青銅製の注口部と思われる破片が出土している(第152図3)。

古代の井戸(SE077)は南側調査区の中央やや東よりに位置し、現代の擾乱および南北方向の溝状耕作痕(SX047・048)に切られている。およそ長軸1m、短軸0.8m、検出面からの深さ1.15mの規模で、水溜部の上部に58×49×16cmの大きな石が捨てられていた。この石は上部を平坦に整えられており、礎石建物の礎石と思われる。井戸廃棄時に投げ込んだものであろうか。また礎石?のやや下位からは布目痕のある平瓦片も出土している。水溜部は割り抜きの井戸枠を二重にし、その外側に半周分だが曲物で囲んで、さらに外側には大きめの板材で方形に囲ってあるという丁寧な造りのものであった(第149図)。この井戸の廃棄時と思われる土層中出土の土器は土師器高台付甕で、8世紀末～9世紀初頭と思われる(第152図4・5)。



須恵器環蓋や土師器環などが集中して出土した土坑(SX093)はSX 第151図 SX093土坑検出状況(南方向から)



第152図 出土遺物実測図（3は1/2、その他は1/3）

066・067の西南側にあり、長軸2.20m、短軸2.10m、深さ0.16mの不整形を呈す土坑で、その時期は須恵器坏蓋（第152図6）から8世紀末～9世紀初頭頃と比定できる。

刀子が出土した土坑（SX134）は北側調査区の南東隅付近にあり、長軸1.80m、短軸1.50m、深さ0.25mの隅丸長方形を呈す土坑で、西側部分から鉄製刀子が出土した。土器は小破片しか出土していないが、おおむね8世紀末～9世紀前半代にほぼおさまるものと思われる。

そのほか調査区北西部を中心に古代の柱穴群が検出されたが、掘立柱建物などは立たなかった。柵列（SA238）は中世以降の耕作痕や近代以降の溝状遺構などと基本的に方位が一致するが、伴う遺物がないこと、内部に明確に同時存在と思われる施設が検出されなかったことから時期は不明である。また遺構は検出されなかったが、縄文時代晩期のものと思われる粗製深鉢の破片が数点出土している。周囲を旧河川などの低地に囲まれているが、該期には微高地上は比較的安定していたことが分かる。また、古墳時代後期のものと思われる土師器片も数点出土している。

遺跡を集中して使い出すのは古代からで、出土遺物の大半は8世紀末～9世紀前半代にほぼおさまる。建物跡そのものは検出されなかったが、井戸埋土中から礎石の可能性が高い石や布目痕のある平瓦片が出土した。調査区の周囲に礎石建物の存在が想定でき、また井戸水灌部の構造も当時としてはかなり丁寧なものと思われる。製塩土器がかなり多量に出土したSX066は製塩関連遺構の可能性があり、それを中心に焼塩土器がまとまって出土している点などからも、周囲に官衙的もしくは宗教的性格を持つ施設が存在した可能性がある。微高地上でも西側のより高い部分などを、今後この周囲を調査するときには十分注意すべきであろう。

また時期の明らかな遺構は検出されなかったが、中世に属する遺物も若干出土している。調査地東側のより低い旧河道を望む部分では遺物からは中世末頃には耕地化し、畑として耕作され、18世紀後半以降に水田化された様である。

（姫野・宮田）

XIV 長迫遺跡

調査面積 720㎡
地域 A

調査期間 2000.04.13～2000.06.19
調査担当 池邊千太郎・佐藤孝則

長迫遺跡は、大分市大字牧字長迫に所在する。地形的には、大分平野の中央部を北流する大分川と大野川の間に広がる鶴崎台地北縁部の標高80mの尾根沿いに位置する。

調査の結果、調査区南側に円形の墳墓（S001）1基、北側に土坑12基、ビット6穴を検出した。

墳墓（S001）は、南北に直径12.0mの円形を有し、その南側と北側には尾根を切断するように幅3.0mの周溝が両側に巡っている。墳丘の構築は、最初に丘陵部の北側の広範囲を地表から約0.6m掘り下げ平らに削り、さらに墳丘の原形となるように円形状に削り出しを行っている。上面には、当時の地表層である淡黒灰色土層を10cm程の厚さで確認している。そして積土は、一度削った明黄茶色土の地山土を墳頂部あたりで厚み約0.4mの盛土を施している。墳丘の裾あたりには複数の積土を行っているが、けって版築を行っておらず、土層も軟質で締まりがなく突き固めた状態にはない。このため、風雨によって墳丘の盛土が流れやすくなっており、周溝が短期間で埋没している。なお、積土層中には、焼土や炭が全面に含まれていることから墳丘構造に際し、周辺の地山の削平時に植生していた木を伐採し、その場所では焼いたものとも考えられる。

主体部付近は盗掘による堆積の乱れが確認され、主体部の大半は破壊されていた。主体部（S100・101）は東西方向に長い土坑の掘り込みで2基検出され、復元幅1m、長さは2mを超えるもので、掘り込みは西から東にかけて階段状になっている。壁面には朱が施されており埋土も朱を帯びている。遺物は皆無であり、唯一盗掘時の覆土から鉄製品の剣の破片と斧が出土している。さらに調査中、盗掘穴の覆土から角閃安山岩の石材の破片が出土しており、これにも赤色顔料が付着していることから、主体部は石蓋土墳墓の可能性が高い。

調査区北側には、12基の土坑が集中して検出した。いずれも直径1～2mの規模であり、遺物は皆無である。埋土中に焼土や炭片が混入していることから、墳丘が築造された段階もしくはそれ以降の所産と考えられる。

これ以外に、墳墓の積土中に縄文土器片が数十点出土していることから狩猟採集の場として持ち込ま



第153図 調査地点位置図



第154図 遺構配置図 (1/400)

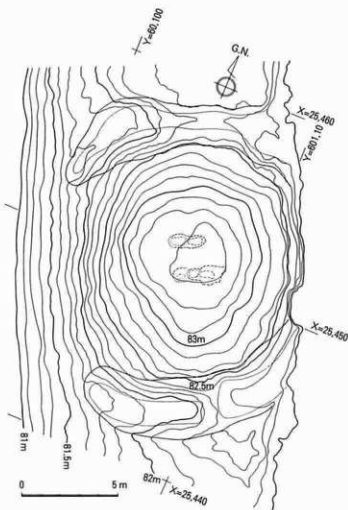
れたものと考えられる。

今回の調査で発見された墳墓（S001）は、明野丘陵の西側において初めての発見事例となった。

これまで大分市内で調査が行われた古墳の事例を見ると、下ッ迫古墳・小牧山古墳群などがこうした丘陵の尾根を利用して構築していることが分かっている。主体部は平面形状が隅丸長方形を呈する土壇であり、大分市内ではこれまで類例を見ない。さらに特徴としては、床面の掘り方が段を呈していることであり、盗掘によって土壇の上面は著しく破壊されており上部構造を窺い知ることはできないが、攪乱層の中に破碎された角閃安山岩の石材片が数十点もの出土が見られる点から石蓋土壇墓の可能性が考えられる。

構築年代については、主体部および主体部周辺の攪乱層から鉄斧と鉄剣が出土しているにすぎず積極的に年代の評価を行うことができない。墳丘の構築方法としては、墳丘の盛土が版築を行っていないことやこの地域で一般的に採用されている主体部に箱式石棺を採用していない点などを兼ね合わせて想定すれば、構築時期はこの地域で古墳が盛行する4～5世紀代の時期よりも古式の様相を呈する。そうしたことから弥生時代の終わりから古墳時代始めにかけて造墓されたものではないかと考えられる。これについては、類例資料との比較検討を今後進めていかななくてはならないであろう。被葬者は、立地から推定すると、墳墓が造られた丘陵眼下の牧から下部に広がる集落を統括していた人物を想定することができよう。

これまで発見されていない地域での墳墓の発見は、新たな墳墓構造など墓制の流れを埋める資料として大変貴重な遺跡と言えよう。（池邊）



第155図 墳墓（S001）地形図（1/200）



第156図 調査区遠景（西方向から）



第157図 墳墓（S001）全景（北方向から）

XXV 城南遺跡群第3次調査(千人塚古墳)

調査面積 約1,700㎡
地域 大字永興

調査期間 2000.08.08～00.11.10
調査担当 後藤典幸・宮田 剛

本遺跡は、大分川左岸の東西に延びる標高92～84mの永興台地の上部平坦面からやや下った南側に舌状に張り出した標高71～61mの緩斜面上に位置し、基盤は阿蘇4火砕流堆積物である。

平成9年度に行った確認調査では、周知の円墳と考えられたものが周溝および墳丘の一部確認により前方後円墳であったことが判明した。主軸をほぼ南北にとり、前方部は南に向かってあまり開かずなおかつ短いものである。古墳の調査は、周溝プランの検出を最優先とし、トレンチによる最小限の調査を行い、周溝の幅・深さ等の確認に留めた。残存状況はあまり良くない。また平安時代末頃の木棺墓1基や、縄文時代早期や晩期の遺物を含む包含層などを確認した。

今回の調査は前回の確認調査結果を受け、保存される後円部墳丘部分以外の前方部および周溝の全面掘り下げおよび後円部の測量調査を目的とした。その結果、墳丘規模の若干の修正が認められた。墳長47m(周溝を含め56m)、後円部径約30.6m、くびれ部幅12.4m、前方部長16.4m、前方部全面幅約14.8mである。なお東側部分は掘削・削平が著しく明確なプランを検出できず後円部端も確認されていないため、全て推定値である。周溝は後円部西側で幅約5m、深さ約1.4m、くびれ部付近幅約6m、深さ約1.5m、前方部側幅約4m、深さ約0.4mである。土層観察から、後円部側の周溝では墳丘側からの流れ込みが確認され、下層(黒色粘質土層)からは葦石と考えられる大量の礫が確認された。古墳造営後あまり時期がたたない内に葦石は流失したようである。また、調査区西側周溝の墳丘側で地山を一部削り出した後の盛土を確認した。

残存する後円部墳丘上に阿蘇熔結凝灰岩製の刻り抜き式石棺の一部と思われる石材片が残されていた。墳丘上部が削平はされているにしても主体部の石室及び石室構築材などは確認されなかったため、石棺直葬であった可能性がある。

今回の調査では、本古墳の具体的な時期決定を行うことのできる新たな遺物の出土がほとんど認められなかった。しかし前回確認調査で、東側くびれ部付近の周溝底面直上より祭祀に使用され廃棄されたものであろう須恵器大甕などが検出され、6世紀中頃以降の須恵器杯身が葦石を含む層より上層で出土したことなどから、古墳の築造年代は古墳時代中期末から後期前半ごろ(5世紀末～6世紀前半)の所産で、その後墳丘表面の葦石が流れたりしながらもしばらくの間祭祀などの活動が行われていたものであろうと考えられる。

千人塚古墳は、大分平野内の古墳の空白期を埋め、大分川流域の周辺古墳群との連続性を補強することの出来る極めて貴重な古墳であり、大分の古代史解明にも重要な新資料と言える。周辺の古墳群を含めこの地域の古代史上での重要性があらためて見直されることとなった。(宮田)

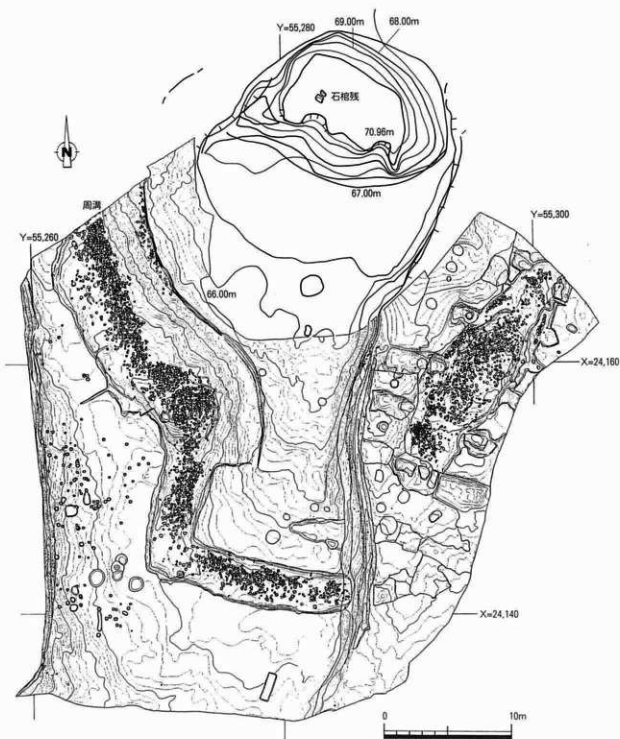


第158図 調査地点位置図



第159図 前方部側周溝検出状況

城南遺跡群
第3次調査
(千人塚古墳)



第160図 遺構配置図 (1/300)

XVI 羽屋・園遺跡確認調査

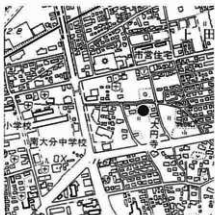
調査面積 約95.25㎡
地域 A

調査期間 2000.12.12～00.12.14
調査担当 玉永光洋・羽田野達郎・佐藤孝則

調査地は大分川の左岸に広がる沖積平野にあたり、豊後国府推定地の一つである古国府遺跡群に位置し、平成8年度に実施し3棟並んで倉庫跡群が検出された羽屋・園遺跡第3次調査地点の北西約35mの位置にあたり、また真南北を基準とする大型掘立柱建物跡群が検出された羽屋井戸遺跡の南東約70mにあたる地点である。調査は、共同住宅建設の計画に伴い実施された。

確認された遺構群は、総柱建物跡をはじめとして、溝状遺構、柱穴群、不定形の遺構群が挙げられる。

以下に各主要遺構の概略についてまとめる。



第161図 調査地点位置図

総柱建物跡 (SB001)

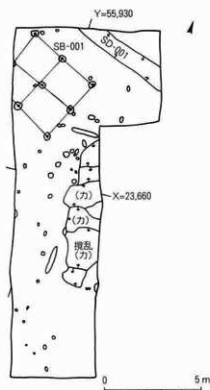
2間×2間の倉庫跡で、柱掘り方は直径0.3～0.5mを測り、平面プランは円形を呈す。全ての柱穴で、柱根を確認している。柱間は約2mを測る。真南北を指向した方向性は認められなかった。建物跡の時期については、一部柱穴を掘り下げたところ、柱根から須恵器片が埋置された状態で出土している。須恵器片が中村氏による陶邑編年のⅡ型式3段階に相当し、廃絶時期をほぼこの時期と考えている。また、調査地の北側には「七曾子」という小字名が残っており関連が注目される。

溝状遺構 (SD001)

幅は約1mで、深さは約30cmを測り、埋土は淡灰色粘質土層と暗灰色粘質土層の2層である。断面形状は緩やかな曲線を呈す。溝からは、遺物が僅少の中、古墳時代前半期に考えられる土師器甕が出土しているが、溝はSB001とほぼ平行であり、さらに周辺調査で、古墳時代後半の溝が確認されているため、溝の時期については検討を要する。



第162図 調査区全景 (南方向から)



第163図 遺構配置図 (1/200)

羽屋・園遺跡
確認調査



第164図 SB001検出状況



第165図 SB001柱穴遺物出土状況

その他の遺構群

調査区内で多数のビット群を検出したが、規則性は確認されず、性格を特定するには至っていない。その他、切り合いが多く認められる不定形の遺構群は、大半を電柱埋設時による攪乱で削平されており、また一部掘り下げを行ったが遺物が出土しておらず時期、性格共に不明である。

今回の調査結果は、6世紀中頃の倉庫跡が検出され、ほぼ全面に遺構が展開していることが確認された。

(羽田野・佐藤)

第IV章 受贈図書目録

1 調査報告書

宮城県	宮城県多賀城跡調査研究所	東山道跡 一賀美郡街跡推定地一	多賀城関連道跡発掘調査報告書第18冊	1993
		桃生城跡IX	多賀城関連道跡発掘調査報告書第36冊	2001
		福島県中建設事務所 郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
福島県	小泉山田A道跡(第2次) 山田B道跡 発掘調査報告	国道288号(郡山東バイパス)改築工事関連		2000
		宮ノ脇道跡 第4次発掘調査報告	県道小野郡山線改良工事関連	2000
		郡山東部23 屋戸道跡(第2次) 屋敷添道跡(第3次) 小泉山田A道跡(第3次)		2000
	郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	鴨打A道跡 第二次調査(遺構外編)	平成11年度埋蔵文化財出土遺物整理保存事業	2000
		蒲倉古墳群 一第6次調査報告一		1999
		音路道跡 一伝蓮花谷太子寺跡発掘調査報告一	民間宅地造成関連	1998
	郡山市御前南土地地区面整理組合 郡山市教育委員会 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団	清水内道跡 一6・8・9区調査報告一 第1冊	御前南土地地区面整理事業関連	1999
		郡山市教育委員会		
		郡山市埋蔵文化財分布調査報告7		2000
	いわき市教育委員会 郡いわき市教育文化事業団	中山館跡Ⅲ区	中山館跡の調査	1999
		白岩堀ノ内道跡	古代流路跡と近代京跡関連道跡の調査 65冊	2000
		下川子田橋六群	主要地方道・小泉山田(白河バイパス)埋蔵文化財調査報告Ⅳ いわき市埋蔵文化財調査報告	2000
		連郷B道跡	縄文晩期終末・中世の調査 70冊	2000
		上ノ台道跡	縄文時代前期集落・江戸時代屋敷跡の調査	2000
茨城県	筑波大学 先史学・考古学研究編集委員会	筑波大学 歴史・人類学系		2000
栃木県	足利市教育委員会	春日道跡第1次発掘調査報告書	足利市埋蔵文化財調査報告書 第34集	1997
		中日向13号墳発掘調査報告書	足利市埋蔵文化財調査報告書 第36集	1998
		高松道跡第2次発掘調査報告書	足利市埋蔵文化財調査報告書 第37集	1998
		平成8年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第38集	1998
		平成9年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第39集	1999
		小俣川沿岸道跡群発掘調査報告書	足利市埋蔵文化財調査報告書 第40集	1999
		南大町道跡第1次発掘調査報告書	足利市埋蔵文化財調査報告書 第41集	1999
		平成10年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第42集	2000
群馬県	高崎市教育委員会	高崎市内道跡埋蔵文化財 緊急発掘調査報告書14	高崎市文化財調査報告書第167集	2000
		県附五百山道跡	高崎市文化財調査報告書第168集	2000
		一市道B596号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	高崎市文化財調査報告書第169集	2000
		京目久保・天神前・柳ノ内・上小路道跡	高崎市文化財調査報告書第170集	2000
		市道目久保・後居道道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報4	高崎市文化財調査報告書第171集	2000
		高崎市内西馬道跡 高崎西口道跡 第17回埋蔵文化財展示事業報告		
	高崎市道跡調査会	綿貫堀米前Ⅱ道跡 発掘調査報告書	高崎市道跡調査会文化財調査報告書第76集	2000
		城下町Ⅱ道跡 一宮本(お堀端)地区優良建築物等整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書一	高崎市道跡調査会文化財調査報告書第77集	2000
		東町Ⅱ道跡 一高崎駅東口第六地区優良建築物等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一	高崎市道跡調査会文化財調査報告書第78集	2000
		堀打Ⅱ道跡 高崎市西口北第一地区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	高崎市道跡調査会文化財調査報告書第79集	2000

福井県	福井市教育委員会	
	福井市三尾野古墳群 発掘調査報告書	1993
	高柳道跡	通称発掘次自前総合調査事業書 試掘調査報告書 1998
	清水古墳群	中央3-18号線建設に伴う発掘調査報告書 1998
山梨県	柏嶋山城跡	中央3-18号線建設に伴う発掘調査報告書 1999
	甲府市教育委員会	
	史跡 武田氏館跡	県道甲府山梨線整備事業に伴う発掘調査報告書 2000
	史跡 武田氏館跡	武田神社社務所増築・参道石垣改修に伴う主郭部調査 2000
岐阜県	史跡 武田氏館跡	第14次～第31次調査報告書 2000
	垂井町教育委員会・三重大学考古学研究室	
	美濃国府跡発掘調査報告	1999
愛知県	名古屋市教育委員会	
	高蔵道跡（第22次・第23次）上島古墳群 守山白山古墳	埋蔵文化財調査報告書 33 2000
	坂本町道跡（原田町60番地地点・第3次）	埋蔵文化財調査報告書 34 2000
	高蔵道跡（第24次・第25次）瑞穂道跡（第5次）	埋蔵文化財調査報告書 35 2000
	春日野町道跡（第2次）正木町道跡（第11次）	埋蔵文化財調査報告書 35 2000
	千吉寺道跡（第1・2次）	埋蔵文化財調査報告書 35 2000
	尾張元興寺跡第1次発掘調査の概要	2000
	尾張元興寺跡第8次発掘調査報告書	2000
	下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（朝日道跡5・6次、名古屋城三の丸道跡11次）	2000
	静岡県埋蔵文化財センター	
	瓶字荒跡	市内道跡調査報告 Ⅱ 2000
三重県	豊田市教育委員会	
	岩長（いわな）道跡 【弥生時代後期の集落・古墳後期の集落と群集墳】	豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集 2000
	四日市市教育委員会	
	菰蒲谷道跡	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書22 1999
滋賀県	山川道跡・山川古墳群	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書24 2000
	四日市市代官所跡	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書25 2000
	茂福城跡2	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書26 2000
	一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅳ	2000
	四日市市道跡調査会	
	市場城跡	四日市市道跡調査会文化財調査報告書XXI 2000
	米田道跡	四日市市道跡調査会文化財調査報告書XXII 2000
	赤堀城跡4 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	四日市市道跡調査会文化財調査報告書XXIII 2000
	滋賀県教育委員会	
	大手道および伝前田利家邸跡	特別史跡安土城発掘調査報告5 1993
	旧徳見寺境内地及び周辺地の調査	特別史跡安土城発掘調査報告6 1996
京都府	主郭西面・掘手道跡辺部の調査	特別史跡安土城発掘調査報告10 2000
	大手道・伝徳川家康邸跡	特別史跡 安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅶ 2000
	大津市教育委員会	
	坂本道跡発掘調査報告書	大津市埋蔵文化財調査報告書（14） 1992
	一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う	大津市埋蔵文化財調査報告書（21） 1992
	北山道跡発掘調査報告書	
	一般国道161号（西大津バイパス）建設に伴う	
	城陽市教育委員会	
	城陽市埋蔵文化財調査報告書第38集	2000
	京都市文化市民局	
	京都市の文化財	京都市指定・登録文化財第18集 2000
	奈良県京都市埋蔵文化財センター	
	長岡京跡右京第664次・神足道跡発掘調査報告	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第18集 2000
	長岡京跡右京第650次・今里道跡発掘調査報告	長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第19集 2000
立命館大学文学部	立命館大学文学部	
	長野市宮崎道跡 第1次～5次調査概報	立命館大学文学部芸芸課程研究報告第9冊 2000

大阪府	国立民族学博物館情報管理施設		
	国立民族学博物館国内資料調査委員 CD-ROM版	調査報告集19 解説書	1999
	国立民族学博物館国内資料調査委員 CD-ROM版	調査報告集20 解説書	2000
堺市教育委員会			
	1. 大野寺跡発掘調査概要報告 2. 堺市道跡発掘調査概要報告 3. 四ッ池道跡発掘調査概要報告	堺市文化財調査概要報告 第84冊	2000
	1. 長曾根道跡発掘調査概要報告 2. 長曾根道跡発掘調査概要報告 3. 堺市道跡発掘調査概要報告 4. 堺市道跡発掘調査概要報告	堺市文化財調査概要報告 第85冊	2000
	1. 堺市道跡発掘調査概要報告 2. 平成10年度下水道管布設工事に伴う立会調査概要報告	堺市文化財調査概要報告 第86冊	2000
	1. 堺市道跡発掘調査概要報告 2. 堺市道跡発掘調査概要報告 3. 大仙西町道跡発掘調査概要報告	堺市文化財調査概要報告 第87冊	2000
	東浅香山道跡発掘調査概要報告Ⅴ 東浅香山道跡一調査のまとめー 長曾根道跡発掘調査概要報告 一堺市長曾根土地区画整理事業に伴う 発掘調査・Ⅵー「長曾根大溝」の調査・研究	堺市文化財調査概要報告 第88冊 堺市文化財調査概要報告 第89冊	2000 2000
	1. 堺市道跡発掘調査概要報告 2. 堺市道跡発掘調査概要報告 3. 長曾根道跡発掘調査概要報告	堺市文化財調査概要報告 第90冊	2000
豊中市教育委員会			
	上津島道跡 第5次発掘調査報告	豊中市文化財調査報告書第41集	1997
	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成11年度（1999年度）	豊中市文化財調査報告書第47集	2000
高槻市教育委員会			
	史跡・今城塚古墳	一平成10年度・第2次規模確認調査一	1999
	嶋上道跡群24	高槻市文化財調査概要XXII	2000
	史跡・今城塚古墳	一平成11年度・規模確認調査一	2000
高槻市立埋蔵文化財調査センター			
	安満宮山古墳	一発掘調査・復元整備事業報告書一	2000
貝塚市教育委員会			
	貝塚寺内町道跡発掘調査概要	貝塚市埋蔵文化財調査報告	1998
	東道跡Ⅱ、新井ノ池道跡発掘調査概要	貝塚市埋蔵文化財調査報告	1998
	海塚道跡発掘調査概要	貝塚市埋蔵文化財調査報告	1998
八尾市教育委員会			
	八尾市内道跡平成11年度発掘調査報告書	平成11年度国庫補助事業	2000
	八尾市内道跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ	平成11年度公共事業	2000
	弓削道跡発掘調査報告書		2000
熊取町教育委員会			
	熊取町道跡群発掘調査概要報告書	熊取町埋蔵文化財調査報告 第33集	2000
	久保城跡発掘調査概要報告書	熊取町埋蔵文化財調査報告 第34集	2000
	七山東道跡発掘調査概要報告書	熊取町埋蔵文化財調査報告 第35集	2000
大阪大学井ノ内車塚古墳調査団			
	今里大塚古墳第3次調査概要 井ノ内車塚古墳第3次調査概要		2000
大阪大学蘇阪大塚古墳発掘調査団			
	蘇阪大塚古墳Ⅴ 第6次調査	範囲確認調査概要一平成10年度一	2000
兵庫県	尼崎市教育委員会		
	平成9年度国庫補助事業 尼崎市内道跡 復旧・復興事業に伴う発掘調査 概要報告書	尼崎市文化財調査報告 第29集	2000
	赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係		
	高雄・根本道跡発掘調査報告書	但馬は堀整備事業及び赤穂市高雄公民館・地区体育館 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
加東市教育委員会			
	北野・黒深道跡 北野・神田木道跡	～滝野町北野土地区画整理事業にかかる調査～	1999
上郡町教育委員会・白旗城跡調査委員会			
	白旗城跡	国指定史跡 赤松氏城跡	1998

飛鳥池道跡	2000
飛鳥平城京跡保存会	
藤原宮跡 一本木一	1968
奈良県教育委員会	
奈良県総合文化調査報告書 吉野川流域 竜門地区	1963
奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第5集	1965
奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第6集	1965
昭和三十一年二月 奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第8集	1956
珠城山古墳	1956
奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報 第13集	昭和35年3月 1960
奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編) 第3集	昭和35年3月 1960
奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編) 第4集	昭和36年3月 1961
昭和36年度 飛鳥道跡調査概報(飯蓋宮伝承地)	1962
飛鳥道跡 発掘経過報告 昭和35年~37年度	1963
奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編) 第6集	昭和38年3月 一付奈良県道跡地名表1一 1963
奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財民俗資料) 第7集	昭和39年3月 1964
奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編) 第8集	昭和40年3月 1965
奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編) 第9集	昭和41年3月 1966
藤原宮跡	一昭和41年度調査概要一
飛鳥宮跡	一昭和41年度 発掘調査概要一
飛鳥宮跡	一昭和42年度 発掘調査概要一
藤原宮跡	昭和42年度調査概要 1967
藤原宮跡	昭和43年度調査概要 1968
藤原宮跡出土木簡概報	昭和43年3月 奈良県文化財調査報告第10集 1968
マエ塚古墳	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第24集 1969
菅原寺 一善光寺旧境内緊急発掘調査報告書一	奈良県文化財調査報告書 第12集 1969
奈良カトリック教金跡の発掘調査	1970
西陸寺金堂跡発掘調査概報	1970
郡祁村吐山池ノ谷1号墳 奈良市登大路町の瓦窯 発掘調査概要	1970
緑地保全と古墳保護 一中間報告一	1970
天理市石上・豊田古墳群 I 一天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告一	奈良県文化財調査報告書 第20集 1975
飛鳥京跡	一昭和49年度発掘調査概要一 1975
北葛城郡当麻町 兵家古墳群	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第37集 1978
二上山・桜ヶ丘道跡	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第38集 1979
奈良山 一Ⅱ	平城ニュータウン予定地内道跡調査概報 1979
新沢千塚古墳群	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第39集 1981
新沢千塚古墳群 図版一	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第39集 1981
新沢千塚古墳群 図版二	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第39集 1981
一平城京九条大路 畠道城跡より跡予定地発掘調査概要 I一	1981
太安真侶墓	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第43集 1981
平城京西市跡	右京八条二坊十二坪の発掘調査 1982
見田・大沢古墳群	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第40集 1982
和爾・森本道跡	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第45集 1983
平城京 左京四条四坊九坪 発掘調査報告	1983
東安塔道跡	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第46集 1983
平城京左京三条二坊三坪 発掘調査報告	1984
平城京左京九条三坊十坪 発掘調査報告書	1986
藤原京 左京二条一坊・同二条二坊 発掘調査報告	1987

西隆寺発掘調査報告書		1993
山口道跡群	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第72冊	1996
南郷道跡群 II	奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第73冊	1999
唐公弥生道跡調査概要		
奈良県教育委員会刊 飛鳥京跡	航空写真 実測図一	
奈良県立橿原考古学研究所		
屋敷古墳 一大和国天理市上・庄一	奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第7集	1955
奈良県立橿原考古学研究所		
平城京左京三条二坊十三坪		1975
立野城跡	生駒郡三郷町立野所在中興城跡の調査概報	1975
天理市石上・豊田古墳群 II 一 天理市石上・豊田古墳群発掘調査報告一	奈良県文化財調査報告書 第27集	1976
清水谷古墳群 一高市郡高取町清水谷1・2・3・4号墳発掘調査報告一	奈良県文化財調査報告書 第25集	1976
平城京左京3条1坊6ノ坪		1976
斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報		1976
宮滝道跡 昭和50年度発掘調査概報		1976
佐味田原古墳 一付 黒石4号墳・小池寺石棺調査報告一	奈良県文化財調査報告書 第29集	1977
大福道跡	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第36冊	1978
新在大野谷山古墳群	奈良県文化財調査報告書 第31集	1979
奈良県道跡調査概報（第一分冊）1981年度		1981
奈良県道跡調査概報（第二分冊）1981年度		1981
御所市 麻ノ谷1号墳	奈良県文化財調査報告書 第36集	1982
飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡	奈良県文化財調査報告書 第39集	1982
二上山北麓石器時代遺跡の調査 一清風荘第3地点道跡・滝ヶ谷道跡一	奈良県文化財調査報告書 第42集	1984
三郷町 平陸寺	奈良県史跡名勝天然記念物 調査報告第47冊	1984
橿原市 沼山古墳 益田地堀	奈良県文化財調査報告書 第48集	1985
奈良県道跡調査概報（第二分冊）1986年度		1986
国道二十四号線埋蔵文化財分布調査報告書		1987
広瀬地蔵山墓地区 一奈良県山辺郡山添村広瀬所在の経塚・墓地区一	奈良県文化財調査報告書 第51集	1989
斑鳩 藤ノ木古墳概報		1989
橿原市 大福道跡奈良県文化財調査報告書 第64集		1992
奈良県 口宇陀地域道跡分布地図		1995
天理市御所 堀ヶ谷道跡・白川大塚群発掘調査報告書	奈良県発掘調査報告書 第73集	1996
奈良県道跡調査概報（第一分冊）		1998
奈良県道跡調査概報（第二分冊）		1998
橘寺	奈良県文化財調査報告書 第80集	1999
南郷道跡群IV	奈良県立橿原考古学研究所調査報告第76冊	2000
南郷道跡群V	奈良県立橿原考古学研究所調査報告第77冊	2000
大和木器資料 I	橿原考古学研究所研究成果 第3冊	2000
桜井市 奈良県立橿原考古学研究所（編）		
櫻井市 舞臺5号墳前庭部 発掘調査報告		1987
奈良県立橿原考古学研究所 三郷町教育委員会		
生駒郡 三郷町所在道跡発掘調査報告		1992
桜井市教育委員会		
安倍寺路埋蔵文化財発掘調査概報		1986
御所市文化財協会		
桜井市内埋蔵文化財 1997年度 発掘調査報告書 I		1998
桜井市内埋蔵文化財 1999年度 発掘調査報告書 I		2000
御所市教育委員会		
奈良県御所市 鴨部道跡 一調査概報一		1977

	御所市 穂野古墳群	御所市埋蔵文化財調査報告 第1集	1980
	郡祁村教育委員会		
	三陵墓西古墳		1999
	法隆寺		
	法隆寺発掘調査概報Ⅱ	一昭和57年度防災工事に伴う発掘調査一	1983
	法隆寺発掘調査概報Ⅲ	一昭和58年度防災工事に伴う発掘調査及び収容庫建設工事に伴う発掘調査一	1984
	斑鳩町教育委員会		
	斑鳩 藤ノ木古墳		1986
	斑鳩 藤ノ木古墳		1989
	川西町教育委員会 三宅町式下中学校組合		
	三宅町 宝院遺跡 発掘調査報告書	一式下中学校体育館建設事前調査一	1990
	田原本町教育委員会		
	唐子・礎遺跡	第12次発掘調査概報	1981
	高取町教育委員会 (編) 奈良県立橿原考古学研究所		
	タニグチ古墳群 (付 タニグチ墳墓群) 発掘調査報告		1996
	明日香村教育委員会		
	飛鳥高松塚		1972
和歌山県	和歌山市教育委員会		
	和歌山市内遺跡発掘調査概報	一平成10年度一 西江遺跡発掘調査 神前遺跡第3次調査	2000
	和歌山市文化体育振興事業団		
	史跡 和歌山城 第19次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第22集	1999
	高井遺跡 第2次発掘調査概報	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第23集	2000
鳥取県	大田市教育委員会・鳥取県教育委員会		
	石見銀山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site	平成9～11年度調査 橋堀谷地区・出土谷地区	2000
	旭町教育委員会		
	高城跡発掘調査報告書	NTT中国移動通信機帯・自動車電話市本・浄泉寺 基地局建設に伴う発掘調査	1998
岡山県	岡山市教育委員会		
	岡山市埋蔵文化財調査の概要	一1998(平成10年度)一	2000
	造山第2号古墳	付 伝千足古墳出土遺物	2000
	備中高松城三の丸跡発掘調査概要	市道高松14号線道路改良工事に伴う発掘調査	2000
	大供中道遺跡発掘調査概要	岡山市公用車立体駐車場建設工事に伴う発掘調査	2000
	岡山市指定重要文化財 岡山市立旭東幼稚園旧園舎復元報告書		2000
	倉敷市埋蔵文化財センター		
	古城池南古墳	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第9集	2000
広島県	韓広島市文化財団		
	大町七九谷遺跡群 一広島市安佐南区大町所在一	韓広島市文化財団発掘調査報告書 第4集	1999
	長尾遺跡 一広島市東区戸坂所在一	韓広島市文化財団発掘調査報告書 第5集	1999
	福山市教育委員会		
	新立古墳	採土場開発に伴う発掘調査報告書	2000
	福山市教育委員会 才町茶臼山遺跡発掘調査団		
	才町茶臼山遺跡		1999
	府中市教育委員会		
	府中市内遺跡5	府中市埋蔵文化財調査報告	2000
	韓東広島市教育文化振興事業団		
	西本6号遺跡発掘調査報告書Ⅰ	文化財センター調査報告書 第9冊	1996
	山崎2号遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第23冊	1999
	上忍遺跡・荒谷土居居敷遺跡発掘調査報告書	文化財センター調査報告書 第25冊	2000
	文化財論究 第1集		1998

山口県	山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター		
	向田道跡	平成11年度主要県道柳井上関線早治道路改良(地方特定)工事に伴う発掘調査報告	2000
	東禅寺・黒山道跡V	平成11年度南吉川一般河川改修・2級工事に伴う発掘調査報告	2000
山口市教育委員会			
	八ヶ坪道跡 一工事建設に伴う発掘調査一	山口市埋蔵文化財調査報告第47集	1992
	小原道跡I	山口市埋蔵文化財調査報告第56集	1993
	神郷大塚道跡II	山口市埋蔵文化財調査報告第57集	1995
	大内氏館跡X(遺構篇) 大内氏道跡発掘調査報告Ⅱ	山口市埋蔵文化財調査報告第58集	2000
	常栄寺	山口市埋蔵文化財調査報告第66集	1997
	山口市内道跡詳細分布調査(銭司地区)	山口市埋蔵文化財調査報告第72集	2000
	東禅寺・黒山道跡	山口市埋蔵文化財調査報告第73集	2000
	下糸根道跡	山口市埋蔵文化財調査報告第74集	2000
	小原道跡	山口市埋蔵文化財調査報告第75集	2000
防府市教育委員会			
	敷山・末田須恵器窯跡発掘調査報告	防府市埋蔵文化財調査報告	2000
	周防国府跡山升地区 一第43・45・49・53・60・65・85次調査一発掘調査概要I	防府市埋蔵文化財調査概要	2000
	平成10年度防府市内道跡発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要	2000
柳井市教育委員会			
	史跡 柳井茶臼山古墳	保存整備事業発掘調査報告書	1999
	史跡 柳井茶臼山古墳	保存整備事業保存整備報告書	1999
山口県埋蔵文化財センター・阿知須町教育委員会			
	赤迫道跡(C地区)	平成11年度県営は場整備事業(担い手育成型)に伴う発掘調査報告	2000
徳島県	徳島県教育委員会		
	勝瑞前跡	守護町跡跡跡地東部地点 第3次発掘調査概要報告書	2000
	財徳島県埋蔵文化財センター		
	日吉金清道跡・西谷道跡	西国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1995	1995
	以馬清吉伝・上吉楽跡・大仏山(大谷寺)跡・八坂跡(Ⅱ)・八坂跡(Ⅲ)・古田跡(Ⅱ)・ 松山一級古跡・第9・9跡・安楽寺古墳群・高瀬古山古墳・松谷跡・蓮華谷古墳(Ⅰ)	西国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査報告第13集	1995
	土佐泊大谷道跡	徳島県埋蔵文化センター 第19集	1995
	石井城ノ内道跡 石井・神山線地区	主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	1995
	金泉寺道跡・川端道跡	徳島県中央構造線調査に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	1999
	マチ道跡	阿波産田公共職業安定所新築工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
徳島市教育委員会			
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要		1999
	阿波国府跡発掘調査報告		1999
香川県	高松市教育委員会		
	高松市内道跡発掘調査	平成11年度高松市内道跡	2000
	一角道跡	特別養護老人ホーム“まくら荘”建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	香西南西打道跡	高松市ふれあい福祉センター勝賢建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	上西原道跡 附 汲仏道跡	太田地区第2土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書 第3冊	2000
	宮西・一角道跡	埋蔵文化財発掘調査報告書 第3冊	2000
	川南・東道跡	埋蔵文化財発掘調査報告書 第4冊	2000
	都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書		2000
愛媛県	財愛媛県埋蔵文化財調査センター		
	住吉神社跡埋蔵文化財調査報告書	一般県道鳥坂・宇和線ふもとづくり関連道路整備事業	1999
	新池道跡・市場南祖窯跡	西国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書第 一伊予市編纂	1999
	史跡「松山城跡」内県民館跡地	愛媛県美術館の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	2000
	阿方道跡・矢田八反坪道跡		2000
	湯築城跡	道後公園埋蔵文化財調査報告書 第2分冊	2000
	湯築城跡	道後公園埋蔵文化財調査報告書 第3分冊	2000
	湯築城跡	道後公園埋蔵文化財調査報告書 第4分冊	2000

南高井道跡・森松道跡	四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅲ	2000
道の谷古墳 池の奥道跡 平田七反地道跡	—松山市編Ⅱ— 一般国道196号松山北上バイパス 埋蔵文化財調査報告書Ⅱ	2000
旦道跡 宮之前道跡 長沢石打道跡 長沢1号墳 長沢6号墳 の谷と号墳 跡又古墳群 郷坂井西塚古墳	—一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ—	2000
阿防春岡道跡 阿防牛ノ江道跡 矢田八反坪道跡 矢田大出口道跡 矢田平山古墳 矢田平山古墳 矢田平山道跡	—一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書—	2000
松山市教育委員会・御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター		
太山寺経田道跡	1～5次調査	1999
古市道跡・下菊屋道跡 2・3次調査	松山市道「平井・水尾線」関連道跡	2000
来住・久米地区の道跡Ⅲ	北久米町屋敷道跡、南久米町道跡、南久米町道跡 2・3次調査地、来住町道跡4次調査地	2000
小浜道跡 — 3次調査—	松山市文化財調査報告書	2000
御松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター		
岩崎道跡	松山市文化財調査報告書	1999
今治市教育委員会		
宮ヶ崎山形道跡	今治市埋蔵文化財調査報告書 44集	1999
八町ヒル田道跡	今治市埋蔵文化財調査報告書 45集	1999
四村額ノ内道跡 第2次調査地	今治市埋蔵文化財調査報告書 46集	1999
高橋湯ノ窪道跡Ⅱ	今治市埋蔵文化財調査報告書 47集	1999
伊予国分尼寺道跡	今治市埋蔵文化財調査報告書 48集	1999
馬越和多地道跡・矢田西之窪道跡Ⅱ	今治市埋蔵文化財調査報告書 49集	1999
石井国友道跡 第1次調査区 第2次調査区 第3次調査区 第4次調査区	今治市埋蔵文化財調査報告書 50集	1999
市内道跡試掘確認調査報告書Ⅶ	今治市埋蔵文化財調査報告書 51集	1999
市内道跡試掘確認調査報告書Ⅷ	今治市埋蔵文化財調査報告書 52集	1999
松野町教育委員会		
史跡河後森路跡保存整備基本計画		2000
福岡県		
福岡県教育委員会		
仁右衛門堀道跡Ⅰ	福岡県浮羽郡吉井町大字新所在道跡の調査	2000
船越高原A道跡Ⅰ	福岡県浮羽郡田主丸町・吉井町所在道跡の調査	2000
上唐原了清道跡Ⅱ		2000
西新町道跡Ⅱ	県立修猷館高校改築事業関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ	2000
御北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室		
貫・丸尾道跡	西鉄養生が丘団地関係調査報告	2000
脇田丸山道跡	脇田港開港関連道路整備事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告	2000
高坊道跡	県宮城野町地建設に伴う埋蔵文化財調査報告	2000
小倉城跡第3地点下	篠守庵屋敷地の調査	2000
上貫道跡（C）	貫川郡市小川河改修に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告14	2000
上横代道跡	横代75号線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告1	2000
北方道跡第7次調査	小倉組馬場エクステンド移築工事に伴う 埋蔵文化財の発掘調査報告書	2000
丸の内南道跡	北九州市総合運動公園関係報告	2000
片野道跡	北九州市埋蔵文化財調査報告書	2000
高槻道跡第9地点	横田小学校校舎建設に伴う埋蔵文化財調査報告	2000
壱町道跡第1地点	都市計画道路大門三六線建設工事に伴う 埋蔵文化財調査報告書	2000
高槻道跡第10地点	横田小学校校舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告3	2000
長野小西田道跡	北九州市総合運動公園に伴う 埋蔵文化財の発掘調査報告2	2000
丸ノ内道跡	横代75号線関係埋蔵文化財調査報告	2000
長野フジ道跡	1・2・3区の調査	2000
行正道跡	横橋香月1号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告	2000
福岡市教育委員会		
香椎B道跡 香椎住宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —本文編—	福岡市埋蔵文化財調査報告書第621集	2000
香椎A道跡2 香椎A道跡群第3次発掘調査概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第622集	2000
那木古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第623集	2000

吉塚町 1 吉塚町道跡第1次調査の概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第624集	2000
箱崎 9・比良堤道跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集	2000
箱崎道跡群第14次・比良堤道跡第1次は掘調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第626集	2000
聖地 4 聖地道跡群第9次発掘調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第627集	2000
博多 69 博多道跡群第103次発掘調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第628集	2000
博多 70 博多105次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第629集	2000
博多 71 博多道跡群第109次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第630集	2000
博多 72 博多道跡群第110次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第631集	2000
博多 73 博多道跡群第113次調査の概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第632集	2000
博多 74 博多道跡群第112次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第633集	2000
上月道跡群 2 第2次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第634集	2000
上月道跡群 3 第3次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第635集	2000
佐野道跡 5 福岡空港西側整備に伴う埋蔵文化財調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書第636集	2000
東比良三丁目道跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書第637集	2000
東郷阿 4 烏田 1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第638集	2000
那阿 24 那阿道跡群第64次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第639集	2000
那阿 25 那阿道跡群第68次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第640集	2000
福岡市 坂付町道跡調査報告書第21集	福岡市埋蔵文化財調査報告書第641集	2000
南八幡道跡 5 南八幡道跡第9次調査の概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第642集	2000
笹原 2 笹原道跡群第2次発掘調査概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第643集	2000
表野 C 道跡 表野 C 道跡第5次調査概要	福岡市埋蔵文化財調査報告書第644集	2000
井尻 B 道跡 7 井尻 B 道跡群第11次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第645集	2000
井尻 B 道跡 8 井尻 B 道跡群第12次調査の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第646集	2000
日佐道跡 日佐道跡群第1次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第647集	2000
田島小松浦道跡 第1次調査 田島 A 道跡 第1次調査 第2次調査 新設道路沿線香椎駅の建設に伴う発掘調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書第648集	2000
梅津道跡 第1次調査 一般国道22号福岡市域状道路、及び 福岡市地下鉄 3号線建設に伴う発掘調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第649集	2000
有田・小田部 33 有田道跡群第189次の調査	福岡市埋蔵文化財調査報告書第650集	2000
吉武道跡群 3 飯盛・吉武岡地帯調査事業関係調査報告書 6 弥生時代墳墓の報告 3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第651集	2000
有田・小田部 第34集	福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集	2000
入部 X 東入部道跡群第2次調査報告(2)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第653集	2000
内野道跡 福岡県庁舎建設に伴う道跡群第2・3次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集	2000
JR東九州線地下道跡埋蔵文化財調査報告 福岡市道跡第10次・飯島道跡第9次・ 渡辺道跡第2次・今宿道跡第5次・生ノ松道跡第1次の報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第655集	2000
周船寺道跡群 3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第656集	2000
小田 C 道跡	福岡市埋蔵文化財調査報告書第657集	2000
有田・小田部 35 第182次・186次・187次・190次・192次・193次 弥生時代前期の福岡・ 奈良時代前期の早良郡・福岡時代の福岡に隣接する道跡を中心とする報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集	2000
井相田 C 道跡 5 井相田 C 道跡群第3次発掘調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書第659集	2000
那阿 26 那阿道跡群第71次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書第660集	2000
久留米市教育委員会		
神道道跡 第18次調査	久留米市文化財調査報告書 第154集	1999
庄島仲屋敷道跡 第4次調査	久留米市文化財調査報告書 第155集	1999
筑後国府跡 第162・164次調査報告	久留米市文化財調査報告書 第156集	1999
烏飼小学校校庭道跡	久留米市文化財調査報告書 第157集	1999
木塚道跡 第5次調査	久留米市文化財調査報告書 第158集	1999
今泉道跡 第5次調査	久留米市文化財調査報告書 第159集	2000
金丸道跡	久留米市文化財調査報告書 第160集	2000
平成11年度 久留米市内道跡群	久留米市文化財調査報告書 第161集	2000
筑後国府跡平成11年度発掘調査概要報告	久留米市文化財調査報告書 第162集	2000
山川前田道跡 国指定天然記念物水廻断崖	久留米市文化財調査報告書 第163集	2000
甘木市教育委員会		
堤当正寺古墳	福岡県甘木市堤当正寺古墳発掘調査報告書	2000

福岡県	福岡県土木部土木部調査課の調査	2000
筑後市教育委員会		
羽犬塚寺ノ脇道跡	筑後市文化財調査報告第24集	2000
筑後東部地区道跡群Ⅲ	筑後市文化財調査報告第25集	2000
筑後西部第2地区道跡群Ⅱ	筑後市文化財調査報告第26集	2000
筑後西部第2地区道跡群Ⅲ	筑後市文化財調査報告第27集	2000
上北島花畑道跡	筑後市文化財調査報告第28集	2000
筑後西部地区道跡群Ⅱ	筑後市文化財調査報告第29集	2000
筑後東部地区道跡群Ⅳ	筑後市文化財調査報告第30集	2000
豊前市教育委員会		
狭間宮ノ下道跡（道橋編）	県営福岡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
豊前市の岩戸神楽	豊前神楽入門	2000
豊前市内道跡分布地図		2000
小郡市教育委員会		
三沢古賀道跡2区	小郡市文化財調査報告書 第131集	1999
西島下庄原道跡・三沢道輪道跡	小郡市文化財調査報告書 第141集	2000
上岩田道跡調査概要	小郡市文化財調査報告書 第142集	2000
上岩田工業団地造成事業関係埋蔵文化財調査報告書（1）	小郡市文化財調査報告書 第143集	2000
横瀬上内道跡2 福岡県小郡市横瀬所在道跡の調査報告	小郡市文化財調査報告書 第144集	1999
寺福道跡 福岡県小郡市寺福所在道跡の調査	小郡市文化財調査報告書 第145集	2000
津吉川宮道跡2区 福岡県小郡市津吉所在道跡の調査		
小郡市史蹟調査委員会		
大板井道跡	一大板井道跡Ⅱa区・Ⅱb区における 支石墓調査資料（石輪さん）の調査報告一	1995
筑紫野市教育委員会		
国史跡 五郎山古墳	保存整備に伴う発掘調査	1998
トドキ道跡Ⅱ	九州自動車道筑紫野1・C取付部 県道建設に伴う発掘調査報告	1999
大宰府条坊跡第123次発掘調査	筑紫野市文化財調査報告書	1999
史跡 杉塚座寺	史跡整備報告書	2000
原田地区道跡群	一原田土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概要（不明）	
大坪道跡	筑紫野市大字下町堀所在道跡の調査 筑紫野市文化財調査報告第61集	1999
宗像市教育委員会		
久原遺ッド 福岡県宗像市久原所在道跡の発掘調査報告	宗像市文化財調査報告書 第48集	2000
太宰府市教育委員会		
筑前国分跡Ⅱ 国分寺外郭施設の調査	太宰府市の文化財 第40集	1999
馬場道跡	太宰府市の文化財 第41集	1999
九州電力太宰府変電所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	太宰府市の文化財 第42集	1999
大宰府条坊跡Ⅱ	太宰府市の文化財 第43集	1999
大宰府・佐野地区道跡群Ⅲ 前田道跡群第8・9・10・11次調査	太宰府市の文化財 第44集	1999
横岳道跡 横岳崇福寺跡の調査（道橋編）	太宰府市の文化財 第45集	1999
大宰府条坊跡Ⅲ 第56次調査	太宰府市の文化財 第46集	1999
御笠印印出土地周辺道跡Ⅰ 第7・9・10次調査	太宰府市の文化財 第47集	2000
大宰府条坊跡Ⅳ「市ノ上」周辺の調査	太宰府市の文化財 第48集	1999
大宰府条坊跡Ⅴ 陶磁器分類編	太宰府市の文化財 第49集	2000
大宰府・佐野地区道跡群Ⅳ 佐野地区土地区画整理事業に伴う調査 前田道跡Ⅰ次調査（道橋編）	太宰府市の文化財 第50集	2000
前原市教育委員会		
平原道跡	前原市文化財調査報告書第70集	2000
那珂川町教育委員会		
合政道跡群	福岡県筑紫郡那珂川町松木所在道跡群の調査	1999
中原・ヒナタ道跡群Ⅱ	博多南関門1地区画整理事業地内道跡群の調査	2000
大蔵池道跡群、後野・山ノ神前道跡群	福岡県筑紫郡那珂川町大字後野所在の道跡群の調査	2000

観音山古墳群Ⅴ	筑紫郡河川町大字中原所在古墳群の調査	2000
前田道跡群Ⅲ	福岡県筑紫郡河川町大字五郎丸所在道跡群の調査	2000
家徳台	福岡県筑紫郡河川町大字安徳所在 安徳台道跡群の調査概報	2000
志免町教育委員会		
中山道跡		2000
横枕道跡Ⅱ		2000
津屋崎町教育委員会		
勝浦	担い手育成基盤整備事業勝浦地区に伴う発掘調査報告Ⅲ	2000
芦屋町教育委員会		
金台寺過去根	芦屋町文化財調査報告書 第10集	2000
朝倉町教育委員会		
朝倉町の古墳と埴輪 一付編・宮地嶺古墳の調査一		2000
須川ノケオ道跡		1999
大刀洗町教育委員会		
西森田道跡 2	福岡県三井都大刀洗町大字本郷所在道跡	2000
甲斐神社道跡Ⅱ	福岡県三井都大刀洗町大字甲斐所在道跡の調査報告	2000
大刀洗飛行場 燃料庫	福岡県三井都大刀洗町大字山崎所在 旧大刀洗航空廠内 燃料庫跡の調査大刀洗飛行場関係文化財調査報告書第1集	2000
三潴町文化財専門委員会		
三潴町の絵馬・狛犬		2000
山川町教育委員会		
イモジB道跡		2000
苅田町教育委員会		
近衛ヶ丘道跡群と近辺の史跡	(石塚山古墳・番番古墳・御所山古墳)	2000
苅田町の文化遺産	苅田町文化財詳細分布地図	2000
近衛ヶ丘道跡群	福岡県京都郡苅田町大字尾倉字近衛ヶ丘所在の道跡群	2000
史跡石塚山古墳保存管理計画		2000
新宮富村教育委員会		
宇野地区道跡群Ⅱ	福岡県築上郡新宮富村所在道跡群の調査	2000
佐賀県 佐賀市教育委員会		
若宮道跡 一1・2区の調査一	佐賀市文化財調査報告書第108集	2000
村徳永道跡 一13～16区の調査一	佐賀市文化財調査報告書第109集	2000
森田道跡Ⅱ 一2～6区の調査一	佐賀市文化財調査報告書第110集	2000
増田道跡群Ⅳ 増田道跡6区 一弥生時代墳墓群の調査一	佐賀市文化財調査報告書第111集	2000
若宮道跡3区・4区	佐賀市文化財調査報告書第112集	2000
佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書 一1995・1996年度一	佐賀市文化財調査報告書第113集	2000
薬師森道跡2区 瓊州道跡1区	佐賀市文化財調査報告書第114集	2000
一佐賀導水事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3一	佐賀市文化財調査報告書第115集	2000
上九郎道跡Ⅰ 一1区の調査一	佐賀市文化財調査報告書第116集	2000
上和泉道跡12区 原ノ町道跡4区	佐賀市文化財調査報告書第117集	2000
古村道跡群Ⅰ 古村道跡4区	佐賀市文化財調査報告書第118集	2000
一佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書8一		
一佐賀市久保泉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書9一		
唐津市教育委員会		
唐津市内道跡確認調査	土地開発に伴う市内道跡確認調査報告	2000
管牟田荒谷道跡	結習畑地帯総合土地改良事業にかかる埋蔵文化財調査	2000
岸高第Ⅱ道跡	中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書	2000
管牟田西山道跡(3)	唐津市文化財調査報告書第94集	2000
枝去木分校入口道跡	農業基盤整備事業にかかる埋蔵文化財調査	2000
菜畑内田道跡(3)	唐津市文化財調査報告書(3)	2000
野原道跡	民間運動場造成工事にかかる埋蔵文化財調査	2000
武雄市教育委員会		

	萱ノ谷室跡	武雄市内古室跡群発掘調査報告書Ⅷ	2000
鹿島市教育委員会	鹿島市文化財調査報告書	第10集	1986
	剛重道跡（C地区）・古丸道跡	鹿島市文化財調査報告書 第11集	1988
	杉道跡	鹿島市文化財調査報告書 第12集	1989
	旭ヶ岡道跡・鹿島城跡	鹿島市文化財調査報告書 第14集	2000
	鹿島城跡 III		
大和町教育委員会	池上三本松道跡	佐賀県佐賀郡大和町大字池上所在地・三本松道跡第二次調査の記録書	2000
	久池井五本杉道跡（1・2次調査）		1999
長崎県	大村市文化財保護協会		
	玖島城跡～玖島川改修工事に伴う発掘調査～		2000
	大村市教育委員会		
	黒丸道跡ほか発掘調査概要 vol. 2	大村市文化財調査報告書 第24集	2000
熊本県	熊本県教育委員会		
	神水道跡Ⅲ	一第12次調査区発掘調査報告書一	2000
	大江道跡群Ⅲ	一大江道跡群第38次発掘調査報告書一	1997
	つつじ・丘横穴群	発掘調査概報Ⅳ	2000
	熊本市埋蔵文化財調査年報 第3号	一平成9年度～平成10年度一	2000
宇土市教育委員会	宇土城跡（西園台）Ⅲ		
	一保存整備事業に伴う第9～11年次（平成9～11年度）発掘調査概報	宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集	2000
	不知火町教育委員会		
	塚原平古墳一	熊本県宇土郡不知火町高良所在古墳発掘・整備報告一	1999
	南関町教育委員会		
	鷹ノ原城跡Ⅰ	平成9・10年度調査概要	2000
阿蘇町教育委員会	阿蘇町道跡地図	阿蘇町道跡群分布調査	2000
熊本大学文学部考古学研究室	ナガラ原東貝塚Ⅱ西原F道跡3Ⅲ肥後における古墳の調査3	考古学研究室活動報告 第34集	1999
	ナガラ原東貝塚Ⅱ西原F道跡4	考古学研究室活動報告 第34集	2000
大分県	大分県教育委員会		
	玉沢地区条里跡 ガランジ地区 茨川原近世墓地 田柿地区	一般国道442号（木の土工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	県指定其の田板碑	嘉川大山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	中原舟久手道跡		2000
	千塚西道跡	仙道吉野原大洞線道路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	森の木道跡	仙道赤木次郎佐伯線道路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	炭廻道跡	仙道白竹市道線道路改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	小野家墓地 発掘調査報告書		2000
	尾瀬道跡（第2次調査区・第5次調査区）	局部改良求来里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	上ノ原平原道跡	主要地方道門中津線（相原工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	治別当道跡	九州橋新自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(15)	1999
	四日市上ノ原横穴墓石群	九州橋新自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(16)	2000
	瀬戸墳墓群 瀬戸道跡 帆足城跡	九州橋新自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(16)	2000
	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館		
	石造文化財の保存対策のための概要調査―石造文化財の基礎調査報告書―	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第18集	1996
大分県立歴史博物館	石造文化財の保存対策のための概要調査2		
	一石造文化財の保存調査報告書一	大分県立歴史博物館報告書第3集	1999
	六郡山寺院遺構確認調査報告書Ⅷ	大分県立歴史博物館報告書第4集	2000
	豊後国安岐郡1	国東半島荘園村落道跡群分布調査概報	2000
中津市教育委員会			

	定留道跡 田畑地区 台道跡	1999年度中津地区道跡群発掘調査概報	2000
佐伯市教育委員会			
	佐伯城下町道跡 西田病院駐車場地点	病院施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
大田村教育委員会			
	赤松・野田道跡		2000
武蔵町教育委員会 武蔵町文化財調査委員会			
	武蔵町の庚申塔		2000
三重町教育委員会			
	市場道跡（泉原地区）、竜ヶ鼻横穴墓群、竜ヶ鼻古墳	三重地区道跡群発掘調査概報Ⅳ	2000
千歳村教育委員会			
	大迫道跡徳原地区、原田第2道跡原地区		2000
久住町教育委員会			
	小路道跡 上原敷道跡	低賃担い手育成圃場整備事業西部地区に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ	2000
	市第Ⅳ道跡・トクワ道跡・立花道跡	低賃担い手育成基盤整備事業東部野東地区に伴う発掘調査報告書	2000
玖珠町教育委員会			
	角半礼城跡	玖珠町文化財調査報告 第12集	2000
	アタメ道跡	広城農道玖珠線に伴う発掘調査報告書 第10集	2000
	坂口道跡	スーパー大栄店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
大分の石橋を研究する会			
	おおいの石橋		2000
宮崎県 宮崎県教育委員会			
	特別史跡西部原古墳群	発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅴ）	2000
	鬼の窟古墳・西部原205号墳		2000
	国衙跡保存整備基礎調査 概要報告書Ⅳ	寺崎道跡第8次調査	2000
	平成11年度 農業基盤整備事業に伴う発掘調査概要報告書		2000
	史跡 生目古墳群	保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅰ	2000
	北ノ迫道跡		2000
	前田二月田道跡		2000
	黒太郎道跡		2000
宮崎県埋蔵文化財センター			
	神坂道跡B・C地区 南平第3道跡 南平第4道跡 中ノ原道跡	一般国道218号級高千穂バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	1999
	石用・友尻道跡	一般国道10号宮崎西インターチェンジ関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	石塚城跡・烏ノ子道跡	一般国道10号宮崎西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	黒草第1・第2・第3道跡・本野原道跡・七野第3道跡	国宮大深川石川農業水利事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	上の原第2道跡 上の原第1道跡	時居地区農地保全整備事業時居地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	上の原第4道跡 白々野第3道跡A地区	一般国道36号島崎小浜線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	山中前道跡	一般国道36号インター線道路改良事業に伴う発掘調査報告書	2000
	竹ノ内道跡	鹿川地区小規模事業「都城地域」区画整理に伴う発掘調査概要報告書	2000
	大島島田道跡	鹿児島自動車建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ	2000
	平田迫道跡	鹿児島地保全整備事業時居地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	白々野第3道跡B地区		
日南市教育委員会			
	平成11年度 日南市市内道跡発掘調査概要	日南市埋蔵文化財調査報告書 第12集	2000
小林市教育委員会			
	梅本原道跡発掘調査報告書	霧島東地区委更野池地産環境整備特別対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
西都市教育委員会			
	西部原地区道跡・日向国分寺跡	市内道跡発掘調査概要報告書	2000
えびの市教育委員会			
	昌明寺道跡	低賃担い手育成基盤事業昌明寺地区圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ	2000
	浜川原道跡	北江浦地区低賃担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書	2000

	左牛野道跡	信宮一般道整備事業 権の木平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告	2000
清武町教育委員会	滑川第1・第2道跡	信宮農地保全整備事業第1工区にかかる 埋蔵文化財発掘調査報告書	1999
	山田第1道跡・第2道跡	信宮農地保全整備事業第2工区にかかる 埋蔵文化財発掘調査報告書	1999
田野町教育委員会	ズクノ山第2道跡F地区	平成11年度信宮緊急地帯総合整備事業農村野地区に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	本野道跡	平成14年度信宮農地保全整備事業元野地区に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	高野原道跡(A地区)	平成15年度信宮農地保全整備事業元野地区に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	高野原道跡B・C区	平成16年度信宮農地保全整備事業元野地区に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	高野原道跡(E～C区)	平成17年度信宮農地保全整備事業元野地区に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	三股町文化財調査報告書		
	諏訪廻第1道跡	町営墓地公園建設に伴う埋蔵文化財確認調査報告書	2000
	高原町教育委員会		
木城町教育委員会	檜粉山道跡	信宮開場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概	2000
	石河内本村道跡	信宮中山間地域総合整備事業に伴う 石河内本村道跡発掘調査報告書	2000
鹿児島県 鹿児島市教育委員会	一之宮道跡B地点	中郡小学校屋内体育館建設に伴う緊急発掘調査報告書	2000
	加治屋開道跡B地点	県単独農業農村整備事業に伴う緊急発掘調査報告書	2000
	鹿児島(鶴丸)城二之丸跡G地点	宗教道場の建設に伴う緊急発掘調査報告書	2000
	鹿児島紡績所跡D地点	駐車場整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書	2000
	伊左之原道跡	土地区画整理事業計画に伴う埋蔵文化財確認調査報告書	2000
	谷山城跡E地点	急傾斜地崩壊対策工事に伴う緊急発掘調査報告書	2000
	串木野市教育委員会		
串木野市教育委員会	串木野城跡		2000
	出水市教育委員会		
出水市教育委員会	中尾1・Ⅱ道跡	市道江川野栗毛1号線改良舗装事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	出水貝塚	重要遺跡確認発掘調査事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
松元町教育委員会	松元町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)宮ヶ迫道跡	ふるさと農道緊急整備事業(仁田尾地区)に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書	2000
	鹿児島県姶良郡蒲生町教育委員会		
	日本一の巨樹 蒲生のクス	国指定特別天然記念物 蒲生のクス保護増殖事業報告書	2000
2 定期刊行物・図録等			
北海道	財北海道埋蔵文化センター		
	調査年報12	平成11年度	2000
宮城県	財アイヌ文化振興・研究推進機構		
	財アイヌ文化振興・研究推進機構助成事業案内	平成13年度版	2001
福島県	宮城県多賀城跡調査研究所		
	多賀城跡	宮城県多賀城跡調査研究所年報2000	2001
茨城県	主催/郡山市教育委員会 共催/財郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団		
	第6回市内道跡発掘調査成果展	国指定記念企画 語りをはじめた大安場古墳	2000
	財いわき市教育文化事業団		
栃木県	いわき市教育文化事業団 年報10		2000
	筑波大学 先史学・考古学研究編集委員会		
栃木県	筑波大学 歴史・人類学系		2000
	足利市教育委員会 文化課		
	平成8年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第38集	1998
	平成9年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第39集	1999

	平成10年度文化財保護年報	足利市埋蔵文化財調査報告書 第42集	2000
群馬県	群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要18		2000
千葉県	国立歴史民俗博物館 国立歴史民俗博物館研究年報 8		2000
	習志野市教育委員会 特別史料展「ドイッ兵士の見たNARASHINO 1915-1920 習志野俘虜収容所」展示品図録		1999
	山武考古学研究所 山武考古学研究所年報No18 研究所案内 埋蔵文化財の整理事業のご案内 業務経歴—昭和46年～平成10年度—		2000 2000 2000 2000
	里見氏稲村城跡を保存する会 里見氏稲村城跡をみつめて 里見氏稲村城跡をみつめて	第三集 シンポジウム「里見氏再考」 第四集 シンポジウム「海からみた安房」	1999 2000
東京都	文化庁 遺跡保存方法の検討	水中遺跡	2000
	文化庁 株式会社ぎょうせい 文化庁月報 4月号 文化庁月報 5月号 文化庁月報 6月号 文化庁月報 7月号 文化庁月報 8月号 文化庁月報 9月号 文化庁月報 10月号 文化庁月報 11月号 文化庁月報 12月号 文化庁月報 1月号 文化庁月報 2月号 No389 文化庁月報 3月号 No390	特集 文化政策の充実に向けて 特集 現代舞台芸術の人材養成 特集 文化財建造物の修理 特集 国際文化交流の推進—中国および韓国との交流 特集 著作権保護の充実のために 特集 公立文化会館の活性化 特集 美術の21世紀を展望する 特集 美術の21世紀を展望する 特集 文化財保護法50年記念 特集 国語審議会答申 特集 世界遺産 〈特集〉情報技術（IT）の進展と国際著作権システム	2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2001 2001 2001
	文化庁 第一法規出版株式会社 月刊文化財 3 月刊文化財 4 月刊文化財 5 月刊文化財 6 月刊文化財 7 月刊文化財 8 月刊文化財 9 月刊文化財10 月刊文化財11 月刊文化財12 月刊文化財 1 月刊文化財 2 月刊文化財 3	平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成12年 文化庁文化財保護部監修 平成13年 文化庁文化財保護部監修 平成13年 文化庁文化財保護部監修 平成13年 文化庁文化財保護部監修	2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2000 2001 2001 2001
	文化庁 三和総合研究所 国民の文化に関する意識調査 国民の文化に関する意識調査 芸術活動に関する意識調査 —芸術家・芸術団体に関する調査— 地方公共団体の文化行政に関する実態調査 報告書	一般国民編 調査報告書 児童・生徒編 調査報告書 芸術家・芸術団体に関する調査 報告書	2000 2000 2000 2000

	文化と経済に関する調査 調査報告書		2000
	㈱ジャパン通信情報センター		
	文化財 発掘出土情報 4	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 5	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 6	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 7	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 8	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 9	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 10	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 11	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 12	歴史・考古の情報誌	2000
	文化財 発掘出土情報 1	特集 旧石器発掘めぐり	2001
	文化財 発掘出土情報 2	特集 '00考古学 発掘この一年	2001
	文化財 発掘出土情報 3	【巻頭グラビア】秋田県森吉町 日廻りA道路	2001
	㈱東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター		
	研究論集Ⅲ	東京都埋蔵文化財センター	2000
	世田谷区教育委員会		
	世田谷区史料叢書 第15巻		2000
	世田谷区史料叢書 第16巻		2001
	世田谷区立郷土資料館		
	記憶の中の風景	一写真で見る世田谷の昭和30年代と今一	2000
	府中市教育委員会		
	道跡のじょうずな楽しみ方	府中市埋蔵文化財調査報告第26集 武蔵国府関連道跡調査報告第2 第2分冊	1999
	早稲田大学考古学会		
	古代 第108号		2000
	新人物往來社		
	歴史読本 4月号	特集 戦国の常識・非常識 全国戦国大名の祈事実の姿	2001
	第一法規出版株式会社		
	全国市町村要覧(平成11年度版)		1999
富山県	財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所		
	埋蔵文化財概要—平成11年度—		2000
	富山考古学	研究紀要第3号	2000
	永代道跡発掘調査レポート	平成11年度 富山県ボランティア埋蔵文化財 保護活動事業発掘体験講座	2000
	発掘調査十年のあゆみ		2000
石川県	金沢市		
	金沢市史	資料編6 近世編 町政と城下	2000
	金沢市史	資料編16 美術工芸	2001
愛知県	財瀬戸市埋蔵文化財センター		
	平成11年度 財瀬戸市埋蔵文化財センター年報		2000
	財瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第8輯		2000
	列島に華開く大室製品 ～西日本の様相～	財瀬戸市埋蔵文化財センター企画展 図録	2000
	豊田市郷土資料館		
	豊田市郷土資料館だより No.32		2000
	南山大学人類学博物館		
	展示品目録1 縄文時代編1	人類学博物館紀要 第19号 (ISSN 0388-8711)	2000
三重県	津市埋蔵文化財センター		
	埋蔵センターニュース 第11号		2000
	四日市市教育委員会		
	四日市市文化財保護年報10 —平成10年度—		1999

滋賀県	滋賀県安土城郭調査研究所		
	滋賀県安土城郭 調査研究所年報 1999年度		1999
京都府	財京都府埋蔵文化財調査研究センター		
	京都府埋蔵文化財情報 第75号		2000
	京都府埋蔵文化財情報 第76号		2000
	京都府埋蔵文化財情報 第77号		2000
	京都府埋蔵文化財情報 第78号		2000
	京都市歴史資料館		
	京都市歴史資料館年報 №18	平成12年度事業計画・平成11年度事業報告	2000
	京都市の文化財	新指定・登録の美術工芸品	2000
	財京都府埋蔵文化財研究所		
	研究紀要 第3号		1996
	城陽市教育委員会		
	城陽市埋蔵文化財調査報告書		2000
	財長岡京市埋蔵文化財センター		
	長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成10年度		2000
	うらしまフォーラム実行委員会		
	うらしまシンポ2000	一この伝説の青い海を21世紀へー	2000
奈良県	染織文化財修理所		
	文化財修理報告書 VOL.1 (1999)		1999
	文化財修理報告書 VOL.2 (2000)		2000
	豊中市教育委員会		
	文化財ニュース 豊中 №27		2000
高槻市	荘園物語一遠くまで身近な中世の豊中ー	とよなか文化財ブックレット№8 通史編	2000
	とよなかの農道具		1996
	高槻市教育委員会		
	高槻市文化財年報 平成10年度		2000
	兵庫県		
兵庫県	姫路市教育委員会		
	TSU BOHORI	平成10年度 (1998) 姫路市埋蔵文化財調査略報	2000
	尼崎市教育委員会		
	尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成7年度 (1)		2000
	加東郡教育委員会		
奈良県	埋蔵文化財調査年報ー1999年度版ー	加東郡埋蔵文化財報告書	2000
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター		
	埋蔵文化財センター案内 2000		2000
	埋蔵文化財ニュース	道路整備関連文獻目録	1999
	埋蔵文化財ニュース	出土有機質遺物保存処理の最近の動向	2000
	埋蔵文化財ニュース		2000
	埋蔵文化財ニュース 95	環境考古学1 (道路工場の遺跡)	2000
	埋蔵文化財ニュース 96	1998年度 埋蔵文化財関係統計資料	2000
	埋蔵文化財ニュース 97		2000
	埋蔵文化財ニュース 99	年輪年代法の最新情報ー弥生時代ー飛鳥時代ー	2000
	埋蔵文化財ニュース 100	100号記念特集 最近の調査研究成果	2000
	奈良大学文学部文化財学科		
	一九九九年 文化財學報 第一七集	光森正士先生追悼記念論集	1999
	二〇〇〇年 文化財學報 第一八集		2000
	奈良県教育委員会		
	緑地保全と古墳保護 ー中間報告ー		1970
	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター		

埋蔵文化財ニュース 96	道跡考古実態調査	2000
埋蔵文化財ニュース 101	古代地方官衙道跡関係文獻目録 IV	2000
埋蔵文化財ニュース 102	埋蔵文化写真集考古実態調査の結果 (2000年度)	2000
埋蔵文化財ニュース 103	1999年度 埋蔵文化財関係統計資料	2001
埋蔵文化財ニュース 104	「道跡学をめざした道跡の保存と活用に関する研究集金」2001	
天理大学文学部歴史文化学科考古学専攻研究室		
考古学と民族学とのふれあい	天理大学考古学専攻の紹介	2000
古事	天理大学考古学研究室紀要第 4 冊	2000
奈良県立橿原考古学研究所		
背陵 第101号		1999
背陵 第102号		1999
背陵 第103号		1999
背陵 第104号		1999
橿原考古学研究所年報24 平成 9 年度		1998
橿原考古学研究所年報 1974		1974
橿原考古学研究所年報 昭和50年度 (1975)		1975
橿原考古学研究所年報 昭和53年度 (1977)		1977
橿原考古学研究所年報 昭和53年度 (1978)		1978
橿原考古学研究所年報 昭和54年度 (1979)		1979
橿原考古学研究所年報 昭和55年度 (1980)		1980
橿原考古学研究所年報 昭和56年度 (1981)		1981
橿原考古学研究所年報 昭和57年度 (1982)		1982
橿原考古学研究所年報 昭和58年度 (1983)		1983
橿原考古学研究所年報11 昭和59年度 (1984)		1984
橿原考古学研究所年報13 昭和61年度 (1986)		1986
橿原考古学研究所年報14 昭和62年度 (1987)		1987
橿原考古学研究所年報15 昭和63年度 (1988)		1988
橿原考古学研究所年報20 平成 5 年度 (1993)		1993
橿原考古学研究所年報21 平成 6 年度 (1994)		1994
橿原考古学研究所年報22 平成 7 年度 (1995)		1995
橿原考古学研究所年報23 平成 8 年度 (1996)		1996
考古学論叢 第 3 冊	橿原考古学研究所紀要	1979
考古学論叢 第 4 冊	橿原考古学研究所紀要	1980
考古学論叢 第 5 冊	橿原考古学研究所紀要	1981
考古学論叢 第 6 冊	橿原考古学研究所紀要	1981
考古学論叢 第 7 冊	橿原考古学研究所紀要	1982
考古学論叢 第 8 冊	橿原考古学研究所紀要	1982
考古学論叢 第10冊	橿原考古学研究所紀要	1984
考古学論叢 第11冊	橿原考古学研究所紀要	1985
考古学論叢 第12冊	橿原考古学研究所紀要	1987
考古学論叢 第13冊	橿原考古学研究所紀要	1988
考古学論叢 第14冊	橿原考古学研究所紀要	1990
考古学論叢 第20冊	橿原考古学研究所紀要	1996
考古学論叢 第21冊	橿原考古学研究所紀要	1997
考古学論叢 第22冊	橿原考古学研究所紀要	1999
橿原考古学研究所年報 25	平成10年度 (1998)	1999
橿原考古学研究所紀要 考古学論叢 第23冊		2000
背陵 第105号		2000
背陵 第106号		2000

社団法人 榎原考古学協会			
青陵	(1号~50号)		1996
青陵	(51号~100号)		1998
奈良県立榎原考古学研究所 由良大和古代文化研究協会			
榎原考古学研究所 第6回 公開講演会資料	於 奈良県文化会館		1989
藤ノ木古墳 榎原考古学研究所 公開講演会資料	於 奈良県文化会館		1988
奈良由良大和古代文化研究協会			
研究紀要 第6集			2000
奈良市文化財協会			
桜井市内埋蔵文化財 1997年度 発掘調査報告書1			1998
桜井市内埋蔵文化財 1999年度 発掘調査報告書1			2000
斑鳩町教育委員会			
斑鳩 藤ノ木古墳			1986
斑鳩 藤ノ木古墳			1989
飛鳥資料館			
あすかの石造物			2000
全国史跡整備市町村協議会事務局			
全史協会報	平成11年度 全国史跡整備市町村協議会		2000
岡山県			
岡山市教育委員会			
岡山市埋蔵文化財調査の概要	1998 (平成10年度)		2000
倉敷埋蔵文化センター			
倉敷埋蔵文化財センター年報6	平成10 (1998) 年度		1999
倉敷埋蔵文化財センター年報7	平成11 (1999) 年度		2000
広島県			
広島市教育委員会			
火と暖房具	広島市郷土資料館資料解説書第13集		2000
写真が明かす榎林支廠の姿	～榎林支廠写真集～		1999
広島市文化財団文化科学部文化財課			
弥生ムラ誕生	大開拓時代のひろしま		1999
平成11年度事業記録集			2000
福山市教育委員会			
福山市文化財年報 別冊	平成11年度 早戸東古墳 個人住宅擁壁工事に伴う緊急発掘調査報告書		2000
福山市文化財年報 29	1999 (平成11) 年度		2000
府中市教育委員会			
府中市内道跡5	府中市埋蔵文化財調査報告		2000
広島大学文学部助教授 西別府 元日			
平安時代初期における西海道の地域政治的研究	西海道諸国地域史からみた大宰府支配について		2000
広島大学文学部帝釈峠道跡群発掘調査室			
広島大学文学部帝釈峠道跡群発掘調査室年報Ⅲ			2000
文学部帝釈峠道跡群発掘調査室年報Ⅳ			1998
株式会社広島市教育文化振興事業団 文化財センター			
文化財論文 第1集			1998
山口県			
山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター			
陶けん 第12号	山口県埋蔵文化財センター年報 一平成10年度一		2000
陶けん 第13号	山口県埋蔵文化財センター年報 一平成11年度一		2000
下関市立考古博物館			
下関市立考古博物館年報5	平成11年度		2000
研究紀要 第4号			2000
倭人、文字と出会う			2000
下関市			

	下関市史 資料編VI		2001
	防府市教育委員会		
	平成10年度防府市内道跡発掘調査概要	防府市埋蔵文化財調査概要	2000
徳島県	徳島市教育委員会		
	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要		1999
香川県	高松市教育委員会		
	高松市内道跡発掘調査	平成11年度高松市内道跡	2000
愛媛県	伊予媛県埋蔵文化財調査センター		
	愛比亮	平成11(1999)年度 年報	2000
	紀要愛媛 創刊号叻	愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要	2000
	まいぶんえひめ No.27		2000
	松山市教育委員会・松松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市考古館	
	源氏の時	西部瀬戸内に咲いた、弥生の花	1999
	北九州市立考古博物館		
	北九州市立考古博物館年報		2000
	研究紀要Vol.7		2000
	熊本県埋蔵文化財調査室		
	埋蔵文化財調査室年報16	平成10年度	2000
	研究紀要	第14号	2000
福岡県	福岡県教育委員会		
	福岡県埋蔵文化財発掘調査年報	平成9年度	2000
	福岡市教育委員会		
	福岡市埋蔵文化財年報 vol.13-1	平成10年(1998)度版	2000
	平成11(1999)年度 福岡市埋蔵文化財センター年報 第18号		2000
	福岡市埋蔵文化財センター年報 第19号		2001
	博物館等建設推進九州会議		
	文明のクロスロード Museum Kyusyu 第65号	特集 星の話	1999
	豊前市教育委員会		
	豊前市の岩戸神楽	豊前神楽入門	2000
	文化のかねるまちづくりをめざして	～手づくりコンサートへの挑戦～	2000
	芦屋町教育委員会		
	芦屋町歴史民俗資料館年報 第1号	平成11年度	2000
	三浦町文化財専門委員会		
	三浦町の絵馬・狛犬		2000
	菊田町教育委員会		
	近衛・丘道跡群と近辺の史跡	(石塚山古墳・番塚古墳・御所山古墳)	2000
	菊田町の文化遺産	菊田町文化財詳細分布地図	2000
	近衛・丘道跡群	福岡県京都郡菊田町大字尾倉字近衛・丘所在の道跡群	2000
	一豊前地方出土～縄文の美と祈り～	菊田町歴史民俗資料館夏～秋の特別展示	2000
	菊田 関連事業	カルストフェスティバル	2000
長崎県	長崎県教育委員会		
	九州北部三県 姉妹道跡	九州北部三県姉妹道跡締結記念	2000
	三道跡交流こどもフォーラム 記録集	九州北部三県姉妹道跡締結記念	2000
	南有馬町		
	原城発掘 西海の王土から殉教の舞台へ		2000
熊本県	熊本市教育委員会		
	熊本市埋蔵文化財調査年報 第3号	平成9年度～平成10年度	2000
	新熊本市史編纂委員会		
	市史研究 くまもと (第11号)		2000

宇土市教育委員会		
関ヶ原の戦いから四百年 小西行長公没後400年記念事業		2000
飯野文堂河島書店九州の郷土誌	熊本・野文堂古書目録31号	2000
大分県	大分県教育委員会	
大分県埋蔵文化財年報 8	平成10年(1998)年度版	2000
大分県立先哲史料館		
史料館研究紀要 第5号		2000
大分市歴史資料館		
大分市歴史資料館ニュース No.51 豊後国の眺め		2000
坂ノ市郷土史愛好会		
白水館第17号		2000
大分市大分地区文化財同好会		
平成12年度 大佐井 第18号		2001
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館		
研究紀要IX		1998
大分県立歴史博物館		
大分県立博物館 研究紀要 1		2000
大分県立歴史博物館年報 1999		2000
武蔵町教育委員会 武蔵町文化財調査委員会		
武蔵町の庚申塔		2000
玖珠町		
よみがえる角半礼城		1997
大分の石橋を研究する会		
おおいの石橋		2000
宮崎県	宮崎県教育委員会	
宮崎県文化財年報 平成11年度	宮崎県文化財調査報告書 第44集	2000
宮崎市教育委員会		
浮かび上がる宮崎平野の巨大古墳	生目古墳群シンポジウム'99(報告書)	2000
西都市教育委員会		
西都原古墳研究所・年報		2000
高原町教育委員会		
たかはる文化財通信	柳粉山道跡の発掘調査	2000
鹿児島県	鹿児島県姶良郡蒲生町教育委員会	
日本一の巨樹 蒲生のクス	国指定特別天然記念物「蒲生のクス」保護 増進事業報告書	2000



文化財愛護シンボルマーク

ひろげた両手のひらのパターンによって、日本建築の重要な要素である斗拱（ますぐみ）のイメージを表し、これを三つ重ねることに
よって、文化財という民族の遺産を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承していくという
愛護精神を象徴したものです。

（昭和41年5月26日決定）

大分市埋蔵文化財調査年報 12

2001

発行日

平成13年12月25日

編集・発行

大分市教育委員会文化財室

大分市荷揚町2番31号

〒870-0025 (097) 534-6111

印刷

大分市顕徳町2丁目2-38

備中央印刷
